

特 259

58

兵器保存要領 第一卷

自第一篇
至第三篇

昭和十一年三月陸軍省印刷



始



兵器保存要領訂正加除一覽表

昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	陸 普 年 月 日 同 番 號	訂 正 符 號	訂 正 者
昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	昭和 年 月 日 第 號	陸 普 年 月 日 同 番 號	訂 正 符 號	訂 正 者



兵器保存要領

總目次

第八篇 類 自動車及戰車	第七篇 具 一般車輛及馬	第六篇 彈藥及火工具	第五篇 火 砲	第四篇 銃器類 刀、劍、喇叭及	第三篇 料及器具 兵器保存用材	第二篇 料及素質 兵器構成ノ材	第一篇 通則	總綱 則領
卷二第					卷一第			
第六篇 改正理由書	第十五篇 氣球	第十四篇 鐵道車輛及軌道材料	第十三篇 工具及器具類	第十二篇 動力及電機器具器材	第九篇 類 機及情警報機	第十篇 照相機、聽音	第十一篇 通信機類	第十二篇 眼鏡、計測器及寫真機類
卷三第								

陸普第一二一四號

兵器保存要領改正ノ件關係陸軍部隊へ通牒

昭和十二年三月十二日

陸軍省副官

寺

倉

正

三

兵器保存要領別冊ノ通改正セラレシニ付依命通牒ス

別冊

綱領

細則

第一篇 通則

第二篇 兵器構成ノ材料及素質

第三篇 兵器保存用材料及器具

第四篇 刀、劍、喇叭及銃器類

第五篇 火砲

第一卷

第六篇 彈藥及火工具	第二卷
第七篇 一般車輛及馬具	
第八篇 自動車及戰車類	
第九篇 眼鏡、計測器及寫真機類	
第十篇 通信機類	
第十一篇 照明機、聽音機及情警報機類	
第十二篇 動力及電機器具器材	
第十三篇 工具及器具類	
第十四篇 鐵道車輛及軌道材料	
第十五篇 氣球	
第十六篇 軍樂器	
改正理由書	第三卷

綱 領

- 第一 兵器ハ戰捷獲得ノ重大要素ナリ蓋シ其威力ハ直接勝敗ノ決ヲ左右スルノミナラス克ク之ニ信賴シテ必勝ノ信念ヲ牢固タラシメ得ヘキヲ以テナリ故ニ兵器ハ常ニ之ヲ尊重愛護シ君國ノ爲之ト死生ヲ俱ニスルヲ以テ武人ノ本懷ト爲スヘシ
- 第二 兵器保存ノ目的ハ兵器ニ對シ常ニ適切ナル保護ヲ加ヘテ其精度能力ヲ保全シ以テ戰鬪ニ際シ完全ニ其威力ヲ發揚セシムルニ在リ
- 第三 取扱及手入ノ周密ナルト検査及格納ノ適切ナルトハ兵器保存ノ要道ナリ而シテ死生ノ間之カ取扱ヲ誤ラス困憊ノ際克ク手入ヲ怠ラサルハ實ニ旺盛ナル兵器尊重心ノ發露ニシテ精到ナル訓練ニ依リ甫メテ茲ニ到ルヲ得ヘ

シ故ニ兵器ノ保存ハ教育ト須臾モ離ルヘカラサルモノニシテ彼此相俟チテ
 戦闘ヲ完全ニ遂行シ得ルモノトス

第四 兵器保存ノ要道ハ兵器ノ構造機能ニ精通スルト保存ノ原理ヲ會得スル
 トニ依リ初メテ其實施完キヲ得ヘク又之ニ依リ兵器使用ノ的確ヲ期シ以テ
 其威力ヲ發揚スルニ遺憾無キヲ得ヘシ

輓近兵器ノ種類益々増加シ且其機構愈々精緻トナレルニ伴ヒ兵器智識ノ向
 上ヲ要スルコト亦往時ノ比ニアラス故ニ各級幹部ハ率先兵器ニ親炙シテ其
 機能ヲ究メ以テ之カ保存取扱ニ對シ確乎タル信念ヲ有スルコト緊要ナリ

總 則

第一 兵器ノ保存ハ本要領ニ依リ之ヲ行フノ外箇々ノ兵器ニ關スル細部ノ實施ハ
 當該兵器取扱法ノ規定ニ從フモノトス

第二 兵器ノ保存ヲ良好ナラシムル爲ニハ單ニ其方法ヲ誤ラサルヲ以テ足レリト
 セス兵器構成材料及素質ノ概念ヲ會得シ其精神ヲ理解シテ之カ實施ノ的確ヲ期
 スルヲ要ス之カ爲此等材料及素質ニ關シ其大要ヲ説明ス

第三 兵器保存ノ方法ハ本規定ノ精神ヲ了得シ兵器ノ現況ニ適スル如ク實施スル
 ヲ要スルモ何等據所ナク猥ニ之ヲ變更スルコトハ嚴ニ戒ムルヲ要ス

第四 兵器ニ對スル周到ナル教育ノ實施ハ其保存ヲ良好ナラシムル要件ナリ之カ
 爲一般教育ハ勿論手入、検査、格納等ノ時機ヲ恰ク利用シ實際的教育ヲ施スノ
 著意ヲ緊要トス

第五 普通手入ト精密手入、一時格納ト長期格納等兵器ノ種類ニ依リ其區分明確ナラサルモノニ在リテハ其目的ニ鑑ミ適宜取捨シテ實施スルモノトス

第六 本要領中温度ハ總テ攝氏トス

第七 兵器保存用器具ハ其標準様式ヲ示シタルモノニシテ之カ整備ハ經費ノ關係等ヲ顧慮シ部隊ノ實情ニ即スル如ク選定スルモノトス

第八 本要領ハ主トシテ平時屯營ニ於ケルモノヲ基準トシテ記述シ以テ保存ノ萬全ヲ期スルヲ主眼トス而シテ陣中ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スヘシト雖器具、材料等ノ關係上必スシモ之ニ據リ難キ場合アルヲ以テ平時野外ノ訓練等ヲ利用シ之カ應用ノ方法ヲ教育シ置クヲ要ス

第九 兵器ノ格納及格納品ノ手入ハ主トシテ多數格納ノ場合ニ就キ記述セルモ其他ノ部隊ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スルモノトス

第五 普通手入ト精密手入、一時格納ト長期格納等兵器ノ種類ニ依リ其區分明確ナラサルモノニ在リテハ其目的ニ鑑ミ適宜取捨シテ實施スルモノトス

第六 本要領中温度ハ總テ攝氏トス

第七 兵器保存用器具ハ其標準樣式ヲ示シタルモノニシテ之カ整備ハ經費ノ關係等ヲ顧慮シ部隊ノ實情ニ即スル如ク選定スルモノトス

第八 本要領ハ主トシテ平時屯營ニ於ケルモノヲ基準トシテ記述シ以テ保存ノ萬全ヲ期スルヲ主眼トス而シテ陣中ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スヘシト雖器具、材料等ノ關係上必スシモ之ニ據リ難キ場合アルヲ以テ平時野外ノ訓練等ヲ利用シ之カ應用ノ方法ヲ教育シ置クヲ要ス

第九 兵器ノ格納及格納品ノ手入ハ主トシテ多數格納ノ場合ニ就キ記述セルモ其他ノ部隊ニ於テモ勉メテ之ヲ準用スルモノトス

兵器保存要領

第一篇 通 則

兵器保存要領

第一篇 通則

目次

第一章 要則	一頁
第一節 兵器ニ生スル主ナル損傷	一
第一款 金屬ノ錆	一
第二款 金屬ノ磨滅	三
第三款 銃砲腔面ノ腐蝕	五
第四款 銃砲腔面ノ燒蝕	六
第五款 銃砲腔面ノ除銅	九
第六款 木材ノ腐朽及其他	一一
第七款 皮革ノ硬化及其他	一五

目次

二

第八款 蟲害……………一九

第九款 光學「ガラス」ノ曇及其他……………二三

第十款 「ゴム」ノ變質……………二八

第二節 油、塗料及藥品ノ使用區分及取扱……………二九

第二章 兵器保存ノ一般要件……………四三

第一節 手入……………四四

第二節 取扱……………五二

第一款 使用……………五二

第二款 分解及結合……………五三

第三節 格納……………五五

第一款 長期格納……………五五

第二款 一時格納……………六二

第四節 検査……………六二

第三章 金屬製品……………六七

第一節 手入……………六七

第二節 取扱……………七二

第三節 格納……………七四

第四節 検査……………七五

第四章 木、竹及籐製品……………八一

第一節 手入及取扱……………八一

第二節 格納……………八二

第三節 検査……………八三

第五章 皮革製品……………八六

第一節 手入……………八六

目次

三

四

第二節 取扱	八九
第三節 格納	九〇
第四節 検査	九六
第六章 麻及綿製品	九八
第一節 手入及取扱	九八
第二節 格納	九九
第三節 検査	一〇〇
第七章 毛類及毛製品	一〇一
第一節 手入及取扱	一〇二
第二節 格納	一〇三
第三節 検査	一〇四
第八章 ゴム類製品	一〇四

五

第一節 手入	一〇五
第二節 取扱	一〇六
第三節 格納	一〇七
第一款 軟質加硫ゴム	一〇八
第二款 エポナイト	一〇九
第四節 検査	一一〇
第九章 ベークライト製品	一一一
第十章 ファイバー製品	一一三
第十一章 雲母及マイカナイト製品	一一四
第十二章 セルロイド製品	一一七
第十三章 陶磁器製品	一二九
第十四章 炭素製品	一二一

第十五章	ガラス製品	一三三
第一節	手入	一三三
第二節	取扱	一二五
第三節	格納	一二六
第四節	検査	一二八
第十六章	夜光塗料塗布品	一二八
第十七章	電池類	一三〇
第一節	手入	一三〇
第二節	取扱	一三二
第三節	格納	一四三
第四節	検査	一四八
第十八章	線索類	一五四

第一節	手入	一五四
第二節	取扱	一五八
第三節	格納	一六〇
第四節	検査	一六四
第十九章	気蓄罐	一六六
第一節	取扱	一六六
第二節	格納	一六八
第三節	検査及手入	一六九

附圖

第一	革ノ微	
第二	兵器害虫圖	
第三	光學「ガラス」ノ曇	

第四 湿度ニ依ル「コバルト」紙變色圖

八

兵器保存要領 第一篇 通則 目次終

兵器保存要領

第一篇 通則

第一章 要則

兵器ノ保存ニ方リテハ先ツ其損傷生起ノ原因ヲ理解シテ之レカ豫防ヲ適切ニスルト共ニ保存用油、塗料及藥品類ノ用法ヲ了得シテ其使用ヲ誤ラサルコト肝要ナリ

第一節 兵器ニ生スル主ナル損傷

第一款 金屬ノ錆

第一 金屬ノ錆ハ鐵ト夫レ以外ノ金屬トニヨリ性質ニ大ナル差異アリ

一 鐵ノ錆

鐵ト空氣中ノ酸素、酸類及水トノ化學作用ニ因ルモノニシテ鐵ヲ大氣中ニ放置スル

要則

一

トキハ大氣中ノ炭酸ノ作用ヲ受ケテ炭酸鐵ヲ生シ次テ水分及酸素ト作用シテ水酸化
第二鐵即チ錆ヲ生スルモノトス

其他電解又ハ菌類ノ作用ニ因リ錆ヲ生スルコトアリ

鐵ノ錆ハ其質緻密ナラスシテ内部ノ金屬ヲ保護スルコトナク能ク濕氣及大氣ヲ吸收
シ反テ爾後ノ侵蝕ヲ促進スル媒介トナリ一度發錆スルヤ其部ヲ全ク除去スルニアラ
サレハ終ニ全部ヲ侵蝕スルニ至ルモノトス

二、鐵以外ノ金屬ノ錆

青銅、黃銅、「アルミニウム」、銅、錫、亞鉛、「ニッケル」、「クロム」等ハ常溫ニ於テ
ハ大氣及濕氣ノ作用ニ因リ全ク侵蝕セラレサルカ或ハ侵蝕セラレルモ單ニ其外表面
ニ止マリ且此際其表面ニ生シタル薄キ膜層ハ其質頗ル緻密ニシテ固ク附著シ能ク内
部ノ金屬ヲ保護スルモノニシテ爾後侵蝕作用ヲ下層ニ及スコトナシ從テ此種金屬ヨ
リ成ル製品及「メッキ」ヲ施シタル鐵部ニ對シテハ特ニ人工的防錆法ヲ施ササルヲ一

般トス然レトモ此等ノ錆ハ他ノ物質特ニ皮革製品ニ接觸セルモノハ該部ニ對シ不利
ナル影響ヲ與フルコトアルヲ以テ除去スルコト必要ニシテ又「メッキ」ヲ施シタルモ
ノト雖其作業完全ナラサルモノニ在リテハ「メッキ」膜ニ存スル氣孔ヨリ濕氣等ヲ侵
入セシメ鐵面ニ發錆ヲ誘起シテ「メッキ」膜ヲ剝脫スルニ至ルコトアルヲ以テ完全ニ
之ヲ保護スル爲ニハ適宜ノ防錆法ヲ施スヲ可トスルコトアリ

第二 防錆法

金屬ノ發錆ヲ防止スルニハ之ヲ乾燥空氣中ニ保存スルカ又ハ塗料、防錆油等ヲ以テ其
表面ヲ包被シ直接空氣、水、酸類及鹽化物等ニ觸レシメサル如クスルヲ要ス

兵器ノ鐵部ハ通常摩擦部ヲ除キ「メッキ」(錫、亞鉛、「ニッケル」、「クロム」等)、錆染(藥品ニ依ル
酸化膜ノ構成)、「パーカライジング」(同上)、「ボンデライト」(同上)、染烘(加熱ニ依ル酸化膜
ノ構成)又ハ塗料等ニ依ル防錆法ヲ施シ尙重要部分ニハ耐錆鋼ヲ使用シアリ

第二款 金屬ノ磨滅

要則

第三 磨滅ノ現象

金屬ノ摩擦面ハ勉メテ精密ニ研磨スト雖尙微小ノ凹凸ヲ免レス而シテ兩面ヲ直接接觸セシムルトキハ互ニ擦リ潰サルルト共ニ摩擦熱ヲ發生シ竟ニハ異常ノ高温度ニ達シテ磨滅ヲ速ニシ時トシテ該部ニ燒付ヲ生シ損廢ニ陥ラシムルコトアリ運動速度ノ大ナルモノニ於テ其影響殊ニ大ナリ

第四 防擦法

磨滅ヲ減少スル爲ニハ摩擦兩面間ニ潤滑油其他ノ防擦劑ヲ介在セシムルモノトス然ルトキハ固體表面相互ノ直接摩擦ヲ絶チテ液體ノ内部摩擦ニ變シ且熱ヲ吸收放散スル作用比較的大ナルヲ以テ摩擦ノ害ヲ著シク輕減スルコトヲ得ヘシ

摩擦面ニ於ケル防擦劑ノ厚サカ某限度以下ニ減少スルトキハ固體表面間ノ摩擦ヲ混スルニ至ルヲ以テ軸部ノ如キハ成ルヘク摩擦係數小ニシテ交換容易且熱ノ良導體タル金屬ヲ選擇シ油室ヲ特設シ且形狀ノ恰適等ニ注意シテ製作セラレアルヲ一般トス

第三款 銃砲腔面ノ腐蝕

第五 腐蝕ノ原因

一 銃砲腔面ノ腐蝕ハ主トシテ火藥ノ燃燒ニ依リ生シタル酸化窒素及此酸化窒素カ水分ヲ得テ化成セル硝酸ノ酸化作用ニ基クモノニシテ尙雷管ニ填實シアル爆粉中ノ鹽素酸「カリ」カ發射ノ高熱ニ依リ鹽化「カリ」ヲ生シ更ニ潮解シテ生シタル鹽酸ノ作用ニ依リ生ス

空包發射ノ場合ハ實射ノ場合ニ比シ腔壓低ク火藥ノ燃燒完全ナラスシテ有害ナル酸化窒素等ヲ發生シ易シ

二 前項腐蝕ノ原因トナルヘキ有害物ハ腔面ノ燒蝕痕、腐蝕痕又ハ製造ノ際ニ生スル工具ノ疵痕ノ凹部等ニ潜在シ或ハ火藥「ガス」ノ高壓ノ爲金屬内部ニ壓入セラレ又ハ腔面ニ附著セル被甲、彈帶等ノ下層ニ殘留ス

第六 腐蝕ノ豫防

要則

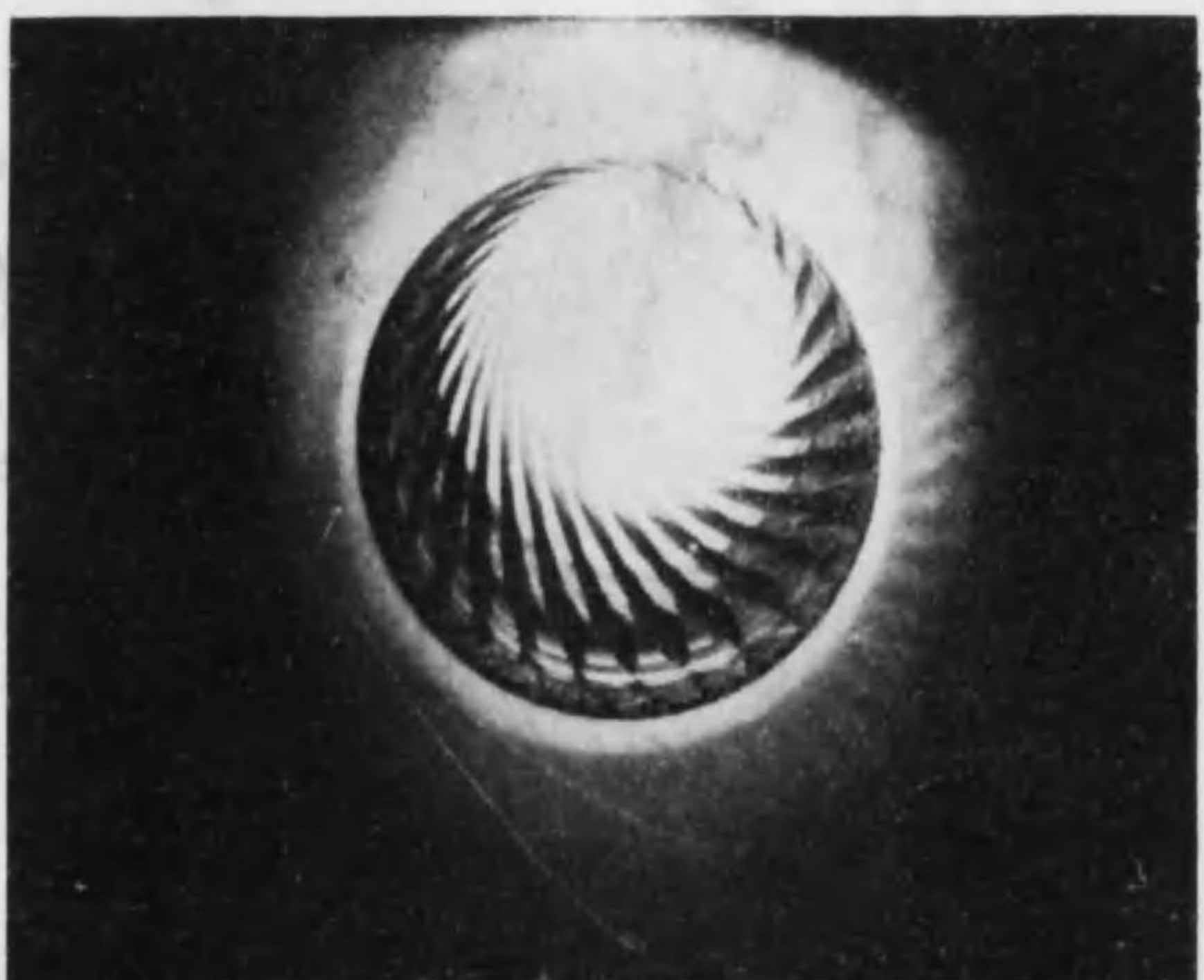
六
腐蝕ヲ豫防スル爲ニハ腔中洗滌液、腔中油等ヲ以テ腔面ヲ洗滌スルモノトス腔中洗滌液ハ腔表面ノ有害物ヲ溶解除去シ腔中油ハ腔面凹部ニ侵入セル有害物ヲ溶解シテ浮出セシムルト共ニ水分ノ侵入ヲ妨ケ硝酸ノ化成又ハ鹽化「カリ」ノ潮解ヲ防止ス

第四款 銃砲腔面ノ燒蝕

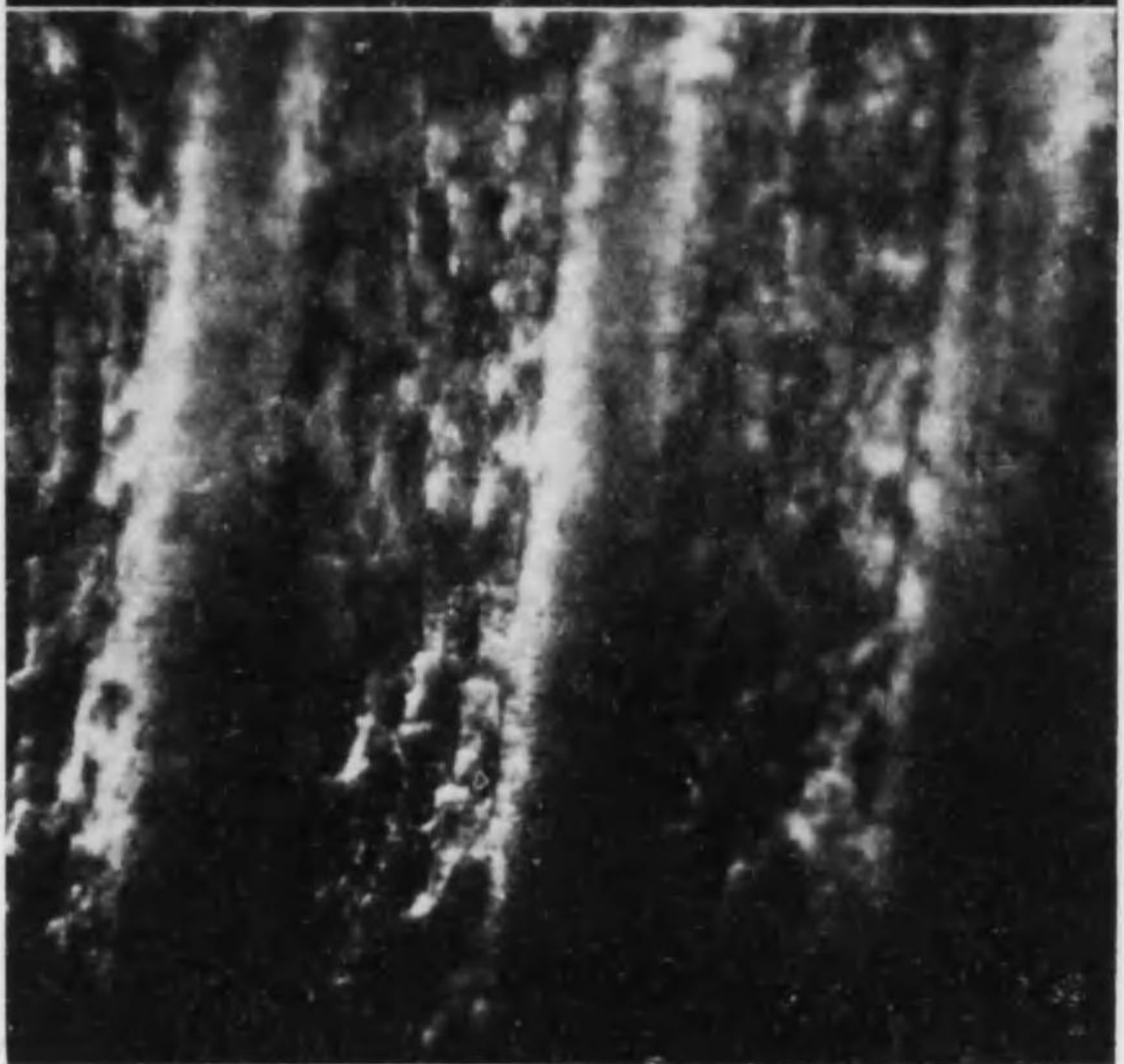
第七 燒蝕ノ原因

燒蝕トハ火藥「ガス」ノ高熱、高壓及彈丸運動ノ機械的作用等ニ依リ腔面ノ金質脆弱トナリ其組織ヲ損壞セル現象ヲ謂フ即チ火藥「ガス」ノ爲高熱セラレタル腔表面ハ傳導ニ依リ急冷シ宛モ燒入ト同様ノ關係ヲ生シ金質ヲ硬化シ又彈丸ニ從フ高壓「ガス」ノ通過ニ依リ削磨セラレ或ハ彈丸ノ摩擦ニ依リ衝擊強磨等ノ作用ヲ生起シ金質ヲ硬化シ此腔面ノ硬化層ト軟層トノ不齊一ナル膨脹收縮ニ因リ燒蝕ヲ生スルニ至ルモノトス

第一圖 燒蝕



(1)



(2)

燒蝕ノ始メハ腔面光澤ヲ失ヒ恰モ燼渣ノ附著シアルカ如キ外觀ヲ呈セル微細ノ皺紋ヨリ成ル細網ヲ成シ藥室腔面ニ連接スル圓臺連接部ノ近傍ヨリ施綫部ニ互リ發生スルモノニシテ爾後射撃回数増加スルニ從ヒ益、其程度ヲ増加シテ遂ニ龜裂ヲ生スルニ至リ此龜裂部ト彈帶トノ間ニ間隙ヲ生シ火藥「ガス」ハ該間隙ヲ大ナル速度ヲ以テ通過シ燒蝕ハ縱方ニ於テ益、擴大セラレ且内部ニ侵蝕スルモノトス是彈帶ニ使用スル金質ハ此龜裂ヲ全ク填塞スル程柔軟ナラサルカ爲ナリ而シテ腔内ニ於ケル彈丸其速率ヲ増加シ腔壓漸次減少スルニ至ラハ高熱「ガス」ハ噴出消失スヘシ故ニ燒蝕ヲ生スル部分ハ先ツ腔綫起部ニシテ漸次前方ニ促進スルモノトス

第八 燒蝕ノ豫防

腔綫起部附近ノ手入不良ニシテ該部ニ腐蝕ヲ生シ或ハ彈帶ニ損傷アル彈丸ヲ使用スルトキハ填塞確實ナラサルヲ以テ燒蝕ヲ發生シ又ハ促進スルコト大ナルモノトス之カ爲

彈帶ノ保護ニ注意シ且腔綫起部ノ拭淨塗油ヲ十分ナラシムルコト緊要ナリ

第五款 銃砲腔面ノ除銅

第九 射撃ノ爲附著セル銃腔面ノ被甲(白銅又ハ黃銅)及砲腔面ノ銅ハ腔面トノ間ニ火藥「ガス」ヲ潜在セシム

此「ガス」ハ腔中油ニ依リ除去スト雖完全ヲ期シ難ク遂ニ腔面ヲ腐蝕セシムルニ至ルヲ以テ被甲、銅等ノ附著甚シキモノハ勉メテ之ヲ除去スルヲ要ス

第十 除銅法(被甲除去ヲ含ム)

腔面ノ銅及被甲ハ手入ノ際ノ摩擦ニ依リ其一部ヲ除去シ得ヘシト雖通常左ノ方法ニ依リ除去スルモノトス

一 銃腔(口徑小ナル機關砲ヲ含ム)

要則

通常除銅液ニ依ルモノトシ之ヲ使用シ得サルトキハ被銅實包（機關砲ニ在リテハ除銅彈）ヲ發射シテ其摩擦ニ依リ之ヲ除去ス

被銅實包及除銅彈ハ銃身加熱セラレアルトキ特ニ有效ナルヲ以テ機關銃（砲）ニ使用スルニ適スルモノトス

二 砲 腔

通常除銅箔ヲ使用ス但其規定ナキモノ又ハ銅ノ附著甚シキモノハ除銅液ヲ使用スルモノトス

被銅實包及除銅箔ハ主トシテ銅ヲ附著セシメサル爲ニ使用シ除銅液ハ附著ノ程度大ナルモノニ對シテ有效ニ其目的ヲ達スルモノニシテ後者ハ屢々之ヲ行フノ必要ナキモノトス

第六款 木材ノ腐朽及其他

第十一 木材ノ主ナル損傷及豫防法左ノ如シ

區分	原 因	豫 防 法
腐	<p>一 木材ノ能ク乾燥セルモノハ其質堅硬ニシテ彈性アレトモ諸種ノ原因ニ因リ此性質ハ永遠ニ持續スル能ハスシテ早晚變質シ脆弱ト爲リ所謂腐朽ノ状態ヲ呈ス</p> <p>二 乾濕ノ反復作用 乾濕ノ反復交感ハ木材腐朽ノ最大原因ニシテ此作用ニ遭フトキハ速ニ成分ヲ溶解分離スルモノナリ此現象ハ野外ニ在リテ氣候ノ變化ニ曝露スルモノ殊ニ橋杭或ハ電柱等水面或ハ地面トノ接際部ニ於テ著シ</p> <p>三 乾燥不十分ナル木材ニ塗料ノ塗抹 乾燥十分ナラサル木材ノ表面ニ塗料ヲ施ストキハ木材ノ腐朽ヲ防護セスシテ却テ之ヲ促進ス之塗料ノ爲氣孔ヲ閉塞シ木質中ニ含蓄スル樹液ノ蒸發ヲ阻害スルヲ以</p>	<p>勉メテ乾燥状態ニ保存スルノ外左ノ方法ニ依ル</p> <p>一 「クレオソート」其他ノ藥液ヲ塗布又ハ注入シ濕氣ニ對シ不感性タラシム</p> <p>二 外面ニ外氣ト絶縁シ得ヘキ塗料ヲ塗施ス</p>
朽		

要則

反	朽 腐
<p>一 木材ノ各部等質ニシテ硬軟ノ差ナキトキハ其收縮ノ度モ亦等齊ナルヘキモ木材ハ其樹心部ヨリ皮部ニ近ツクニ從ヒ其質柔軟粗糙トナルカ故ニ收縮ノ度モ亦一樣</p>	<p>四 テナリ 濕潤 木材ヲ水中ニ浸漬シ置クトキハ木質中ニ含蓄スル樹液ヲ溶解放散セシメ有害ナル成分ヲ除去シ以テ腐敗ヲ防キ乾燥後長期間ノ保存ニ耐フルモ浸漬ノ期間過長ナルトキハ其水ニ溶解スヘキ部分ハ悉ク溶解シ爾後之ヲ乾燥スルモ既ニ腐朽シテ其質脆弱トナリ外力ニ耐フル能ハサルニ至ル之常ニ濕潤ノ爲抱合物ヲ離解シ加フルニ酸化作用ヲ受ケタルニ基因スルモノナリ</p> <p>五 酸化 木材ヲ常ニ乾燥シ大氣中ヨリ濕氣ヲ吸收スルコト僅少ナル状態ニ在ラシムレハ能ク長年月ノ保存ニ耐フルト雖某限度ノ歲月ヲ經過スルトキハ漸次彈性及抗力ヲ減シ遂ニ腐朽シ外力ニ耐フル能ハサルニ至ルモノトス之濕氣中ニ含有スル酸素ニ依リテ漸次酸化セララルルニ因ル</p>
<p>直射日光ニ觸レシメサルヲ要ス</p>	<p>111</p>

縮 收 及 リ
<p>第二圖 反リ</p>  <p>第三圖 縮收</p> <p>ナラス爲ニ其形狀ヲ變ス之ヲ「反リ」ト謂フ</p> <p>二 木材ハ乾燥スルニ從ヒテ水分ヲ放散シ次第ニ體積ヲ減シ其質緻密、堅硬トナル之ヲ木材ノ收縮ト謂フ</p> <p>三 木材ハ樹心ニ至ルニ從ヒ髓線ノ抵抗強大ナルノミナラス其層老熟ニシテ纖維緻密、強硬トナルモ樹心ヲ遠サカルニ從ヒ其質柔軟疎鬆ニシテ此部ニ稍、多量ノ樹液ヲ含蓄シ之ヲ放散スレハ數多ノ罅隙ヲ生ス故ニ外周ニ近ツクニ從ヒ收縮度ヲ増シ又年輪(圓周)方向ハ半徑方向ヨリ收縮ノ度大ナリ故ニ乾燥スレハ收縮、「反リ」ヲ免レス而モ此收縮、「反リ」ハ不整ニシテ其景況一樣ナラス</p>
<p>111</p>

要則

割	乾	裂
<p>一 木材ハ一般ニ纖維ノ方向ニ割裂スル性質ヲ有ス此性質ハ纖維直通ナルト髓線ノ大ナルトニ從ヒ益々大ニシテ纖維眞直ニシテ樹幹無枝ナレハ割裂スルコト極メテ容易ナリ之ニ反シテ瘤又ハ節ノ爲ニ纖維屈曲セルモノハ割裂シ難シ</p> <p>二 木材ハ縱ニ割裂シ易キモ横ニハ殆ト割裂セス又半徑方向ニ割レ易ク圓周(年輪)方向ニ割レ難シ之髓線ニ依リ年輪ヲ連続結合スル作用ヲ爲スニ因ル從テ髓線多キモノ程抱合力大ナリ</p>	<p>木材ヲ乾燥スルトキハ往々割裂ヲ生ス之木材ノ各部等質ナラサルト内外乾燥ノ度ヲ異ニスルニ基因ス即チ内部尙水分ヲ帶ヒ濕熱ノ爲膨脹ノ状態ニ在ルニ際シ外部ハ速ニ乾燥スル爲其體積ヲ減少シテ内部ヲ壓迫ス其程度小ナレハ纖維相互ノ伸縮ニ依リテ平衡ヲ保チ得ルモ乾濕ノ差著シキトキハ遂ニ割裂ヲ生スルニ至ル而シテ其乾裂ハ板目ニ多クシテ柾目ニ少シ</p>	<p>一 乾燥ヲ平等ニ且除ニ行フコト</p> <p>二 板類ハ成ルヘク柾目ニ挽割リ置クコト</p> <p>三 木口ヲ大氣中ニ暴露セサルコト之カ爲木口ニ紙ヲ貼附スルカ若ハ「ペイント」、「ワニス」類ヲ塗布スルヲ可トス</p> <p>四 柱ノ如キモノハ豫メ其一面ヲ通シテ鋸目ヲ加ヘ栓ヲ打ち込ミ内外ノ平衡ヲ保タシメ以テ他面ニ割裂ヲ生セサル如ク豫防スルコトアリ</p> <p>五 木材ヲ格納スルニ方リ堆積スル場合ニハ兩端ノ枕木ハ木口ニ接近セシメ置クコト</p> <p>六 樹心ヲ除去スルコト</p>



第四圖 乾裂

第七款 皮革ノ硬化及變質

第十二 皮革ノ硬化、變質等ノ原因及豫防法左ノ如シ(附圖第一)

區分	原因	豫防法
<p>質 變</p> <p>生發ノ徴</p>	<p>皮革ニハ各其用途ニ從ヒ製革ノ際適當ノ油脂ヲ施與シテ濕氣ノ吸收ヲ防キ且纖維間ノ摩擦ヲ減シ以テ其固有力ヲ増加シアルモノト然レトモ革質中ノ含有油脂ハ摩擦作用及空氣中ニ於ケル自然作用ニ依テ漸次之ヲ消失シ皮革ハ硬固脆弱ニ傾キ其固有力ヲ減スルニ至リ又日常使用ノモノニ在リテハ纖維相互ノ摩擦ノ爲革質ノ毀損ヲ惹起スルニ至ルモノトス</p>	<p>一 適當ノ施油ヲ爲シ消失油脂ヲ補給シテ成ルヘク製革當時ノ性状ヲ保持セシムルコト</p> <p>二 革脂ノ品質ヲ選定シ且給油量ヲ適當ニスルコト</p>
<p>質 變</p> <p>生發ノ徴</p>	<p>皮革ニハ各其用途ニ從ヒ製革ノ際適當ノ油脂ヲ施與シテ濕氣ノ吸收ヲ防キ且纖維間ノ摩擦ヲ減シ以テ其固有力ヲ増加シアルモノト然レトモ革質中ノ含有油脂ハ摩擦作用及空氣中ニ於ケル自然作用ニ依テ漸次之ヲ消失シ皮革ハ硬固脆弱ニ傾キ其固有力ヲ減スルニ至リ又日常使用ノモノニ在リテハ纖維相互ノ摩擦ノ爲革質ノ毀損ヲ惹起スルニ至ルモノトス</p>	<p>一 防微劑ヲ混シタル革脂ヲ塗施ス</p> <p>二 皮革製品ニ附着シアロ胞子ノ發育ノ機會ヲ</p>

要則

一五

質 變	
質變ノ油脂加	生 發 ノ 微
<p>保存用油脂ハ貯藏間空氣ニ觸レテ酸敗シ又加脂油ハ「タンニン」中ノ酵素、若ハ微ノ作用ニヨリ共ニ遊離脂肪酸ヲ生シ革質ヲ侵害ス</p> <p>又加脂油ハ其含ム硬質油ノ析出、不乾性油ノ混入使用、革ノ重量増加ノ爲加ヘラレタル無機鹽類等ノ原因ニヨリ變質シ前項脂肪酸ト共ニ革ノ表面ニ汚キ斑點(「スピニュー」ト稱ス)ヲ生ス</p>	<p>品ニ附着シ發育ニ必要ナル三要素即チ營養(蛋白質、含水炭素等)、溫度(二〇—三〇度)並水分(一〇—二〇%)以上ノ含水量)ノ供給ヲ受クルトキハ漸次増大分岐シテ寄生ヨリ發育ニ必要ナル營養分ヲ吸收シ纖維狀ノ菌絲トナリ寄生ナル革ノ實質中ニ存在スル微細ナル氣孔中ニ潛入シ終ニ網狀絲ヲ組織シ革ノ實質ヲ纏繞スルニ至ル而シテ此等ノ菌絲ハ酵素ヲ出シ革質中ノ「タンニン」並加脂油ヲ分解シ自己發育ノ養分トシテ之ヲ吸收ス故ニ革ニ一旦微甚シキニ至レハ遂ニ皮革製品ハ使用ニ堪ヘサルニ至ルヘシ</p>
<p>保存用油脂ノ選擇ニ注意シ酸敗性尠キモノヲ選ビ又酸敗ノ原因除去ニ勉ム</p> <p>革ニ水分ノ含有微ノ發生不潔物ノ附着ヲ防止ス</p> <p>斑點ハ溶劑ヲ浸マセタル布片等ヲ以テ拭淨除去ス</p>	<p>得シメサル爲清淨、乾燥ニシテ溫度低キ所ニ格納シ又ハ手入ヲ完全ニシテ密閉格納スヘシ</p> <p>三、濕氣ハ發微ニ影響スルコト最モ大ナルモノトス故ニ濕氣多ク且溫暖ナル季節即チ春季ノ終リヨリ夏季就中梅雨期等最モ發微ヲ促進スル時機ニ於テハ屢々拭淨ヲ實施シタル後僅ニ革ヲ塗施スルヲ可トス</p>

第十三 前項ノ外物ノ皮革ニ及ス作用概ネ左ノ如シ

名 稱	作 用	注 意
酸	革質ヲ腐蝕シ大ニ其固有抗力ヲ減損ス	皮革製品ニ接觸セシムルコトヲ避クルヲ要ス
「アルカリ」	革質ヲ脆弱ニシ大ニ其固有抗力ヲ減殺ス	止ムヲ得サル場合ノ外水洗ヲ避クルヲ要ス
冷 水	<p>革ヲ水中ニ浸漬スルトキハ纖維漸ク膨脹シテ固有ノ硬度ヲ減シ延伸性ト耐伸力トヲ増加ス之ヲ乾燥スレハ殆ト舊態ニ復シ少シク硬化シ且褐色革ハ其色濃厚トナル然レトモ長時間水中ニ浸漬シタルモノハ脂油分ヲ遊離シ且固有抗力ヲ減損ス</p> <p>一度浸水シタル革ヲ空氣ノ流通不良ニシテ溫暖ナル場所ニ放置スルトキハ速ニ微ヲ發生シ日光ニ曝セハ硬固トナリ表面變色シ且龜裂ヲ生ス</p>	
食 鹽	<p>褐色革ハ其色濃變シ黑色革ハ漸次變色シ共ニ其質ヲ柔軟ナラシム又梅雨ノ候ニ在リテハ之カ爲ニ微ノ發生ヲ急速ナラシム食鹽水中ニ革ヲ浸ストキハ殆ト冷水ト同様ノ結果ヲ呈シ其質ヲ不良ナラシムルモ乾燥後硬化スルコトナシ</p>	

要 則

一七

一六

昇 汞	「ナフタリン」 「パラヂクロルベンゼン」	「ホルマリン」	「クロロピクリン」	鐵
稀釋セル昇汞ハ革質ニ對シ殆ト變化ヲ及ホササルカ如シ	革質ニ對シテ無害ナルモノハ「コールドタール」混在スル爲往々斑點ヲ生スルコトアリ	「ガス」狀トシテ使用スルハ差支ナキモ液狀ノモノハ革質ノ硬化ヲ促進ス	氣化狀ニテ使用スルトキハ何等ノ作用ヲナサズ 液狀ノ儘附着スルトキハ革質ヲ稍、硬化セシムルモノノ如シ	鐵ヲ接觸スルトキハ革色ヲ黑變シ時ヲ經ルニ從ヒ漸次纖維ヲ侵蝕ス
皮革製品消毒液トシテ使用スル際附屬金具ヲ腐蝕スルヲ以テ注意ヲ要ス	直接革面ニ接觸セシメサルヲ可トス	液ニ浸漬シテ殺菌ヲ行フカ如キコトハ屢、行ハサルヲ可トス	本劑ハ水分ノ存在スルトキ鐵ヲ腐蝕セシムルヲ以テ注意ヲ要ス	革ニ接スル鐵具ハ豫メ防錆法ヲ施シ又貯藏品ハ成ルニテ包ムヲ可トス 紙ニテ包ムヲ可トス

光 線	黃 銅	鐵ニ準ス
直射光線ハ甚タ不可ナリ之種革ニ使用スル「タニン」酸ハ光線ニ感シ易ク之カ爲革質ヲ脆弱ナラシムルヲ以テナリ	革ニ接スル部分ニ生シタル綠青ハ其ノ種類ニ依リ有害ナルモノアリテ此種ノモノハ革ノ外觀ヲ損スルノミナラス其銀面ヲ脆弱ニシ且全體ノ張力ヲ著シク減退セシム	皮革製品ノ格納ハ暗所ヲ可トス

第八款 蟲 害

第十四 兵器ヲ損傷スル害蟲ノ狀況左ノ如シ(附圖第二)

害 蟲	發 育	色	相	被 害 品
い が	一年一回發生シ幼蟲ノ儘越年シ四月下旬蛹化シ成蟲ハ五、六月頃ヨリ十月頃マテ現ル幼蟲ハ筒巢ヲ作ル	成蟲ハ淡褐色ニシテ前翅ニ二箇ノ暗褐色ノ斑紋ヲ有ス幼蟲ハ帶黃灰白色、頭部ハ赤褐色ニシテ白色ノ粗毛ヲ有ス	羽毛・毛物	羽毛・毛物

あさのばんむし	ひめかつをぶし	ひめまるかつをぶしむし	もうせんが	こいが
一年一回發生シ六月ヨリ八月頃マテ成蟲ヲ見ル	一代凡ソ二箇年ニシテ幼蟲ノ儘ニ冬ヲ越年シ第三年目ノ五月上旬蛹化シ五、六月頃成蟲トナル	一年一回發生シ概ネ幼蟲ノ儘越年シ四月中旬蛹化シ五、六月頃成蟲トナル	一年一回發生シ幼蟲ノ儘越年シ翌春五月頃蛹化シ六月頃成蟲トナル	一年一回發生シ第一回ハ五、六月第二回ハ八、九月頃成蟲トナル
成蟲ハ淡褐色ニシテ透明ナル翅ヲ具フ幼蟲ハ灰白色	成蟲ハ淡褐色ニシテ白色ノ粗毛ヲ以テ縦溝線ヲ被フ幼蟲ハ帶灰白色ニシテ頭部赫褐色ヲ呈ス	成蟲ハ黒褐色ニシテ褐色及白色ノ鱗片ヲ以テ三波狀斑紋ヲ現ス幼蟲ハ其時ノ食物ノ如何ニヨリ色彩ヲ異ニス	成蟲ハ帶紫褐色ニシテ白色ノ斑紋ヲ有ス幼蟲ハ乳白色ニシテ同色ノ粗毛ヲ有ス	成蟲ハ淡茶褐色、幼蟲ハ乳白色ニシテ形狀概ネいがニ同シ
毛革木凡ハキテ製發材品ノ等	毛織物如ク甜物	羽毛細工類	毛毳	動物標本

こなちやたてむし	ながほそかたむし	しもものしばんむし	たけながしんくひむし
一年少クモ三、四回發生スルモノノ如ク冬期ト雖被害ヲ及スコトアリ	一年一回發生シ幼蟲ノ儘越年ス四月頃ヨリ運動活潑トナリ材外ニ蝕屑ヲ排出シ五、六月頃蟲トナリ七、八月材外ニ飛翔シ産卵ス	一年一回發生シ五、六月頃成蟲ヲ見ル	一年一回發生シ五、六月頃成蟲ト爲リ六、七、八月頃竹外ニ飛翔シ産卵ス
成蟲ノ體ハ暗褐色ニシテ透明ナル翅ヲ具フ幼蟲ハ灰白色	成蟲ハ暗褐色	成蟲ハ淡暗赤褐色	成蟲ハ灰白色ニシテ同色ノ粗毛ヲ有ス
毛革木凡ハキテ製發材品ノ等	かきんし	かきんし	竹

第十五 防蟲法及殺蟲法左ノ如シ

要則

法 殺 蟲	法 防 蟲	區 分	
		要 旨	實 施 要 領
卵ハ産卵後概ネ十日前後ニシテ幼蟲ト爲リ春暖ノ候ヨリ盛ニ活動ヲ開始シテ被害物ヲ蠶蝕ス故ニ幼蟲ヲ發見セハ直ニ殺蟲法ヲ實施スルヲ要ス	害蟲ノ成蟲ハ春季ヨリ秋季ニ至ル間ニ於テ飛翔シ産卵ノ場所ヲ求ムルヲ以テ此期間ニ於テハ成ルヘク蟲害ヲ被リ易キ兵器ノ屋外ニ於ケル手入ヲ避クルト共ニ防蟲法ニ依リ害蟲ノ近接ヲ防止スルヲ要ス 此等兵器ノ手入ハ概ネ三月下旬ヨリ四月ニ亘ル間ニ於テ行フヲ適當トス	「バラヂクロルベンソール」六鹽化「エタン」其他ノ防蟲劑ト共ニ密閉又ハ被包ス	一 昇汞水又ハ「アルコール」塗布後「セラツクワニス」ヲ塗布ス 二 「クレオソート」ニ浸漬シ又ハ同油ニテ拭淨ス
「クロルピクリン」又ハ「サイローム」ノ燻蒸ハ第三篇第一章ニ依ルノ外向左ノ如ク注意スヘシ 一 燻蒸ハ成ルヘク兵舎等ト離隔シ且密閉容易ナル倉庫又ハ少量ナルトキハ密閉箱ヲ使用スルヲ可トス蓋シ實施後之ヲ開放シタルトキ眩暈等ヲ起サシムルコトアルヲ以テナリ 二 燻蒸ニ使用スヘキ建物ハ入口ヲ密閉(要スレハ目塗土等ヲ使用ス)スルノ外天井、壁、床板等「ガス」漏洩ノ虞アル箇所ニ目張ヲ施スモノトス	「バラヂクロルベンソール」六鹽化「エタン」其他ノ防蟲劑ト共ニ密閉又ハ被包ス	一 「クロルピクリン」又ハ「サイローム」ニ依リ燻蒸ス 二 「バラヂクロルベンソール」ト共ニ密閉ス	一 「クレオソート」又ハ「クロルピクリン」ヲ注入ス

注 意
「クロルピクリン」又ハ「サイローム」ノ燻蒸ハ第三篇第一章ニ依ルノ外向左ノ如ク注意スヘシ 一 燻蒸ハ成ルヘク兵舎等ト離隔シ且密閉容易ナル倉庫又ハ少量ナルトキハ密閉箱ヲ使用スルヲ可トス蓋シ實施後之ヲ開放シタルトキ眩暈等ヲ起サシムルコトアルヲ以テナリ 二 燻蒸ニ使用スヘキ建物ハ入口ヲ密閉(要スレハ目塗土等ヲ使用ス)スルノ外天井、壁、床板等「ガス」漏洩ノ虞アル箇所ニ目張ヲ施スモノトス

第九款 光學「ガラス」ノ曇其他

第十六 光學「ガラス」ノ曇トハ光線ノ透過又ハ反射スヘキ部位カ變質シ或ハ異物(微生物ヲ含ム)ノ作用ニ因リ其機能ヲ損シタルヲ謂フ

第十七 曇ノ成因、状態及豫防法概ネ左ノ如シ(附圖第三)

區 分	成 因 及 状 態	豫 防 法
滴水	雨中ニ於ケル使用又ハ周圍溫度ノ急變ニ依リ「ガラス」ノ外面又ハ内面ニ結露スルモノニシテ氣温ノ狀況ニ依リ稀ニ霜ノ状態ヲ呈スルコトアリ	使用法ニ注意スルノ外外面ニハ防曇劑ヲ塗布スルヲ可トス

要 則

毛 根 狀 臺

於テ榮養分ノ存在ヲ必要トス榮養分トシテハ空氣組成分ノ外汚垢、脂油、空中有機物、風化物、細菌及微ノ「ガラス」侵蝕生成物、微蟲ノ殘骸、排泄物等ヲ舉クルコトヲ得微蟲ハ微其他ノ植物ニ依リ生存スルモノノ如ク其排泄物及死體ハ微ノ繁茂ニ有力ナル養分トナリ微蟲自身モ亦或ル種ノモノハ蜘蛛巢狀ノ臺ヲ生起スルコトアルカ如シ發生ノ部位ハ胞子附著ト環境如何ニ依リ何レノ部ニモ發生ス而シテ往々鏡筒等ニ發生スル微カ盛ニ繁茂シテ「ガラス」面ニ侵入スルコトアリ此場合ニハ微ノ繁殖迅速ナルコト多シ

發生ノ狀態ハ望遠鏡ニ於テハ對物鏡側ヨリ注視スルトキハ良ク臺ノ狀態ヲ觀察スルコトヲ得ヘシ種類ニ依リ其形狀ハ木根狀ノモノ、放射狀ノモノ、網狀ノモノ等種々アリト雖繁殖ト共ニ漸次光學兵器ノ明サヲ減シ其價値ヲ失フニ至ルモノトス

一般ニハ徐々ニ進行シ視界全面ニ及フニハ數年ヲ要スルヲ例トス然レトモ好環境ヲ得レハ遠ニ活氣ヲ呈スルニ至ル

此種ノ臺ヲ放置スレハ「ガラス」面ヲ侵蝕シテ再研磨ヲ要シ甚シキモノニ在リテハ部品交換ノ外ナキニ至ルコトアリ

要則

二五

摺「ガラ」狀臺 斑點狀臺

溫度ノ變化ノ爲「ガラス」面ニ水蒸氣ノ凝著スルニ因ルモノニシテ「ガラス」面全數同様ニ曇ルコト少ク一面若ハ數面ニ生スル場合多シ視界内ハ殆ト常ニ平等ニ摺「ガラス」狀ノ曇トナリ光學兵器ノ用ヲナササルニ至ルコトアリ而シテ數日乃至數十日ノ保管中ニモ發生スルコトアリ一旦發生シタルモノカ其後ノ保管中ニ殆ト消去スルコトアルモ多クハ之ヲ繰返シ此間空氣中ノ有機物、塵埃等ヲ附着シテ其程度ヲ増加シ之ヲ放置スレハ微ヲ誘致シ或ハ斑點狀曇ニ推移スル虞アリ

格納品ハ乾燥密閉ト爲シ常用品ト雖成ルヘク乾燥空氣中ニ格納スルコトニ勉ム

二四

塵埃ノ附着、剝脫セル塗料ノ附着或ハ水滴ト共ニ水中ノ不純物又ハ空中ノ微粒體ノ附着等ヲ原因トス

視界全面ニ生シ其程度ニ應シ機能ヲ減退シ甚シキニ至レハ遂ニ用ヲナササルニ至ル數箇月乃至數箇年ノ保管中ニ發生スルヲ例トス其程度輕微ノモノハ拭淨ニ依リ直ニ除去スルコトヲ得ルモ之ヲ放置スルトキハ微ヲ誘致スルハ勿論「ガラス」面ヲ侵蝕シテ遂ニ研磨セサレハ醫正シ難キニ至ルコトアリ

使用後ノ手入及格納法ニ注意ス

微ノ繁殖ヲ主因トス

微ハ其胞子ヨリ發生スルモノニシテ適當ノ溫度ト濕度ニ

乾燥空氣中ニ密閉格納ス

ムサルバ 「曇ル依ニ	(曇ル依ニ質變化風)曇狀品結
<p>「レンズ」又ハ「プリズム」ヲ密著スル爲ニ用ヒタル「カナ ダバルサム」ハ變質シテ淡黄色ヲ呈スルニ至ルコトアリ 又「バルサム」ハ乾燥或ハ外力ノ爲一部剝脱シテ貝殻狀模 様ヲ呈スルコトアリ 此種曇ハ「ガラス」ヲ損スルコトナシト雖光線ヲ遮リ兵器 機能ヲ害スルモノナリ</p>	<p>空氣中ノ濕氣、鹽類、「アルカリ」類、酸類(特ニ炭酸「ガ ス」)ト「ガラス」中ノ「アルカリ」性組成成分種々ノ組合ハ セニ於テ作用シ所謂風化ノ現象ヲ起シ表面ヲ侵蝕ス 水分ハ單獨ニテモ「ガラス」中ノ「アルカリ」性ノモノヲ析 出スル作用アリ又「ガラス」ノ種類ニ依リテハ自ラ表面ニ 細結晶ヲ析出スルコトアリ或ハ内部ニ結晶ヲ生シテ不透 明トナルコトアリ甚キハ龜裂、剝碎スルニ至ルモノアリ 「ガラス」ヲ使用セル「レンズ」又ハ焦點鏡ニ見ルコト多シ 此ノ如キ曇ハ光ヲ分散シ光量ヲ減シ映像不鮮明トナリ兵 器ノ價值ヲ減少ス 而シテ特ニ粗惡ナル「ガラス」ヲ使用セル場合ノ外短期ニ 生スルコトナシ然レトモ此現象ハ光線ヲ分散セシメ兵器 ノ機能ヲ害スルコト大ナルノミナラス斑点、毛根等ノ曇 ト密接ナル關係アルヲ以テ一般ニ重視セララルモノナ リ</p>
	<p>格納庫ノ清潔、乾燥ニ注 意シ且乾燥密閉格納ヲ爲 ス</p>

第十八

前項ノ外外物ノ「ガラス」ニ及ス作用概ネ左ノ如シ

水	區	分	作	用
曇ル依ニ	拭	油	<p>「ガラス」面ニ直接脂油ノ附着或ハ筒内ニ存スル脂油ガ溶 融又ハ蒸發シテ附着シ淡褐色又ハ淡灰色ノ曇ヲ生スルモ ノナリ 砂塵ノ附着セル「ガラス」面ヲ其儘布片ニテ拭フ等手入法 ノ不良ニ因リ無數ノ擦傷痕ヲ生シ全體トシテ淡灰色ノ曇 トナルモノナリ</p>	<p>一 油ヲ「レンズ」ニ接近 セシメサルヲ可トス 二 眼鏡氣密劑及潤滑油 ハ高温ノ爲熔融又ハ蒸 發ノ虞ナキヲ要ス 手入ニハ掃除筆ヲ以テ拂 ヒタル後清潔ナル軟綿布 ヲ用ヒ拭淨ス</p>
曇ル依ニ			<p>「ガラス」ハ水ニ侵サルル性ヲ有ス其程度ハ「ガラス」ノ組成又ハ水ノ種類ニ 依リ差異アルモ極メテ微弱ニシテ普通「ガラス」ニ於テハ顧慮スルヲ要セザ ルモ光學「ガラス」ニ對シテハ否ラズ一般ニ不純物ヲ含有セル水ハ否ラサル モノニ比シ作用大ナリ又熱湯ハ冷水ヨリモ作用著シ</p>	

空 氣	「ガラス」ヲ濕氣ヲ有スル空氣中ニ長日月曝露スルトキハ風化作用ヲ受ケ腐蝕ス殊ニ炭酸「ガス」、「アンモニアガス」等ヲ含有スルトキハ腐蝕作用速ナリ最初ハ曇ヲ生シ光澤ヲ失ヒ次第ニ腐蝕ノ度ヲ増シ遂ニ不透明體ニ變ス然レトモ此腐蝕ハ「ガラス」ノ表面ノミニシテ内部ニハ變化ヲキテ以テ研磨スルトキハ再ヒ透明ナル「ガラス」ト爲スコトヲ得ヘシ
「アルカリ」類	苛性「ソーダ」、苛性「カリ」等ノ強「アルカリ」ハ「ガラス」ヲ腐蝕スルコト稍大ナリ
酸 類	硫酸、硝酸、鹽酸等ノ強酸ハ侵蝕作用著シカラサルモ弗酸(弗化水素酸)ハ劇烈ニ作用シテ「ガラス」成分中ノ珪素ヲ抽出シテ化合シ忽チニシテ「ガラス」ヲ溶解セシム此作用ヲ應用シテ「ガラス」ニ目盛、模様、文字等ヲ彫刻ス
熱	「ガラス」ハ熱ノ傳導不良ナルヲ以テ之ヲ急熱又ハ急冷スルトキハ内外ノ膨脹又ハ收縮一様ナル能ハサル爲分子間ノ歪ヲ生シ忽チ破壊スルニ至ル但硬質「ガラス」ニ在リテハ此處少ナシ

第十款 「ゴム」ノ變質

第十九 「ゴム」ハ大氣中ニ於ケル自然作用又ハ特殊ノ原因ニ依リ變質シ彈性、絶縁性、

抗張性等ノ如キ其固有ノ特性ヲ失フニ至ルコトアリ其原因及豫防法概ネ左ノ如シ

區分	原	因	豫 防 法
老 化	日光、空氣、溫度、濕度等ノ作用ニ因リ自然ニ酸化セラレテ硬化又ハ軟化シ其抗力及彈性ヲ失フモノトス 日光光線ハ全然酸素ノ存在ナキ場合ニ於テモ「ゴム」質ニ對シ崩壞作用ヲ生起シ且溫度上昇スルニ從ヒ其作用著シキモノトス	一 光線ヲ遮斷ス 二 冷涼ニシテ成ルヘク空氣ノ流通セサル場所ニ保存ス 三 窒素、炭酸「ガス」、水素、「アムモニア」水、「グリセリン」等ノ中ニ貯藏ス	一 軟 化
硬 化	老化ニ因ル自然變質ノ外寒冷又ハ亞硫酸「ガス」等ノ作用ニ依リ其質硬脆ト爲ル	四 「タルク」、水酸化「カルシウム」、炭酸「カルシウム」等ノ粉末中ニ埋没貯藏ス	軟 化
軟 化	一 高温ニ依ル 二 溶劑ニヨリ膨潤軟化ス但揮發性溶劑ニ在リテハ溶劑揮發後原形、原性質ニ復歸スルモノ不揮發性溶劑ニヨリテハ遂ニ粘著性ヲ呈スルニ至ル		軟 化

第二節 油、塗料及藥品ノ使用區分並取扱

第二十 兵器用油、塗料及藥品ノ用途並使用法ノ適否ハ直ニ兵器ノ保存ニ關係ヲ及スモ
ノトス

第二十一 兵器用油、塗料及藥品ノ使用區分左ノ如シ
一 防錆用

名稱	使用區分		格納品ノ用途例	第三項 參照項目
	常用品	格納品		
「ベイント」	一般鐵製兵器ノ露出部	「ベイント」ノ下塗	摩擦部、嵌合部、 銳利ナル工具ノ刃 部等ヲ除ク	第四十五
「サビ止ベイント」	鐵板、角鐵等ノ接合部	一般鐵製兵器ノ隱蔽部	圓匙、十字鉞、斧、 槌等ノ柄眼部、鋸 ノ小身部等	第五十
	木部ニ接スル鐵部			

要則

名稱	使用區分		格納品ノ用途例	第五十八
	常用品	格納品		
油「ワニス」	彈丸外部		分解格納スル輻重 車車軸、軸臂、轂 帽内面（ねぢ部ヲ 除ク）、火砲復坐ば ね、平衡ばね、軌 條、軌匡等	第五十八
「セラツクワニス」	黃銅製火具類	格納間點檢ヲ必要 トシ且使用ニ際シ 剥脫スルヲ要セサ ルカ又ハ容易ニ剥 脫シ得ルモノ（研 磨シテ使用スル工 具類ノ刃部等ヲ含 ム）	曲尺、鋼尺、刀劍 ノ眞鐵、鉋、鑿、 小刀、鋸、錐、鋏、 截革刀等	第五十九
	露出セサルばね類	使用ニ際シ剥脫ス	鐵、鋸、螺絲、螺	

「ベトロラタム」 等	ルヲ要シ且剝脱困難ナルモノ其他前記以外ノ鐵素地部	錐、小齒車等	第 六
「パラワセリン」 又ハ「ワセリン」	一時格納品ノ鐵部 及「メツキ」部		第 七
「スピンドル」油	前記以外ノ鐵部	銃ノ部品、火炮ノ 豫備品、鏝等	第 四
研 砂 液	小ナルばね其他ノ 部品類ニシテ浸漬 格納ヲ便トスルモ ノ		第 百二十六
時 計 油	精密機械類		第 十 六
「コールタール」	長期格納ノ車輪々 帶		第 百 九
防 錆 油	長期格納品ノ鐵部 特ニ脂油剝脱シ易 キ部分	定盤上面、「ベルト」 車、段車等及露天 格納砲身等ノ目張	第 二 十 二

二 防擦用

「パラワセリン」 又ハ「ワセリン」	樞軸部、關節部、齒車、齒弧、ねぢ部 及油溜等		第 七
「スピンドル」油	前記以外ノ銃砲機關部、腔中並各種兵 品ノ滑走部等	酷暑地輕機關銃ノ 爲要スレハ「マシ ン」油又ハ「ダイナ モ」油ヲ使用ス	第 四
耐寒性「スピ ンドル」油	極寒地ニ於テ「スピンドル」油、「パラワ セリン」又ハ「ベトロラタム」ヲ使用ス ヘキ部位ニ塗布ス		第 五
防 擦 脂	車軸、軸臂、車輪ノ轂筒、油溜等		第 三 十
「グ リ ー ス」	回轉速度大ナル特種ノ軸又滑走部、自 動車ノ給油困難ナル摩擦部等	防擦脂ニ代用スル コトヲ得	第 九
耐寒「グ リ ー ス」	極寒地ニ於テ「グリース」ヲ塗布スヘキ 部位ニ使用ス		第 十

要則

第參照三項目篇

「シリンドー」油	「シリンド」内部	第十一
「マシ」油	機關車、貨車等ノ高速回轉軸又ハ滑走部	第十二
内燃機油	自動車ノ發動機、「ディゼル」機關等ノ内燃機關	第十三
「ダイナモ」油	發電機、電動機	第十四
臺車油	臺車其他ノ車軸	第十五
鎖油	齒車ノ嚙合部、齒車ト鎖トノ間等	第十七
時計油	時計、測量器械等ノ如キ精密器具、機械類	第十六
「ヒマシ」油	戰車、牽引車、航空機等ノ發動機ノ各摩擦部	第三十八
「オリブ」油	軍樂器、喇叭ノ滑走管又ハねぢ、ばね部等	第四十

牛脚油	時計	第二十八
鯨腦油	精密機械殊ニ寒地ニ於ケル諸機械用	第二十九
椿油	精密機械用	第三十三

三 洗滌及拭淨用

名稱	使用區分	摘要	參照項目
腔中洗滌液	銃砲射撃後ニ於ケル腔中洗滌用	使用區分ハ銃砲ノ各篇ニ依ル	第二百二十五
礮砂液			第二百二十六
腔中油			第十八
苛性ソーダ液	「ゴム」製品洗滌用		第九十
同右及硫酸	打穀藥莢ノ洗滌用		第九十七
石鹼	皮革製品ノ洗滌用		第九十二

「アルコール」	眼鏡ノ「ガラス」面及精密器具拭淨用	第九十四
「エーテル」		第九十五
「ベンゾール」		第四百四
鹽酸		第九十八
「スピンドル」油	一般洗滌用及舊油除去用	第九十八
揮發油	鐵部又ハ木部ニ附着セル污垢、舊油及錆ノ除去用	第十九
燈油		第二十
「テレピン」油	鐵錆ノ除去用	第四十一
「ホルマリン」	革、麻、綿製品ノ殺菌用	第一百十
除銅液	銃砲腔中除銅用	參照項目 第二百二十四
名稱	使用區分	摘要

四 除銅用

除銅箔 火砲腔中除銅用

第二百二十四

五 塗料剝脱用

苛性ソーダ	「ベイント」剝脱洗滌用	參照項目 第九十四
「スピンドル」油		第九十六
「クレオソート」		第九十六
「テレピン」油	「ワニス」剝脱用	第九十四
「アルコール」		第九十四
名稱	使用區分	摘要

六 皮革製品保存用

革	甲	褐色多脂牛革、同牝牛革製品等	參照項目 第二十七
脂	乙	堅牛革製品、乗鞍(腹帶托革ヲ除ク)、刀帶、帶革等	參照項目 第二十七
名稱	使用區分	摘要	

「ヒマシ」油	「ベルト」、自動車ノ革製聯動機等		第三十八
--------	------------------	--	------

七 防蟲、殺蟲及防腐用

名稱	使用區分	摘要	參照項目
「バラチクロルベンゾール」	毛及麻製品防殺蟲用	効力最モ大ナルモ揮發シ易シ	第三百五
六鹽化「エタン」	毛及麻製品防蟲用		第三百十二
「ナフタリン」	毛及麻製品防蟲用	揮發性十分ナラス	第三百六
「クレオソート」	木、竹製品等ノ防殺蟲及防腐用		第九十六
「クロルピクリン」	皮革製品、毛製品及麻製品ノ殺蟲用	「サイローム」ハ毒性強ク「クロルピクリン」ニ比シ一層有効ナリ	第八
「サイローム」			第一百一

八 不凍液用

名稱	使用區分	摘要	參照項目
「グリコール」	自動車ノ冷却水ノ凍結ヲ防止スル爲混	「グリコール」ハ「グリセリン」ニ比シ有效ナリ	第二百二十八
「グリセリン」	合使用ス		第二百二十七

第二十二 油、塗料及藥品ノ購買ニ方リテハ用途ニ從ヒ其性質ヲ検査スヘキ但左ノ品目

ハ造兵廠又兵器廠ヨリ之ヲ購買スルヲ可トス

「スピンドル」油	耐寒性「スピンドル」油	「ペトロラタム」
「ワセリン」	「パラフィン」	「グリース」
耐寒「グリース」	腔中油	牛脂
豚脂	鯨油	硬化油
亞麻仁油	「ポイル」油	鉛丹
上塗塗料	「オレイイン」酸	「サイローム」

造兵廠

要則

「グリセリン」

「バラニトロフェノール」 防 曇 劑

兵器廠

第二十三 藥品ハ洗滌用等ノ如キ一時的ノモノノ外ハ總テ純良ナル化學用品ヲ使用スルモノトス蓋シ工業用藥品ハ往々不純物ヲ含有シ兵器ニ有害ナル作用ヲ及スコトアルヲ以テナリ

第二十四 油ハ一般ニ引火シ易ク漏出ノ虞多キヲ以テ其格納及取扱ニ就テハ特ニ注意スルヲ要ス

第二十五 油ノ格納ハ左ノ如ク實施スヘシ

- 一 油ハ之ヲ油庫ニ格納スルヲ本旨トス
油庫ハ倉庫又ハ其他ノ建築物ヨリ離隔シ成ルヘク地下ニ耐震、耐火材料ヲ以テ構築シ通氣孔ヲ設ケ且附近ニ消火用砂等ヲ備フヘシ又内部ハ常ニ乾燥、清潔ナルヲ要ス
- 二 格納セル油類ノ容器ニハ購入年月日ヲ記入セル標紙ヲ貼附シ其區分ヲ明確ニシ要ス

スレハ使用ノ順序ヲ定メ適宜ノ棚等ニ整置シ各品種毎ニ出納ヲ明瞭ナラシムル爲所要ノ標示ヲ附スヘシ

- 三 油ハ永ク大氣ニ觸ルルトキハ變敗スルヲ以テ必ス容器ヲ密閉スヘシ
- 四 「ペンゾール」、「テレピン」油、揮發油等ハ特ニ引火シ易キヲ以テ他ノ油ト區分シ墜落轉倒セサル如ク容器ノ大小ニ從ヒ砂床或ハ棚ニ排列スヘシ、容器ハねぢ蓋附鐵板製罐又ハ「ガラス」罐詰ト爲シねぢ蓋ニハ緊塞具ヲ入レテ螺定シ「コロヂオン」ヲ塗リ纒栓ハ摺合ハセノ良好ナルモノヲ用ヒ栓塞後蠟等ヲ以テ密閉スヘシ
- 五 燈油、亞麻仁油等モ亦燃燒シ易キヲ以テ成ルヘク前項ニ準シ格納スヘシ

第二十六 油ノ取扱ハ左ニ依ルヘシ

- 一 油ノ分配ハ成ルヘク油庫外一定ノ場所ニテ晝間之ヲ行フヘシ但已ムヲ得ス油庫内ニ於テ行フ際ハ格納品トノ間ニ區劃ヲ設クヘシ
- 二 分配所ニハ種類ニ應シ漏斗等所要ノ器具ヲ備ヘ且相互混用ヲ避クヘシ

- 三 引火點低キ油ノ取扱ニ方リ已ムヲ得ス燈器ヲ使用セサルヘカラサルトキハ懷中電燈等ヲ用ヒ裸火ヲ接近セシムヘカラス
- 四 油ノ容器ハ通常「ブリキ」製ニシテ其形狀ハ油ノ性狀ニ應シ便ナル容器ヲ用ヒ且之ニ油ノ名稱ヲ標記シ若ハ名稱札ヲ附スヘシ
- 五 油特ニ亞麻仁油ノ浸潤セル布片、雜巾等ヲ堆積シ置クトキハ油ノ酸化ニ依リ發熱シ其ノ熱ハ酸化ヲ促進シ溫度上昇ノ爲遂ニ自然發火セル例尠カラス特ニ高温高濕ノ季ニ於テ其惧多キヲ以テ使用後ハ建物ヨリ離隔セル場所ニ甕類ヲ半埋設シテ設備セル油布置場等ニ入レ蓋ヲ爲シ置クヘシ但再用ノ見込ナキモノハ之ヲ燒却スヘシ
- 六 「ベトロラタム」、「バラワセリン」、防擦脂及革脂ヲ熔融スルニハ湯煎器ヲ用フヘシ但止ムヲ得ス湯煎器以外ノモノヲ使用スルトキハ容器ヲ火焰ニ觸レサル如ク注意シ徐々ニ加熱シ一回ノ熔融量ヲ成ルヘク少量トシ加熱間絶ヘス之ヲ攪拌スヘシ又此際引火點低キ油、藥品等ヲ附近ニ置カサルコトニ特ニ注意スヘシ

第二章 兵器保存ノ一般要件

第二十七 手入、取扱、格納及検査ヲ適正ニ實施スルコトハ兵器保存ノ要件ナリ而シテ之カ實施ハ相互ノ密接ナル連繫ニ依リ初メテ其目的ヲ達成スヘキモノナルコトニ注意スルヲ要ス

- 一 兵器ノ手入ハ機宜ニ適スルコト極メテ緊要ナリ一度手入ノ時機ヲ失シ或ハ其方法ヲ誤ランカ忽チ損傷ヲ來シ衰損ヲ早メ遂ニ廢毀ニ陥ラシムルニ至ルモノトス故ニ演習教練間ハ勿論戰鬥間ニ在リテモ常ニ機會ヲ捉ヘ之カ保護ニ勉ムルコト緊要ナリ
 - 二 兵器ノ取扱ニ方リテハ豫メ十分其構造機能ヲ究メ適切ナル取扱ヲナシ得ルノ技倆ヲ具ヘアルヲ要ス然ラサレハ雷ニ兵器ヲ毀損スルコトアルノミナラス往々危險ヲ惹起スルニ至ルモノトス
- 兵器使用ノ初期ニ於テハ特ニ其保全ニ注意スルコト極メテ緊要ナリ蓋シ使用當初ニ

於ケル不注意ニヨリ一旦損傷ヲ惹起スルトキハ其恢復困難ナルノミナラス爾後急激ニ其程度ヲ増進スルモノナルヲ以テナリ又損傷ヲ發見セシトキハ勉メテ其早期ニ於テ修理シ爾後ノ保存ニ注意ヲ倍蓰スルヲ必要トス

三 格納兵器ハ日常監視ノ外ニ置カレ不識ノ間ニ於テ豫期セサル障害ニ陥リ爲ニ一時ニ多數ノ兵器ヲ損廢ニ歸セシムルコトアリ故ニ兵器ノ格納ニ方リテハ周到ナル準備ト適切ナル方法トニ依リ之カ保全ニ遺憾ナカラシムルヲ要ス

四 兵器検査ノ適否ハ亦兵器ノ保全ニ關係ヲ有スルコト極メテ大ナリ蓋シ現況ニ應シ須要且適切ナル處置ヲ講シ得ルハ獨リ検査ニ依ルヘキヲ以テナリ故ニ將校以下常ニ兵器ニ親炙シ以テ検査眼識ノ向上ヲ圖ラサルヘカラス

第一節 手入

第二十八 兵器手入ノ要旨ハ其構成材料ノ素質ニ應シ常ニ適切ナル保護ヲ加ヘ其發錆、

磨損、變質、變形、發微 蟲害等ヲ豫防シ以テ兵器ノ保存並機能ヲシテ完全ナル状態ヲ維持セシムルニ在リ

第二十九 兵器ノ手入ヲ分チテ常用品ノ手入及格納品ノ手入ノ二トシ又常用品ノ手入ヲ更ニ普通手入及精密手入ニ區分ス

一 常用品ノ手入

1 普通手入 日常ノ手入及使用ノ前後ニ於テ行フ手入ヲ謂フ

2 精密手入 普通手入ノ程度ニテ十分ナラサルカ又ハ平素分解セサル部分ニ互リ

行フ手入ヲ謂フ

精密手入ハ濕潤季ヲ避ケ毎年少クモ一回實施スルモノトス

二 格納品ノ手入

常用品ノ精密手入ニ準シ之ヲ行フモノトス

而シテ該手入ノ實施ハ其効力ヲ有効期限マテ持續シ得ル如ク最モ的確ニ實施シ爲シ

得レハ此有効期限ヲ更ニ延長スル爲局部的ニ補修手入ヲ行フコトアリ

三 手入ヲ實施スヘキ同種品目夥多ナルトキハ手入ノ方式ヲ定メテ確實ナル手入ヲ行ヒ以テ其効果ヲ期スルト共ニ作業能率ノ増進ヲ圖ルヲ要ス

第三十 兵器保存ノ良否ハ手入ノ適否ト其巧拙トニ關係スル所頗ル大ナルヲ以テ其重要ノ度ニ應シ責任アル幹部ノ監督下ニ實施セシムルヲ要スルコトアリ

第三十一 手入ノ實施ハ兵器ノ現況ニ適應スルコト緊要ナルモ動モスレハ其方法一律ニ失シ手入ノ目的ニ副ハサルノミナラス往々保存上惡影響ヲ及スコトナシトセス故ニ幹部ハ手入ニ先タテ現況ニ應スル手入法ヲ指示シ且實施ノ狀態並結果ヲ確認スルコトニ勉ムルヲ要ス

第三十二 兵器一般ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

- 一 兵器ハ必要ニ應シ分解シテ手入ヲ行フモノトス
- 二 精密兵器及精密ヲ要スル部位ヲ拭淨スルニ方リテハ塵埃ヲ避ケ得ヘキ場所ヲ選ビ

手入用毛布等ヲ敷キタル臺上ニ於テ之ヲ行フヘシ

三 手入ニ方リテハ當該兵器ニ屬スル手入用具ヲ使用スヘシ

面シテ反起、損傷、變形、屈曲若ハ機能上ノ缺點ヲ有シ又ハ砂塵等ノ附著セル手入用具ヲ使用スルヘカラス之カ爲使用前必ス點檢ヲ行フヘシ

四 手入ノ際各部ノねぢ、「ピン」、割「ピン」等弛緩セルモノアルトキハ適度ニ之ヲ緊定スヘシ

五 拭淨及施油ノ要領左ノ如シ

區分	實	施	要	領
拭淨	一 手入ヲ行フニ先ツ清淨ナル塵拂又ハ布片ヲ以テ塵埃、汚垢ヲ除去スルモノトス 二 之カ爲要スレハ木片竹筴、刷毛等ヲ使用スルコトヲ得 三 電氣的接觸部ハ清潔柔軟ナル布片又ハ磨革ヲ以テ拭淨シ決シテ塗油スヘカラス 四 之油ハ電氣ノ不導體ナレハナリ	一 拭淨ヲ終リタル後兵器ノ種類及現況ニ應シ所定ノ脂油ヲ適量ニ塗施スヘシ 二 凡テ塗油ハ目的ニ應シ適度ナラシムヘシ 三 注油孔、注油器及摩擦部等ニ注油スルニハ油ヲ普及セシムル爲接觸部位ヲ回轉、壓縮若ハ相互移動セシメツツ行フヲ要ス		
施油				

兵器保存一般ノ要件

第三十三 格納品ノ手入時期及回数ハ氣候、風土、倉庫ノ景況、兵器ノ種類、保存ノ状態等ニ依リ異ナルモ概ネ左ノ諸項ヲ斟酌シテ決定スヘシ

手	區分	實	施	要	領
<p>一 手入ノ有効期限ハ手入實施ノ時期ニ關係スルコト大ナルヲ以テ實施ニ方リテハ衛戍地ノ氣象特ニ害蟲發生期及濕潤季ヲ顧慮シ適當ナル時期ヲ選定スヘシ</p> <p>二 兵器保存ノ爲ニ施シタル油脂類ノ効力ハ抽出検査其他ノ結果ニ依リ之ヲ判定シ必要ニ應シ機ヲ失セス之カ塗替又ハ補修塗ヲ行フト共ニ必要ノ時期ニ到ラサルニ之カ塗換ヲ行フトヲ避クヘシ</p> <p>三 油脂類ノ有効期限ハ衛戍地ノ氣候、風土、倉庫ノ景況、兵器ノ種類、保存ノ状態等ニ應シ一定スルコトヲ得スト雖其標準ヲ示セハ概ネ左表ノ如シ</p>	<p>永年ニ互ル格納兵器ノ手入ニ關シテハ品目、手入ノ方法、時期、手入有効期限及手入ニ要スル人員材料等ヲ調査シテ手入基準表ヲ定メ之ヲ基礎トシテ永年ニ互リ一貫セル方針ニ從ヒ永年手入計畫ヲ作製シ尙兵器ノ現況ト永年手入計畫、一般行事及抽出検査ノ結果等ニ依リ取捨ヲ加ヘ當該年度ノ手入計畫ヲ定ムルモノトス</p>	實	施	要	領
種	類	用	途	有	效
「ベ	ト	ロ	ラ	タ	ム」
鋼、鐵製品ノ防錆					
緊要部三—五年					
其他五—七年					

入	實	施
「ワセリン」、「パラワセリン」	鋼、鐵製品ノ防錆	二年
「ワニ		七年
「ペイント」、「コールタール」		永久
「サビ止」ペイント」		永久
漆		永久
「セラックワニス」		三年
「スピンドル」油		五年
「ボ	鋼、黃銅、青銅製品ノ防錆	永久
「イ	「メツキ」、鋼索類ノ防錆	十年
「ル」	精密機械類ノ防錆	一—二年
計	木製品ノ防蟲	一—二年
片腦油、樟腦油、「クレオソ	革製品ノ保存	一—二年
ト」		一—二年
「パラチクロルベンゾール」	毛製品ノ防蟲	露出 一年

兵器保存一ノ要件

入手
実施

六 鹽 化 「エ タ ン」

密 閉 四 年

五〇

第三十四

塗料類ノ塗替ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區 分	實 施 要 領	注 意 事 項
イ	<p>一 齒槌等ヲ用ヒ其面ヲ直角ニ輕打スルカ或ハ削笥類ヲ以テ輕ク舊塗料ヲ搔キ落シ布鑑、紙鑑、木賊等ヲ以テ殘餘ノ塗料又ハ錆ヲ除去シ雜巾ノ類ヲ以テ拭淨スヘシ</p> <p>塗料面研磨ノ爲要スレハ燈油、揮發油、「テレピン」油、「クレオソート」等ヲ用フルコトヲ得</p> <p>二 藥液ヲ用ヒ塗料ヲ除去スルニハ棕栢刷毛ニテ之ヲ塗面ニ塗リ暫時放置ノ後、^{ワッパ}ノ類ヲ以テ其塗抹面ヲ搔廻シ更ニ棕栢刷毛ニテ搔目ヲ整ヘ約一四、五分ヲ經過スレハ塗層</p>	<p>一 齒槌ヲ以テ槌打ノ際本體ヲ毀損セシメサル如ク注意スヘシ</p> <p>二 塗料ヲ除去シタル面ニハ素手ニテ觸ルルヲ避ケヘシ</p> <p>三 藥液ヲ用ヒタル場合ハ洗滌ヲ十分ナラシメ藥液ノ殘留セサル如ク清拭スルヲ要ス</p>
ベ	<p>金</p> <p>舊 塗 料</p>	

部 木	屬	施 塗 料 塗	去 除
シ		<p>塗料ヲ塗施スルニハ刷毛(通常下塗一回、上塗二回)又ハ吹付法(通常上塗ニハ一回)ニ依リ平等ニ塗布スヘシ但毎回下層塗料ノ十分乾燥セシヲ確認シタル後其塗面ヲ紙鑑(布鑑)等ヲ以テ平滑ニシ且塗層ノ瑕瑾ヲ除去シ以テ新塗層ノ密著ヲ良好ナラシムヘシ補修塗モ亦之ニ準ス</p>	<p>溶解スルヲ以テ之ヲ筥ニテ掬取リ且撒水シツツ十分塗層ヲ除去シ後清水ヲ以テ洗滌スヘシ</p> <p>有效ナル藥液ハ苛性「ソーダ」液及「クレオソート」等トス</p>
		<p>器具箱其他木部ノ塗替ニ方リテハ拭淨ノ後十分之ヲ乾燥セシメ通常舊塗料ヲ剝脫スルコトナク其一部若ハ全部ニ塗料ヲ塗施スヘシ</p>	<p>一 塗替ハ部具全部ニ行フヲ通常トス然レトモ發錆又ハ剝脫ノ景況一部ニ止マルモノニ在リテハ其局部ノミニ補修塗ヲ施スコトヲ得</p> <p>二 塗料ノ塗施ハ酷暑、嚴寒、濕潤季等ヲ避ケ通常其他ノ時期ニ於テ快晴ナル日ヲ選ビ實施スルヲ可トス</p>

兵器保存一般ノ要件

五一

ワ	「テレピン油」「アルコール」又ハ「テレピン」油ト「アルコール」ノ等分混合液ニ浸シテ之ヲ溶解除去シ素地部ヲ乾燥拭淨ノ後「ワニス」ヲ塗施スヘシ
ニ	一 舊塗料ノ溶解ニハ通常二乃至四時間ヲ要ス但「テレピン」油ト「アルコール」ノ等分溶液ヲ使用スルトキハ數分間ニテ溶解ス
ス	二 塗層ハ下層程薄キヲ必要トス又塗面ハ常ニ乾燥シアルヲ要ス

第二節 取扱

第一款 使用

第三十五 兵器ヲ使用スルニ方リテハ先ツ其取扱ニ精通シ且豫メ十分ナル點檢ヲ行ヒ完全ナル状態ニ於テ使用スヘシ若中途ニ於テ異狀ヲ發見セハ直ニ之カ使用ヲ中止スルカ若ハ所要ノ處置ヲ加ヘ以テ故障ヲ増大セシメサルコトニ注意スルヲ要ス

第三十六 車輛類ノ運動ニ方リテハ其速度ノ大ナルニ從ヒ破損又ハ磨損ヲ生スル機會多

キヲ以テ各部ノ結合、摩擦部ノ給油、内部裝填品及外部裝著品ノ状態等ヲ點檢シ以テ毀損ノ豫防ニ注意スヘシ

第三十七 屬品匣、中箱、器具箱等ハ其填實ヲ確實ニシ要スレハ木毛^{キワタ}又ハ苧屑ノ類ヲ以テ空部ヲ充塞シ運動間裝填品ノ動搖スルコトナカラシムヘシ
精密器材ノ運搬ニ於テモ亦同シ

第三十八 各部品並屬品匣内ノ豫備品ハ主體ニ適合スルコトヲ確認シ置クヘシ但豫備品ハ通常本部品ノ毀損セルトキ使用スルモノニシテ交互ニ使用セサルモノトス

第二款 分解及結合

第三十九 兵器ハ屢、之ヲ分解スルトキハ機能ヲ害スルニ至ルヲ以テ必要ノ場合ノ外之ヲ避クヘシ又分解ハ手入、檢査及修理等ニ必要ナル部分ノミニ限リ猥ニ他ノ部分ニ及スヘカラス

兵器保令一般ノ要件

第四十 兵器ノ分解結合ハ動モスレハ不慮ノ危害ヲ伴フコトアルヲ以テ其構造ヲ熟知シ十分ナル注意ヲ以テ順序正シク實施スヘシ

第四十一 分解ニ方リテハ結合ヲ顧慮シ常ニ各部ノ状態ヲ點檢シ且絶ヘス内部構成部品ノ機能状態ヲ觀察スルヲ要ス

第四十二 分解結合ハ兵器取扱法ニ依ルノ外猥ニ分解ヲ行フヘカラス

第四十三 以上ノ外分解結合ニ際シ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 分解セル各部品ハ順序正シク之ヲ並列シ毀損、汚染、混同又ハ紛失等ノコトナキ様注意スヘシ又結合ニ際シテハ各部品ノ番號、符號、向キ等ニ注意シ要スレハ分解前所要ノ標識ヲ爲シ置クコト

二 分解及結合困難ナルトキハ強テ之ヲ行フコトナク幹部ノ指示ヲ待チテ處置スルコト

三 結合ニ際シテハ各部ノ検査及手入ヲ十分ニ實施スルコト特ニ屢、分解セサルモノ

ニ於テ然リトス

四 結合後ハ機能完全ナルヲ確認スルコト

第三節 格納

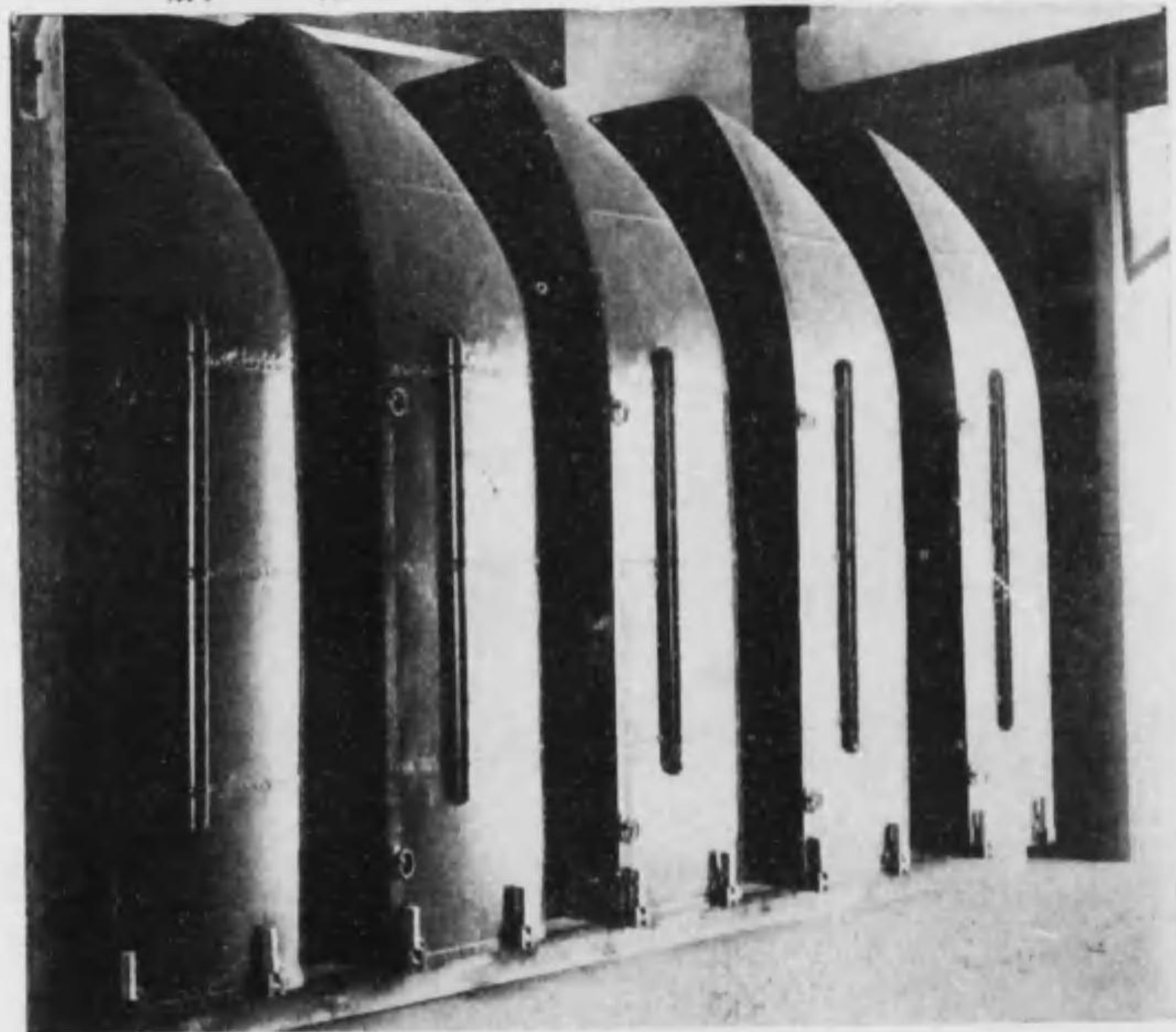
第四十四 兵器格納ノ目的ハ一時又ハ長期ニ互リ使用セサル兵器ノ貯藏ヲ適當ニシテ其保存ヲ良好ナラシメ以テ之カ使用ニ際シ支障ヲ生セシメサルニ在リ之カ爲格納前ノ検査及手入ヲ周密ニシ格納間ノ検査ヲ適切ニシテ手入ノ時期ヲ誤ラサルヲ要ス

第一款 長期格納

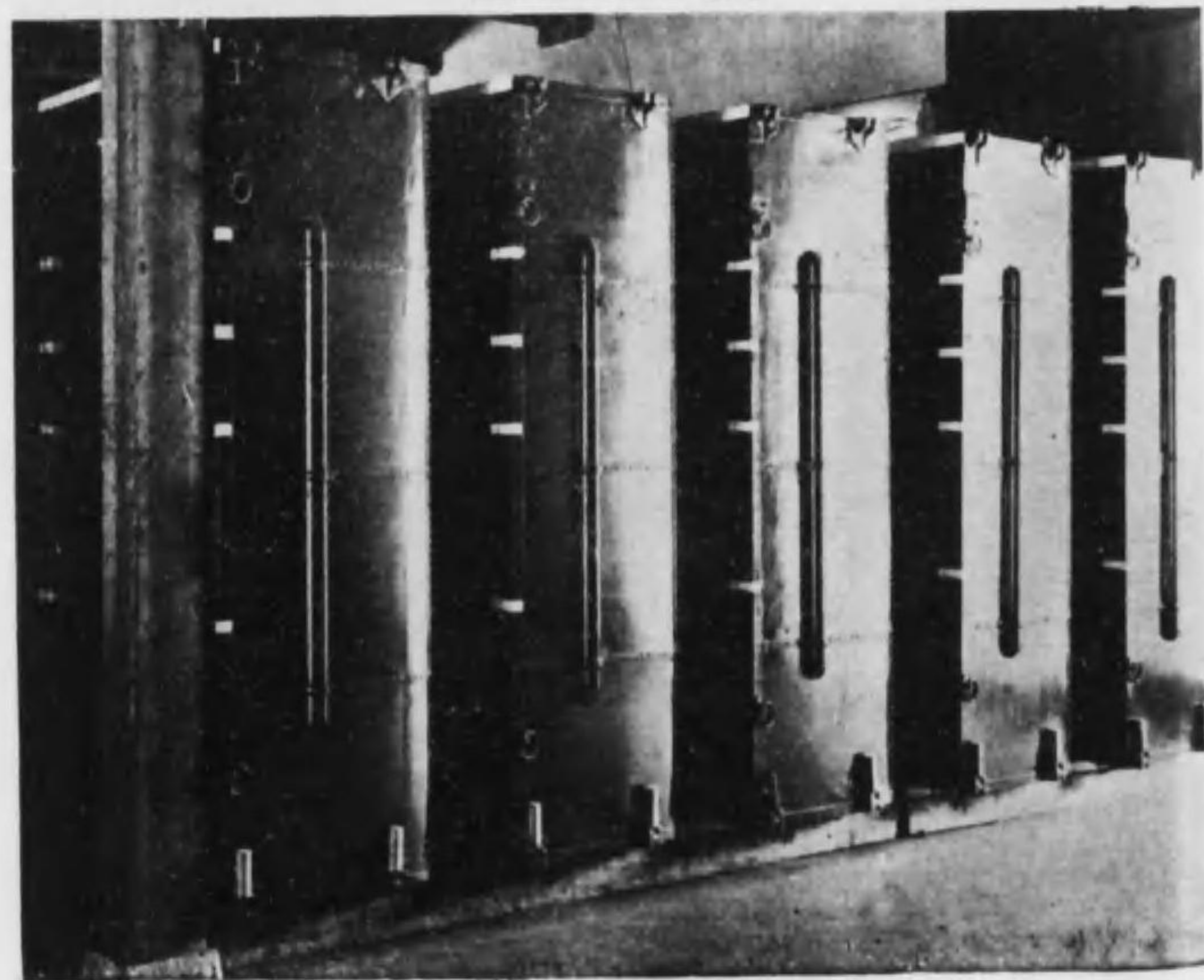
第四十五 兵器ノ格納位置ハ兵器ノ精粗、品質、倉庫ノ構造、氣象ノ交感、格納要具ノ特徴、出納及検査ノ難易ヲ顧慮シ之ヲ選定スルモノトス之カ爲主要兵器ノ格納位置ヲ示セハ左ノ如シ

兵器保存一般ノ要件

納 格 列 排 一 其 圖 五 第



二 其



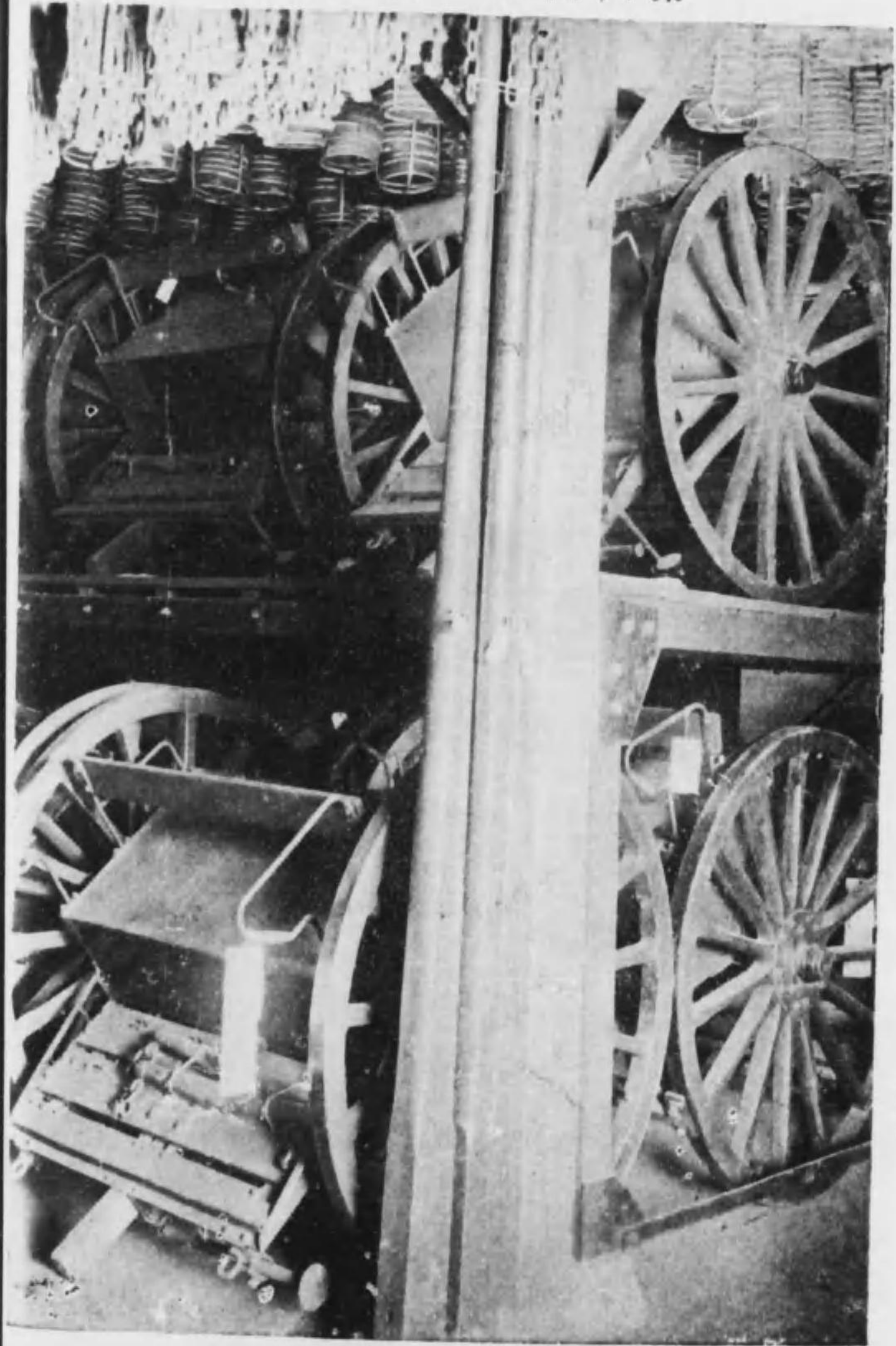
兵器保存ノ一般ノ要件

五七

五六

格納兵器ノ種類	格納ノ方法	格納ノ位置
火砲(屬品並歩兵砲等輕易ナルモノヲ除ク)車輛、鐵舟、重材料 彈丸、藥莢	排列又ハ中層設備ヲ施シテ二段格納トス(第五、六圖) 彈藥取扱細則ニ依ル	階下
銃器類、輕量火砲、火砲車輛屬品、光學兵器、通信機類、測器類、革製品、毛製品、土工器具類、職工具類	床板上ニ適宜排列スルカ特種ノ格納用具ヲ使用シ或ハ格納棚若ハ格納箱ニ堆積又ハ排列ス	階上
麻製品、綱具類	懸吊格納ス	天井
備考 一 鐵筋「コンクリート」建倉庫ニ在リテハ負擔重量及搬出入ノ設備之ヲ許セハ階上ハ普通倉庫ノ階下ニ準スルコトヲ得 二 鐵筋「コンクリート」倉庫ハ建築後少クモ六箇年間ハ濕氣ノ交感ヲ受ケ易キ精密器材等ヲ格納セサルヲ要ス又陸屋根ヲ有スルモノニ在リテハ最上層ノ室ハ溫度ノ變化激シキヲ以テ溫度ノ交感ヲ受ケ易キ兵器ノ格納ハ避クルヲ可トス 三 三階ヲ有スル倉庫ニ在リテハ搬出入容易ニシテ手入ノ顧慮ヲ要セサル輕易ナル兵器例ハ各種箱類等ハ三階ニ格納ス		

納格段二圖六第



第四十六 兵器ヲ格納スルニハ各品目ニ應スル格納方式ヲ定メ格納容積及餘積ノ配分ヲ決定スルモノトス而シテ該兵器ノ保存整備、格納容積ノ縮少並出納、手入、検査等業務實施ノ便利ヲ顧慮シ格納方式ヲ定ムルモノトス

格納方法ハ左ノ要旨ニ準據シ設定スルモノトス

一 兵器ノ構造、構成ノ素質及之ニ對スル保存法ニ鑑ミ其保存ヲ確實有利ナラシムル如ク適應ノ格納法ヲ選擇ス

二 貯藏數量多大ナル單一兵器若ハ兵器ノ主體ハ部品格納ヲ實施ス例ヘハ小銃、刀劍類及火炮車輛ノ如シ

三 多數ノ小部分ヨリ成ル組兵器ハ一組毎ニ格納シ各組ノ同一部品ハ相對的ニ排列ス例ヘハ職工具類ノ如シ

四 多數ノ部品ノ組合ハセヨリ成ル兵器ハ保存上特別ノ顧慮ヲ要スルモノノ外一列若ハ某區域毎ニ若干組ヲ通シ格納シ形體、構成ノ素質、保存法ヲ同クスル部品別ニ排列ス但小部品ノ格納ニ就テハ前號ニ準ス例ヘハ機關銃、火炮、車輛等ノ屬品ノ如シ

兵器保存一般ノ要件

- 五 多數部品ヨリ成ル組兵器ニ在リテハ成ルヘク縦(横)方向ニ同一部品、横(縦)方向ニ組ヲ組成スル如ク格納ス例ヘハ乘鞍駄馬具麻製品ノ如シ
- 六 形體大小區々ナル部品ヨリ成ル兵器ハ成ルヘク同形同大ノモノヲ一纏トシテ格納ス例ヘハ野戰砲兵廠所屬甲(乙)豫備品類ノ如シ
- 七 小數部品ヨリ成ル組兵器ニシテ貯藏數多大ナルモノハ各部品毎ニ區分格納ス例ヘハ土工器具類ノ如シ

第四十七 皮革製品毛製品類ノ發黴、蟲害、脂油ノ變質及發散豫防並眼鏡類ノ曇防止ノ爲ニハ密閉格納ヲ行フヲ有利トス

密閉格納ハ格納品ヲ保存上不利ナル外界ヨリ遮斷シ適當セル條件ノ下ニ置クヲ主眼トスルヲ以テ兵器ノ種類、要求スヘキ密閉程度、氣候風土ノ影響並ニ之ニ使用スル材料等ヲ顧慮シテ其方法ヲ決定スヘク徒ニ形式ニ拘泥シ又ハ其效果ヲ過信シ點檢監視手入等ヲ怠ラサルコト肝要ナリ

實施ノ細部ニ關シテハ皮革製品、毛製品類ハ第五章皮革製品ノ部眼鏡類ハ第九篇第一章眼鏡ノ部ニ依ルモノトス

第四十八 其他格納上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 兵器ヲ堆積、排列、懸吊又ハ依托スルニハ保存、出納、手入、檢査及負擔荷重ヲ顧慮シ且顛倒、墜落、相互ノ損傷及變歪等ノ虞ナキ範圍ニ於テ勉メテ庫積ヲ利用スルコト
- 二 貯藏品ニハ成ルヘク覆ヲ施シ外氣ノ直接交感、直射日光或ハ塵埃、蟲害等ヲ防止スルコト
- 三 倉庫ノ側壁、屋根裏ニ近接セル位置又ハ入口附近ハ兵器ノ格納ヲ避クルコト若止ムヲ得サル場合ニ在リテハ外氣ノ影響少キ木、麻製品類ヲ配置シ且採光ヲ顧慮スルコト

第二款 一時格納

第四十九 一時格納ハ一時的貯藏ノ目的ニシテ其格納期ノ長短、兵器ノ種類ニ依リ差異アリト雖概ネ長期格納ニ於ケル諸注意ヲ斟酌シ出納ニ便利ナル如ク要スレハ結合ノ儘格納シ又格納用油脂類ノ如キモ格納期間ニ相應スル材質ニシテ且使用ニ方リ容易ニ剝離シ得ルモノヲ選用スヘシ

第四節 検査

第五十 兵器ノ検査ノ目的ハ兵器ノ現況ヲ詳ニシ手入取扱ノ進歩ヲ促シ將來ノ處置ヲ迅速ニシ以テ兵器ヲ良好ナル状態ニ保持スルニ在リ之カ爲損傷、機能ノ障碍、發錆、發微其他ノ故障ヲ發見シタルトキハ必ス之カ原因ヲ探究シ其程度ヲ増進セシメサル如ク

處置スルト共ニ同一過失ヲ反復セサル如ク勉ムルヲ要ス

第五十一 検査ヲ分チテ常用品ノ検査及格納品ノ検査ノ二トス

一 常用品ノ検査ヲ分チテ普通及精密ノ二トス普通検査ハ通常使用前後又ハ常時行フ検査ヲ謂ヒ精密検査トハ通常精密手入ノ時期若ハ特ニ必要ト認ムル際行フ検査ヲ謂フ

二 格納品ノ検査ハ常用品精密検査ニ準シテ之ヲ行フ特ニ精密ナル兵器ニ對シテハ若干期間毎ニ機能又ハ保存ノ景況ヲ全般ニ互リ検査シ適宜ノ處置ヲ講シ常ニ完全ナル状態ニ保存スルヲ要ス但検査ノ爲著シク手數及經費ヲ要スルカ又ハ一部ヲ以テ全般ヲ推知シ得ル如キモノニ在リテハ抽出検査ヲ行フコトヲ得、但其ノ結果ニ基キ要スレハ全數検査ヲ行フヘシ
格納品手入ノ際ハ必ス検査ヲ行フヘシ

第五十二 修理兵器ヲ受領シタル際ハ必ス修理法ノ適否及所要部加修ノ如何ヲ検査スル

兵器保存一般ノ要件

ヲ要ス

第五十三 検査ハ其方法ヲ誤ラサルコト肝要ナリ

例ヘハ電氣的測定法ヲ行フニ方リ其方法ヲ誤ラハ常ニ正確ナル結果ヲ捕捉シ得サルカ
如キ之ナリ

第五十四 検査スヘキ部分並其程度等ハ使用又ハ格納ノ狀況ニ依リ一定スルヲ得スト雖

通常其兵器ヲ若干部分ニ區分シ又ハ品目ヲ限定シテ施行シ検査ノ成果ヲ收ムルコトニ
勉ムルヲ要ス

第五十五 検査ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區分	検査項目	摘要
常	一 材料各部ノ損傷、變形及變質 二 各部機能ノ良否 三 各部結合法ノ適否 四 施油ノ適否	一 腔中又ハ管ノ内壁等ヲ檢スルニハ日光、電燈、蠟燭等ニ依リ鏡面ノ反射ヲ利用シ若ハ視

品	用	後修理
後	使用及 前用 後間	修
一	一 使用前主トシテ要部ノ點檢ヲ行ヒ損傷ヲ豫防スヘシ 二 使用間等ハ休止ノ際ヲ利用シ各部ノ動搖又ハ緩解シ易キ部分ノ點檢 三 使用後各部ノ變歪、毀傷、紛失物ノ有無	一 修理法不適當ナル爲ノ機能不良毀損ノ有無 二 熱處理ノ適否 三 修理材料使用ノ適否 四 修理ニ位置ノ適否 五 修理ニ方リ制式改正實施ノ確否 六 戻回又ハ移動防止ノ爲駐刻若ハ目打止實施ノ
二	二 鑄及汚垢ノ有無 三 發黴及蟲、鼠害ノ有無 四 鑄染、染烘、「メツキ」又ハ塗料剝脫ノ有無 五 手入又ハ取扱法ノ良否 六 制式改正實施ノ適否 七 員數ノ過不足、部品ノ混淆、異式品ノ有無、 八 豫備品、附屬品ノ整否	一 腔中又ハ管ノ内壁等ヲ檢スルニハ日光、電燈、蠟燭等ニ依リ鏡面ノ反射ヲ利用シ若ハ視 二 一般機能上摺合部相互結合ノ狀態等ヲ點檢スルニハ「メニー」ノ類ヲ其局部ニ塗抹シテ實施スベシ 「メニー」ハ鉛丹ヲ練和シ之ニ亞麻仁油ヲ加ヘテ柔軟ニシ粘著性ヲ有スル物質（永ク粘度ヲ保クシムル爲ニハ茶種油「スピンドル」油等ヲ混和スルヲ可トス）ト爲シタルモノニシテ之ヲ以テ検査ヲ爲スニハ摺合部ニ薄ク塗施シテ挿入又ハ吻合セシメ塗面ノ狀況ニ依リ相互

兵器保存一般ノ要件

格	品 用 常
法 納 格	後 理 修
<p>一 格納品ニ對スル手入ノ適否</p> <p>二 兵器庫内ニ於ケル濕氣、塵埃、蟲、鼠害、雨漏等ニ對スル處置ノ適否</p> <p>三 密閉格納法ノ適否</p> <p>四 格納位置、排列及懸吊堆積法ノ適否又倉庫ノ負擔荷重ニ對スル顧慮ノ有無</p> <p>五 塗油ノ木部ニ吸收セララルコトニ對スル防止スル處置ノ適否</p> <p>六 各品目ノ格納法規定實施ノ適否</p>	<p>七 確否 金屬部ニ生シタル反起等ノ鏽削又ハ修理ノ良否</p> <p>八 双具ノ研磨又ハ齒振ノ適否</p> <p>九 部品ヲ交換シ又ハ修理シタル際其適合ノ良否並仕上作業ノ適否</p> <p>十 皮革製品穿孔法ノ適否</p> <p>十一 不要ノ部分又ハ塗施スヘカラサル部分ニ對スル塗料ノ有無</p>
	<p>六六 密接ノ程度等ヲ知ルヘシ</p>

品 納	出 抽
	<p>抽出検査ヲ行フヘキ時期及數量</p> <p>一 抽出検査ハ通常兵器ノ保存上不良ノ感作ヲ與フル季節又ハ其前後ニ於テ行フヘシ</p> <p>二 抽出數量多キニ從ヒ判定ハ確實ノ度ヲ増スモ兵器ノ構造、保存ノ現況並保管數量特ニ前同手入後ノ經過年月等ヲ顧慮シ既往ノ經驗ニ徴シ之ヲ定ムヘシ</p> <p>三 抽出検査ハ全般ニ互ルヲ要ス然レトモ各種ノ狀況最モ不良ナル部分ヨリ成ルヘク多ク之ヲ選定スヘシ</p>
	<p>異狀ヲ認メタル兵器ニ對スル處置</p> <p>一 異狀ノ程度若ハ其數量僅微ナルトキハ更ニ若干數ヲ檢シ其狀態カ一般的ナルヤ否ヤヲ判定スヘシ</p> <p>二 異狀カ一般的ナルモ一局部ニ止マルモノハ其局部ノミ一般ニ手入ヲ施行シ然ラサルモノハ全般ニ互リ有効期間ノ如何ニ關セス手入ヲ實施スヘシ</p>

第三章 金屬製品

第一節 手入

兵器保存ニ般ノ要件

第五十六 金屬製品ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

六八

區分	要領	摘要
鐵	<p>手入及防錆 鐵ノ素地部ハ錆及舊油ヲ除去シタル後乾布ヲ以テ拭淨シ通常用品ニ對シテハ「スピンドル」油ヲ、格納品ニ對シテハ「ベトロラタム」ヲ塗布スヘシ 但長期格納ヲ爲スモノニシテ格納間ニ時々保存上ノ點檢ヲ必要トスルモノハ無色「ワニス」ノ類ヲ其他ノモノハ「サビ止」ベイント」ヲ塗施スルコトヲ得</p>	<p>一 素地部トハ塗染又ハ「メツキ」ヲ施ササル本來ノ地金面ヲ謂フ 二 極寒地ニ於テハ銃砲屬品中ノ豫備品ニハ「ベトロラタム」ヲ塗布スルコトナク「スピンドル」油若ハ「ワセリン」ヲ用フヘシ之急遽ニ豫備品ノ交換ヲ要スルトキ「ベトロラタム」膠著シテ加熱スルニアラサレハ除去シ難キヲ以テ野外ノ取扱ニ適セサレハナリ 三 素地部ハ光輝ヲ發スル程度ニ強摩スヘカラス</p>

部	地
<p>素地部ノ發錆若ハ腐蝕ヲ除去スル爲ニハ紙、布、綿、磨粉土砂類其他藥品類等ヲ使用スヘカラス但兵器ノ種類ニ依リ已ムヲ得サレハ錆斑ノ除去ニ紙、布、綿又ハ磨粉等ヲ使用スルコトヲ得ルモ精密寸法、滑度ヲ要スル部分其他機能又ハ抗力ニ影響ヲ及ス部分ニハ絕對ニ之ヲ用フヘカラス 二 拭淨ノ爲燈油等ヲ用ヒタルトキハ其油氣ヲ十分拭ヒ去リ「スピンドル」油ヲ以テ更ニ拭淨スヘシ</p>	<p>錆ノ除去 素地部ノ錆ヲ除去スルニハ燈油又ハ揮發油ヲ浸マセタル刷毛若ハ絨、綿布等ヲ以テ摩擦スヘシ又發錆甚シキトキハ燈油ヲ注キ三〇分以上經過ノ後燈油ヲ浸マセタル木賊又ハ絨布等ヲ以テ摩擦シ除錆スヘシ 舊油ノ除去 素地部ノ舊油ヲ除去スルニハ通常乾布ヲ以テ拭淨スヘシ若乾布ヲ以テスル拭淨困難ナルトキハ「スピンドル」油、燈油又ハ揮發油ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨シ後乾布ヲ以テ拭フヘシ尙舊油剝脫ノ爲要スレハ木片又ハ竹筴等ヲ使用スルコトヲ得舊油膠著シ若ハ油燒狀ヲ呈シ之カ除去著シク困難ナルトキハ錆ノ除去ニ準シ實施スヘシ</p>

金屬製品

六九

考 備	非 鐵 金 屬	備 考
<p>一 拭淨ノ爲酸類、「アルカリ」等ヲ使用スヘカラス 二 使用後ノ手入ニ於テ注意スヘキ事項左ノ如シ</p> <p>1 金屬部ヲ雨雪等ニ濕潤セシメタルトキハ成ルヘク速ニ之ヲ拭淨シ以テ發錆ノ機會ヲ與ヘサル如ク注意スルヲ要ス</p> <p>2 泥土ノ附着セルトキハ過度ニ摩擦スルコトナク且他ノ部分ヲ汚損セサル如ク拭除スヘシ塗料塗施部ニシテ他部ニ害ヲ及ス處ナキ場合ニ在リテハ要スレハ水洗除去スルコトヲ得</p>	<p>手入法</p> <p>一 白金、金、銀、「イリチウム」、銅、鉛、錫、亞鉛、青銅、黃銅、白銅、「ニッケル」、「アルミニウム」、「マグネシウム」合金等ノ部ハ摩擦部ノ外塗油スルヲ要セス乾布ヲ以テ拭淨スヘシ</p> <p>二 格納品ニ在リテハ要スレハ薄ク「セラツクワニス」ヲ塗布スヘシ</p> <p>錆及汚物ノ除去</p> <p>銅類、「アルミニウム」等ニ錆若ハ汚物ノ附着セシモノハ成ルヘク之ヲ除去スヘシ之カ爲乾布若ハ少量ノ燈油ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨スヘシ</p>	<p>光輝ヲ發スル程度ニ強摩スヘカラス</p> <p>鐵ノ素地部ニ同シ</p>

鐵

部料塗	部「キ ツ メ」	部 色 著
<p>塗料塗施部ハ塵拂、刷毛等ヲ以テ塵埃ヲ除去シタル後乾布ヲ以テ拭淨スヘシ</p>	<p>一 「メツキ」部ハ塵埃、污垢ヲ除去シタル後乾布ヲ以テ拭淨スヘシ</p> <p>二 「メツキ」ノ剝脫セル部分ニ發錆ノ徵アルトキハ布片又ハ布綿ヲ以テ之ヲ除去シ「ワセリン」又ハ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ</p> <p>三 「メツキ」部ハ長期格納ニ方リ往々發錆スルコトアルヲ以テ兵器ノ種類ニ依リ薄ク「ワセリン」又ハ「ベトロラタム」ヲ塗布スヘシ</p>	<p>錆染又ハ染烘部及磷酸鹽皮膜ヲ施シタル部ハ乾布ヲ以テ拭淨シタル後常用品ニ在リテハ薄ク「スピンドル」油ヲ、格納品ニ在リテハ「ベトロラタム」ハ一時格納ノ場合ニハ「スピンドル」油、「ワセリン」又ハ「バラワセリン」ヲ塗布シ置クヘシ</p>
<p>塗料塗施部ハ塗油シ又ハ油布ヲ以テ拭フヘカラス</p>		<p>一 塵埃、泥土ノ附着セシトキハ十分之ヲ除去シタル後ニアラサレハ乾布等ヲ以テ拭淨スヘカラス</p> <p>二 著色部ヲ摩擦シ白色ニスヘカラス</p>

第二節 取扱

第五十七 金屬製品ノ取扱上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 他物ニ撃突又ハ墜落シ打痕、反起、變形、龜裂等ヲ生セシメサルコト
- 二 塵埃ノ附著セルモノヲ其儘使用シ摩擦ニ依リ條痕等ヲ生セシメサルコト
- 三 成ルヘク汗、雨水等ニ觸レシメサルコト
- 四 摩擦、打撃等ニ依リ染烘、錆染、「メツキ」、塗料等ヲ剝脱セシメサルコト
- 五 摩擦部ノ給油ヲ潤澤ニシ磨滅ヲ生起セシメサルコト
- 六 ねぢ、割「ピン」、ばね等ノ取扱ニ關シテハ左ノ件ニ注意スルコト

1 ねぢ

(イ) ねぢヲ緊ムルニハ通常右旋シ、弛ムルニハ左旋スルモノトス然レトモ時トシテハ之ニ反スルモノアルヲ以テ分解ニ方リテハ其方向ヲ確ムルヲ要ス又ねぢヲ

緊ムルニハ先ツ螺合ノ適否ヲ確メタル後徐々ニ之ヲ行フヘシ

(ロ) 數箇ノねぢヲ以テ螺著セルモノヲ戻シ又ハ緊ムルニハ相對スルモノヲ交互ニ旋回スヘシ

(ハ) 轉螺器其他ノ分解器ハ手力ノ及ハサルトキニ限り之ヲ使用シ確實ニ部位ニ嵌

入若ハ之ヲ挾持セシメ「片寄り」滑脱セシメサルヲ要ス
(ニ) ねぢニ相當セサルねぢ廻或ハ「スパナ」ヲ使用スヘカラス

2 割「ピン」

ばね性ヲ有スルモノノ外割「ピン」ヲ嵌裝セシトキハ其端末ヲ開キ置クヘシ

3 ばね

(イ) 蔓卷ばねハ猥ニ之ヲ伸縮スルコトナク又結合ニ際シ必要以外ニ力ヲ加ヘ全壓縮セシメサルヲ要ス

(ロ) 平扁ばねハ必要以外ニ屈撓セサルヲ要ス

金屬製品

- (ハ) 多數蔓卷ばねヲ組合ハス時ハ左右卷交互ニ組立ツヘシ
 (ニ) 極寒地ニ於テハばねハ折損シ易キヲ以テ注意スルヲ要ス

第三節 格納

第五十八 金屬製品ノ格納ハ一般事項ノ外特ニ左ノ諸件ニ注意シテ實施スルモノトス

區分	著眼點	實施要領
防錆塗料ヲ塗施セルモノ	防油	油ヲ吸收スヘキ物體(棚又ハ木箱等)ニ接觸セシメサルヲ要ス之カ爲亞鉛板若ハ亞鉛メツキ銅板、同鐵線等ヲ介在セシムヘシ、止ムヲ得サレハ油ヲ吸收セサル油紙ヲ使用スルコトヲ得
防錆塗料ヲ塗施セルモノ	膠著	堆積排列及棚格納品ニ對シテハ成ルヘク覆ヲ施スモノトス 堆積格納スルモノハ「パラフィン」浸漬ノ麻布ヲ介在スル等適宜ノ處置ヲ講スルモノトス

「メツキ」ヲ施セルモノ	防錆	「メツキ」部ハ長期格納間ニ於テハ往々發錆スルコトアルヲ以テ兵器ノ種類ニ依リ薄ク「ワセリン」又ハ「ベトロラタム」ヲ塗布スヘシ
精度ヲ要スルモノ	防塵、防濕及顛倒防止	
破損シ易キモノ	顛倒防止	
非鐵金屬部	防錆	要スレハ薄ク「セラツクワニス」ヲ塗布スルモノトス
ばね	屈曲及抗力	分離セルモノハ之ヲ平置シ結合ノ儘ノモノハ勉メテ之ヲ伸長ス
浸漬格納		適時検査ヲ容易ニ實施シ得ル如キ處置ヲ行フモノトス

第四節 検査

第五十九 金屬製品検査ノ主要ナル著眼點左ノ如シ

金屬製品

否良ノ能機		形 變			
轉 轉	ば	鉄熔隅割	ね齒双	割「キ	
輪 把	ね	著接角缺	ち	「ビ	
	部	部部部部	部部部	「ン」	
三二一 良ノ機給空難 能油裝油回ノ 不置轉不困	二一 衰折	龜	三二一 反缺磨	三二一 缺磨反	
	損損	裂	起損損	損損起	
四三二一 磨減及變形 結合不良	二一 取扱上ノ不注意 自然折損又ハ衰損	震動又ハ打撃	二一 取扱上ノ不注意 自然磨損	二一 取扱上ノ不注意 自然磨損	
四三二一 ハ軸座金ヲ裝スルカ又 ハ軸座金ヲ裝スルカ又 ハ軸座金ヲ裝スルカ又 ハ軸座金ヲ裝スルカ又	損シ極 易地ニ在リテハ特ニ折	一 品種及程度ニ依リ修 理ス 二 塗料塗抹部ニ對シテ ハ特ニ注意ヲ要ス			

及 傷 損					區分		
ノ摩擦部	穀筒軸及軸受	連繫部	桿軸	滑走部	摩 擦 部	一 般	部 位
二 一 燒 磨	二 一 動 搖	二 一 變 屈	二 一 歪 撓	二 一 損 減	七 六 五 四 三 二 一 捻 屈 坐 龜 變 反 打	著 眼 點	
三 二 一 他 物 ノ 介 在	三 二 一 他 物 ノ 介 在	三 二 一 他 物 ノ 介 在	三 二 一 他 物 ノ 介 在	三 二 一 他 物 ノ 介 在	四 三 二 一 射 擊 ニ 依 ル 震 動 運 動 ニ 依 ル 震 動 他 物 ト ノ 擊 突	原 因	
給油ヲ潤澤ニス	要スレハ樞軸ヲ交換ス			給油ヲ潤澤ニス	主要部分ノ打痕、變形等 ハ微少ナルモノト雖注意 ヲ要ス	摘 要	

油施	否 適 ノ 法 合 結			
	部 品	「キ」「割」「ビ」「ン」「ン」	托脚駐鋏 環 環 環	小ねち 「ナ」「ツ」「ト」
一 塗油ノ量 二 塗脂油ノ附著普及状態 三 塗脂油ノ使用區分	番號不一致	一 結合不完 二 全作用不確實		緊定ノ不確實 部品ノ不足
	結合上ノ不注意	一 嵌裝部トノ寸法不適合 二 磨滅		一 構造機能ノ研究不十分 二 部品ノ不足又ハ結合誤リ
貯藏品手入ノ際ハ塗油前 拭淨ノ良否及塗油後ニ於 ケル塗油普及ノ狀況ヲ檢				一 小ねち、ばね其他ノ部品 不足シ又ハ結合ヲ誤レル モノナキヤニ注意スヘシ 二 緊定ス 磨滅ノ爲緊定シ難キ モノハ座金ヲ裝ス

否 良 ノ 能 機

緊 塞 部		齒 車		目 盛
緊 塞 部	鉤 部	諸 起 樞 動 軸 螺 部 桿	「オ」「ム」	
良	緊塞作用ノ不確實	駐鉤作用ノ不確實	一 齒合ノ不確實 二 磨滅 三 回轉不良	一 指標ト分畫(刻線)ト一致セサル 爲誤差ヲ生スルモノ 二 指針ノ指度正確ナラサルモノ
等ノ不足又ハ衰損	座金、緊塞革、緊塞「ゴム」	鉤部ノ磨滅又ハ變形	一 取扱上ノ不注意 二 塗油ノ不足 一 齒合部ノ磨滅 二 塗油ノ不足	一 緊定部ノ緩解又ハ狂ヒ 二 摩擦部ノ磨滅
ス	緊塞部品ヲ補填又ハ交換		一 給油ヲ潤澤ニス 二 要スレハ修理ス	適量ニ塗油ス 程度大ナルモノハ修理ス

否 適 ノ	無有ノ垢汚及錆	錆施 染ノ 烘 適 否
四 注油孔、給油器、油溜ノ油ノ補給 五 摩擦部、滑始部等ニ對スル施油量	一 金屬部特ニ主要部ノ發錆 二 塗染、「メツキ」部ノ發錆 三 發錆ニ對スル手入及處置 四 諸收容罐或ハ箱、匣内等ノ塵埃、污垢	一 錆染、染烘、「メツキ」又ハ塗料塗施前ニ於ケル舊塗物若ハ舊「メツキ」ノ剝脱及清拭 二 前項各部ノ剝脱及發錆ニ要スル部分又ハ塗施スヘカラサル部分ニ塗料ヲ施セ 三 注油孔、注油壺、注油ノルモノ
スヘシ	塗染又ハ「メツキ」部ハ外觀完全ナルカ如キ皮膜モ詳細ニ檢スルトキハ往々其内面ニ發錆、腐蝕ヲ來セルコトアルヲ以テ注意スヘシ而シテ多クハ龜裂又ハ膨起等ヲ存スルニ依リテ容易ニ識別スルコトヲ得	一 錫「メツキ」、亞鉛「メツキ」ノ剝脱セル鐵部ニ發錆ノ徵アルトキハ布片又ハ紙鏝(布鏝)ヲ以テ之ヲ除去シ「ハラワセリン」、「ワセリン」又ハ「スピンドル」油ヲ塗布スベシ

塗料塗ハ又「キツメ」及剝脱ノ有無	塗料塗ハ又「キツメ」及剝脱ノ有無
四 摩擦部等) 塗料平等ナラサルモノ又ハ下塗塗料ヲ施ササルモノ 五 塗料膠著ノ爲機能ヲ害セルモノ	二 塗料剝脱セルトキハ適宜補修塗ヲ行フヲ要ス 補修塗ヲ行フヘキ塗料ナキトキハ一時「ハラワセリン」、「ワセリン」又ハ「スピンドル」油ヲ塗布シ置クヘシ

第四章 木、竹及藤製品

第一節 手入及取扱

第六十 木、竹及籐製品ノ手入及取扱上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 木、竹及籐部ハ塵埃及污垢ヲ除去シ乾布ヲ以テ拭淨スルコト
- 二 薄板製品ハ殊ニ變歪ヲ生シ易キヲ以テ成ルヘク日光ニ直射セシメサルコト

金屬製品

- 三 塗料、塗漆等ヲ施シタルモノハ之ヲ剝脱セサルコト又「ワニス」ヲ施セルモノハ熱氣及溶劑ニ觸レシメサルコト
- 四 籐製品ハ其表皮ヲ毀損スルトキハ著シク其抗力ヲ減少スルコトアルヲ以テ特ニ留意スルコト

第二節 格納

第六十一 格納ハ特ニ變歪、乾裂、腐朽及蟲害ヲ防止スルコトニ注意シ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

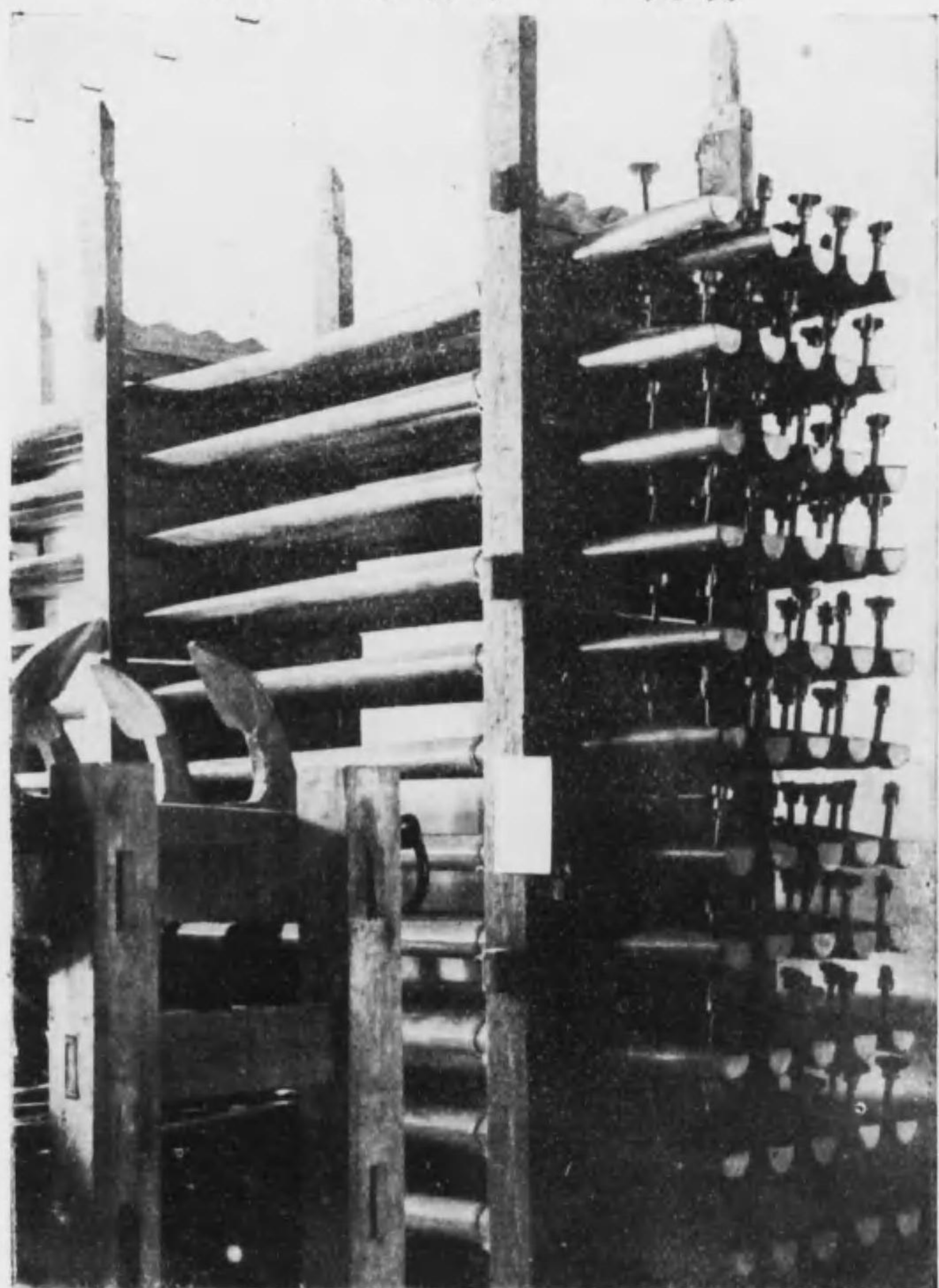
區分	要領	摘要
位置	一 日光ノ直射ヲ受ケサルコト 二 通氣良好ナル場所ヲ選定シ濕潤セル場所ヲ避クルコト	

方	法
一 床面ニ接觸セサル如ク枕木上ニ整置スルコト 二 堆積格納スル場合ニハ上層品ノ重量ニ依リ下層品ニ變歪ヲ生セサル如ク適宜ノ方法ヲ講スヘシ 三 輕量ナル籐製品ハ爲シ得レハ懸吊スルヲ可トス 四 長大ナル木製品ハ格納用具ニ依リ其支撐法ヲ適當ニシテ變歪ヲ防止スルヲ要ス(第七圖) 五 薄板製品ノ格納ハ反リヲ生セサル方法ヲ講スヘシ	一 木口ノ割裂ヲ防ク爲ニハ同部ニ「サルチル」酸塗布紙ヲ「サルチル」酸配合糊ヲ以テ貼附スルカ又ハ「ベイント」ノ類ヲ塗施スヘシ 二 防蟲ノ爲ニハ「クレオソート」ヲ使用スヘシ

第三節 検査

木、竹及籐製品

第七圖
長大ナル木製品ノ格納



八四

第六十二 木、竹及藤製品検査ノ主要ナル着眼點等左ノ如シ

區分	著眼點	原因	摘要
疵瑕	一 乾割 二 割缺 三 裂損	一 取扱上ノ不注意 二 過度ノ乾燥	
歪變	一 反遊 二 隙リ	一 自然乾燥 二 格納法ノ不良	
漆塗及料塗	一 塗料ノ剝脫 二 塗漆ノ剝脫	一 取扱上ノ不注意 二 格納間膠著	適宜ノ補修塗ヲ行フ 亞麻仁油ヲ塗布シ其吸收ヲ待チテ乾布ヲ以テ拭淨ス
害蟲		防蟲法不適當	一 殺蟲法ヲ施シ要スレハ蟲孔ヲ填塞ス 二 蟲害ノ有無ヲ檢スルニハ害蟲ノ排泄物小孔又ハ生蟲及卵棲息ノ有無等ニ注意スヘシ
朽腐		濕氣及發黴	埋木ノ部分ニ於テ特ニ生起シ易シ

皮革製品

八五

第五章 皮革製品

第一節 手入

第六十三 皮革製品ノ手入ハ概ネ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區分	手入要領	摘要
拭	<p>一 「タンニン」鞣革ハ刷毛又ハ乾布ヲ以テ塵埃ヲ拭淨シタル後革脂ヲ給スヘシ然レトモ拭淨ニ際シ強摩シ革ノ表面(毛ノ生スル方側所謂銀面)ヲ剝脫スヘカラス又革質ノ硬化セルモノハ含水布片ヲ以テ革質内ニ少シク濕氣ヲ滯ハシメタル後油布ヲ以テ稍々多量ニ給油スヘシ</p> <p>二 「タンニン」鞣革以外ノ革ニ在リテハ乾燥セル布片ヲ以テ拭淨シ通常給油セサルモノトス而シテ「クロム」鞣革ニ在</p>	<p>一 手入ハ日光ノ直射セサル場所ニ於テ實施スヘシ</p> <p>二 用途及種類ニ從ヒ給油ノ度ヲ異ニスルヲ要ス</p> <p>例ハハ褐色堅牛革ハ變形ヲ防ク爲其量ヲ減シ之ニ反シ褐色多脂牛革ハ稍々多量ナラシメ其他屈曲部ノ如キハ特ニ塗油ヲ潤澤ニシ其龜裂ヲ豫防スルカ如キナリ</p> <p>三 常ニ現況ニ適應シ給油スルヲ要ス其量過度ナルトキハ革質柔軟トナリ</p>
淨	<p>リテハ拭淨ノ爲水若ハ石鹼水ヲ使用スルコトヲ得</p> <p>三 給油ニ方リテハ主トシテ革ノ表面ヨリ僅ニ含油セル布ヲ以テ等齊且數次ニ塗施シ其吸收ヲ待チ乾布ヲ以テ過剩油ヲ拭ヒ去ルヘシ</p> <p>但硬化セル革具ニ對シテハ要スレハ表裏兩面ヨリ給油スルヲ可トス</p> <p>常用品中馬體及被服ニ觸接スル部位及表面ヨリ行フヲ得サル部位ニ給油スルニハ其反對方側ヨリスヘシ</p> <p>複層革ニ對シテハ兩面ヨリ給油スルモノトス</p> <p>四 給油スルニハ脂油ノ吸收ヲ良好ナラシムル爲湯煎器ヲ以テ脂油ニ微温ヲ與フルヲ可トス殊ニ寒冷期ニ於テ然リトス寒氣甚シキ時ハ革ノ表面ニ脂油浸出シテ結晶狀ヲ呈スルコトアルモ之ヲ除去スルヲ要セス</p> <p>五 製作後永年格納セルモノヲ使用スルニ方リテハ當座少量宛稍々頻繁ニ塗脂スルヲ可トス</p>	<p>爲ニ變形若ハ伸長シ又過少ナルトキハ硬化變質ヲ來スモノトス</p> <p>手入ヲ怠リ或ハ其方法ヲ誤リ一度變質、損敗等ヲ來ストキハ其恢復通常困難ナルヲ以テ日常ノ手入特ニ初期ノ手入ニ際シテハ注意スルヲ要ス</p> <p>縫糸部ニ於ケル蠶油ノ殘存ハ往々絲質ヲ害シ破綻ヲ來スヲ以テ除去スルヲ可トス</p> <p>縫糸ノ磨損シ易キ部分及腐朽シ易キ部位ニハ防擦防濕ノ爲要スレハ蜜蠟ヲ塗施スルヲ可トス</p>

油	施	及
油	<p>四 給油スルニハ脂油ノ吸收ヲ良好ナラシムル爲湯煎器ヲ以テ脂油ニ微温ヲ與フルヲ可トス殊ニ寒冷期ニ於テ然リトス寒氣甚シキ時ハ革ノ表面ニ脂油浸出シテ結晶狀ヲ呈スルコトアルモ之ヲ除去スルヲ要セス</p> <p>五 製作後永年格納セルモノヲ使用スルニ方リテハ當座少量宛稍々頻繁ニ塗脂スルヲ可トス</p>	<p>三 給油ニ方リテハ主トシテ革ノ表面ヨリ僅ニ含油セル布ヲ以テ等齊且數次ニ塗施シ其吸收ヲ待チ乾布ヲ以テ過剩油ヲ拭ヒ去ルヘシ</p> <p>但硬化セル革具ニ對シテハ要スレハ表裏兩面ヨリ給油スルヲ可トス</p> <p>常用品中馬體及被服ニ觸接スル部位及表面ヨリ行フヲ得サル部位ニ給油スルニハ其反對方側ヨリスヘシ</p> <p>複層革ニ對シテハ兩面ヨリ給油スルモノトス</p> <p>四 給油スルニハ脂油ノ吸收ヲ良好ナラシムル爲湯煎器ヲ以テ脂油ニ微温ヲ與フルヲ可トス殊ニ寒冷期ニ於テ然リトス寒氣甚シキ時ハ革ノ表面ニ脂油浸出シテ結晶狀ヲ呈スルコトアルモ之ヲ除去スルヲ要セス</p> <p>五 製作後永年格納セルモノヲ使用スルニ方リテハ當座少量宛稍々頻繁ニ塗脂スルヲ可トス</p>

木、竹及籐製品

ノ 備	去除ノ物著膠	用 使 ノ 水
<p>一 發微ヲ認メタルトキハ速ニ之ヲ處置スヘシ</p> <p>二 微ヲ除去スルニハ乾布若ハ濕布ヲ以テ其表面ヲ拭淨スヘシ然レトモ其方法不完全ナルトキハ却テ往々其移植ヲ助成スルコトアルヲ以テ特ニ注意シ且一旦除微ニ使用セル布片ハ決シテ其儘他</p>	<p>黑色又ハ半透明ナル樹脂狀ノ分泌物ヲ生シ若ハ金屬類ト接觸セル面ニ污垢膠著シ布片ヲ以テ除去困難ナルトキハ「テレピン」油或ハ揮發油等ヲ局部ニ塗施シ之ヲ溶解拭淨シ爾後適宜給油スヘシ</p>	<p>手入ニ水ヲ用フルコトハ勉メテ之ヲ避クヘシ</p> <p>然レトモ污垢又ハ泥土附著シ除去困難ナルトキハ含水布片ヲ以テ拭淨シ已ムヲ得サレハ清水又ハ軟石鹼水ヲ用ヒ刷毛又ハ布片ヲ以テ徐々ニ洗除スルコトヲ得</p>
<p>一 微ノ發生ヲ認メ得ルハ既ニ孢子發育シテ菌絲トナリ網狀ヲ形成シ革質カ其侵害ヲ受ケツツアルノ時ナリ故ニ通常之カ取扱ニ際シテハ既ニ孢子ノ移植ヲ受ケアルコトニ留意シ發育ノ機會ヲ與ヘサルヲ要ス</p> <p>二 一旦發微セシモノハ再發シ易キヲ</p>		<p>手入ニ水ヲ用ヒタルトキ又ハ雨雪等ノ爲多量ノ水分ヲ吸收シタルトキハ乾布ヲ以テ拭ヒタル後通風良好ナル場所ニ於テ陰乾シ其全ク乾カサル以前ニ稍多量ノ給油ヲ爲シ其吸收ヲ待チテ輕ク拭磨スヘシ乾燥ノ爲決シテ直射日光又ハ火氣ニ觸レシムヘカラス</p>

入手ノ品納格	入 手
<p>左記各項ノ外用用品ニ準スルモノトス</p> <p>一 貯藏品ノ手入ニハ水ヲ用フルコトヲ避クヘシ</p> <p>二 密實密閉格納品ハ軍隊ニ在リテハ概ネ三年其他ハ概ネ四年毎ニ一回拭淨ノ上油脂ヲ塗施スヘシ</p> <p>集團密閉格納品ハ前項ヨリモ短期間ニ手入ヲ要スルモノトス</p>	<p>ノ發微セサル革具ニ使用スヘカラス</p> <p>三 發微ノ度稍大ナルモノニ對シテハ布片ヲ殺菌液ニ浸シ輕ク絞リテ其一枚ヲ以テ發微部ヲ覆ヒ其微カ四方ニ飛散セサル如ク拭淨除去シ次テ他ノ一枚ヲ以テ發微部附近ノ表面ヲ拭掃シタル後乾燥殺菌布ニテ十分革面ヲ拭淨シ之ヲ陰乾スヘシ</p>
<p>一 貯藏品ノ手入ハ成ルヘク快晴ノ日ヲ選ビ屋蓋下ニ於テ行フヲ要ス</p> <p>二 過度ニ乾燥スル倉庫ニ格納セルモノハ給油回數及牛脂ノ配合比ヲ増加シ又油脂ノ浸透十分ナラサルモノニハ鯨油ノ配合比ヲ増加スヘシ</p> <p>三 格納品ハ手入後清淨ナル手袋ヲ裝シテ取扱ヒ素手ニテ觸レサルヲ要ス</p>	<p>以テ貯藏品ニ在リテハ拭淨後ト雖成ルヘク良品ト分離格納スルヲ有利トス</p>

第二節 取扱

第六十四 皮革製品ノ取扱上一般ニ注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 他物トノ接觸ニ依リ搔痕ヲ生シ又ハ銀面ヲ剝離セサルコト
- 二 取扱ヲ鄭重ニシ縫糸ヲ破綻セサルコト
- 三 過度ニ屈曲シ表面ニ龜裂又ハ皺襞ヲ生セシメサルコト
- 四 革條類ヲ過度ニ牽張シ破斷セシメサルコト
- 五 火氣ニ近ツケ硬化セシメサルコト
- 六 極寒地ニ在リテハ凍結ニ基因シ切損シ易キヲ以テ特ニ取扱ニ注意スルヲ要ス

第三節 格納

第六十五 皮革製品ノ格納位置ハ濕氣ノ虞少ク清淨乾燥ニシテ且四季ヲ通シ低溫清涼ナル倉庫ヲ選定スヘシ

第六十六 一時格納

皮革製品ノ一時格納ハ概ネ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

- 一 革條類ハ適宜ノ單位毎ニ結束シテ懸吊ス
- 二 懸吊ニ適セサルモノハ鞍架又ハ床面ニ排列ス
- 三 數量夥多ナルトキハ簡易ナル密閉室又ハ適宜ノ室ニ集團格納ス

第六十七 長期格納

皮革製品ノ長期格納ハ黴ノ發生、脂油ノ變質及發散豫防ノ爲成ルヘク密閉格納ヲ行フヲ有利トス其ノ方法概ネ左ノ如シ

一 密閉格納ノ設備

1 箱類

適宜木製ノ箱ヲ應用シ内部ノ狀況ヲ外部ヨリ視視シ得ル如ク適宜ノ小窓ヲ設ケ又空氣ノ流通ヲ遮斷スル爲目張ヲ施スヘシ

2 密閉室

皮革製品

乾燥セル木材ヲ組立テ外廓ヲ造リ内部ハ數段ニ分チ外部及底面ハ乾燥セル板、「ゴム」引布、裏面ハ紙張リトシ「セラツクワニス」又ハ柿澁ヲ塗布セル厚麻布(厚紙)等ヲ以テ被包シ適宜ノ位置ニ窓ヲ設ケ内部ノ狀況ヲ視視シ得ル如クシ要スレハ格納品ノ一部ヲ抽出點檢シ得ル裝置ヲ爲シ又内部ノ狀況ノ判定困難ナル視視窓ニハ外部ヨリ點滅シ得ル照明裝置ヲ施スヲ可トス

密閉格納ノ利ハ外氣ノ流通ヲ完全ニ遮斷スルコトニ依リテ期待シ得ルモノニシテ不完全ナル密閉ハ却テ有害ナルコトアリ故ニ密閉室ニハ十分ナル目張ヲ施シ「セラツクワニス」ヲ塗布スル等ノ補助手段ニ依リテ氣密ヲ完全ナラシムルコト肝要ナリ

二 密閉格納ノ方法

1 密實密閉格納

小部品ハ糊分少キ紐ヲ用ヒテ適宜ノ單位毎ニ結束シ相互密接シテ填實スヘシ之室内ノ空氣量ヲ成ルヘク減少シ不利ナル交感ヲ避ケンカ爲ナリ

2 集團密閉格納

形態複雜ニシテ密實スルコト困難ナルモノハ同種又ハ同形態ノモノヲ集メテ排列(爲シ得レハ堆積)シ勉メテ空積ヲ減少スルモノトス

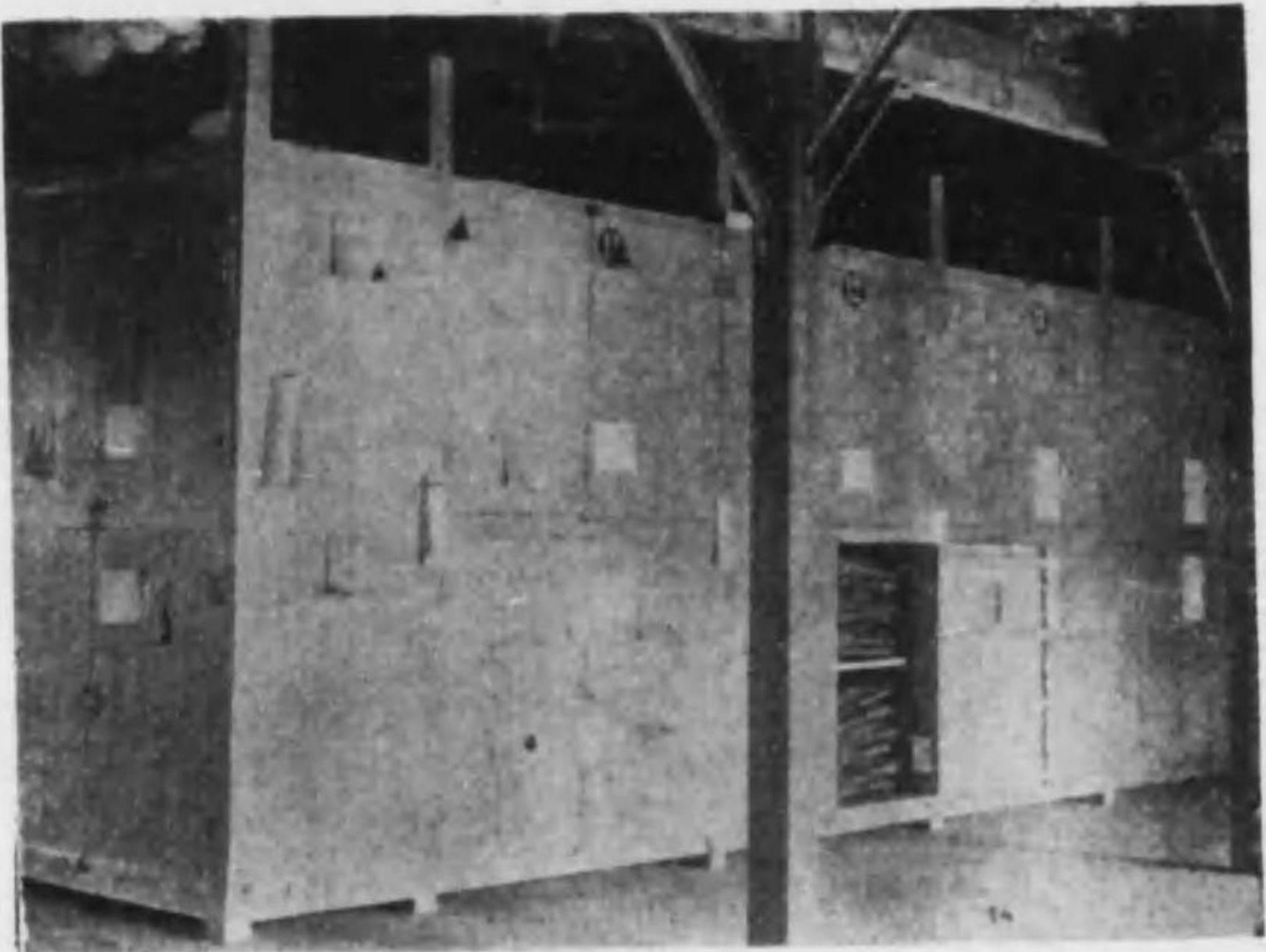
三 密閉格納ノ實施

1 密閉格納ノ實施ハ成ルヘク乾燥季ヲ選フヘシ

2 皮革製品ト金屬(就中銅、黃銅、鐵)トノ接觸面ニハ錆ヲ發生シ且革質變化ヲ來シ易キヲ以テ之カ格納ニ方リ兩者ヲ分離

シ得ルモノハ成ルヘク之ヲ分離シ置クヲ可トス

皮革製品



第 八 圖 密閉格納室

- 3 密閉前發黴、害蟲發生ノ有無含油量ノ適否及格納用具等ヲ點檢シ且所要ノ手入ヲ實施シタル後防黴劑ヲ添加シ密閉スヘシ但製作後間モナク格納スルモノハ施油スルヲ要セサルモノトス
- 4 格納間ニ於テ相互損傷又ハ過度ノ變歪ヲ生セサル如ク排列又ハ堆積ニ注意スヘシ
- 5 收容ニ際シテハ成ルヘク製作年次毎ニ區分ヲ明カニシ且程度略ク同等ノモノヲ取纏ムヘシ
- 6 古品ハ發黴ヲ誘起シ又ハ害蟲發生ノ虞アルヲ以テ新品ト分離スルヲ可トス
- 7 密閉室内ノ温度及湿度共ニ高キトキニ於テハ黴ヲ生シ易キヲ以テ此等ノ變化ニ注意シ若保存上不利ナル現象ヲ生シタルトキハ直ニ適宜ノ處置ヲ講スヘシ
臺灣等ニ於ケル高温高濕ノ地方ニ在リテハ要スレハ「アドソール」等ノ空氣乾燥劑ヲ使用シ室内ノ湿度ヲ調節スルヲ要スルコトアリ

黴ハ高温ト高濕ト相伴フトキニ於テ發生スルモノニシテ諸外國ニ在リテハ高温ノトキ湿度低下シ高濕ノトキ湿度降下スルモ本邦ニ於テハ高温ノトキ湿度高キヲ以テ外國ニ比シ發黴スルコト多シ之カ爲夏季ニ於テ湿度ヲ上昇セシメサル目的ヲ以テ密閉格納ヲ利アリス故ニ温度二〇度以上ノ場合ニ於テ密閉室内ノ對比湿度ヲ八〇%以下ニ保持スルヲ得サルトキハ特種ノ處置ヲ講スルコト必要ナリ

密閉格納室又ハ箱内部ノ湿度ハ湿度計ヲ備フルカ又ハ鹽化「コバルト」試驗紙ヲ使用シ其色相ノ變化ニ依リ之ヲ判定スルモノトス(附圖第四)

湿度大ナル地方ニ在リテハ毛髮湿度計ヲ使用セサルヲ可トス

單ニ防蟲及防塵ノ爲格納スルトキ又ハ交換ノ爲屢、出納ヲ要スル如キモノニ在リテハ前各號ニ準シ簡易ナル密閉格納ヲ行フモノトス

第六十八 密閉格納ノ有効期限ハ密閉ノ良否、革ノ程度及土地ノ狀況ニ依リ差異アルモ密閉完全ナル場合ニ於テハ製作年次新シキモノハ概ネ四年其ノ古キモノハ概ネ三年ヲ標準トス

第四節 検査

第六十九 皮革製品検査上ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

傷 損 及 質 變					區 分	著 眼 點	原 因	摘 要
縫糸部破綻	疵痕、破損	龜裂	硬 化	伸 縮	軟 化	一 給油ノ過量 二 革脂配合ノ不適當	軟化セルモノヲ緊張	革脂ノ配合ニ注意シ給油量ヲ減少ス
一 縫糸部ニ贅油ノ殘存 二 取扱上ノ不注意	使用上ノ不注意	一 油ノ不足 二 過度ノ屈曲、火氣ノ接觸	一 自然硬化又ハ給油ノ不足 二 使用後ノ手入不良					良質ノ油ヲ潤澤ニ施ス

否	適	油	施	害鼠及徴發	
				一 發 徴	二 鼠 害
			一 給油ノ量 二 給油ノ普及 三 油ノ使用區分 四 格納品ニ對シテハ油ノ效果ノ有無	一 濕氣ノ存在 二 污垢ノ附著其他	一 施油適度ナルモノハ之ヲ輕ク裏面ニ彎曲スルモ銀面ニ龜裂ヲ生セスシテ稍、變色シ原形ニ復スレハ革ノ色舊ニ復スルモノトス 裏面ニ彎曲セシムル爲革條等ニ在リテハ概ネ一指ヲ内部ニ挿ムヲ度トス此際徐、ニ屈曲シ始ヨリ強ク曲ケテ銀面ニ龜裂ヲ起サシメサル様注意スヘシ彎曲點ハ窻孔及縫糸部ノ位置ヲ避クヘシ 二 格納品手入ノ際ハ給油前拭淨ノ良否及給油後ニ於ケル油普及ノ狀況ヲ檢スヘシ

共	一 著シク汚垢、脂油ノ膠著又ハ塵埃ノ附著セルモノノ有無
他	二 修理品ニ於ケル穿孔實施ノ適否

第六章 麻及綿製品

第一節 手入ノ取扱

第七十 麻及綿製品ノ手入及使用上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

- 一 麻及綿製品ハ常ニ乾燥シアルコト之カ爲時々日乾スヘシ但日乾ニ方リテハ附著革具ニ十分給油スルヲ可トス
- 二 塵埃、汚垢ノ附著セルトキハ之ヲ除去シ要スレハ日乾ノ後輕打スルコト
- 三 甚シク汚染セル部分ハ水要スレハ石鹼水ヲ以テ洗滌シタル後十分ニ之ヲ乾燥スルコト

四 染料ヲ施シアルモノニシテ褪色著シキモノハ染替ヲ行ヒ保存性ヲ大ナラシムルコト

第七十一 麻及綿製品ノ汚染セルモノハ其種類ニ應シ左ノ溶劑又ハ石鹼水ニ依リ之ヲ除去スヘシ

汚染ノ種類	汚染ヲ生スル主成分	洗滌劑	備考
「ワニスベイント」	樹脂	「アルコール」	汚染ノ直後ニ於テハ熱石鹼水ニ依リ概ネ除去スルコトヲ得
機械用油類	不乾燥性ノ油質	揮發油	
蠟	蠟質	「テレピン」油	
「ベイント」	乾燥性ノ油質	「アルコール」	
「コールタール」	顔料類	溫石鹼水	

第二節 格納

第七十二 麻及綿製品ノ格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區分	格納要領	摘要
位置	常ニ空氣ノ流通良好ニシテ乾燥セル場所ヲ選定スヘシ	一 長期格納ノモノニ在リテハ要スレハ覆ヲ施スヘシ 二 結束懸吊用紐ハ糊分少ナキ品ヲ選ビ及格納間切斷セサルヲ要ス附屬金具(水囊ノ底環等)ノ爲切斷ヲ誘致スル虞アルモノハ顛倒シテ懸吊スル等適宜ノ處置ヲ講スヘシ
設備	梁間ニ竹ヲ架シ又ハ適宜ノ間隔ヲ存シテ折釘ヲ釘著スヘシ	三 馬具類ノ部品ノ如ク同一組ニ屬スルモノニ在リテハ組ノ組成ニ便ナル如ク懸吊順序ヲ規定スヘシ 四 密閉格納ハ「蒸レ」又ハ濕潤ノ虞ナキ場合ニ限り行フモノトス
方法	一 適宜ノ單位毎ニ結束シ懸吊スヘシ 二 防蟲、防塵又ハ附著革具ノ保存上必要アルトキハ箱内ニ格納シ又ハ密閉格納ヲ行フコトヲ得	

第三節 検査

第七十三 麻及綿製品検査上ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

着眼點	原因	摘要
蟲害	防蟲ノ處置不適當	一 殺蟲ノ上防蟲法ヲ講ス 二 害蟲ノ排泄物、小孔又ハ生蟲棲息ノ有無等ニ注意ス
鼠害	一 汚垢ノ附著 二 防鼠設備ノ不良	
腐朽	一 乾燥不十分 二 格納法不良	
蒸レ	濕熱及濕氣トノ交感	乾燥ノ上通風良好ナル場所ニ格納ス
發黴	濕氣ノ爲及通風不良	黴ヲ除去シタル上通風良好ナル場所ニ格納ス
破損	取扱上ノ不注意	

第七章 毛類及毛製品

麻及綿製品、毛類及毛製品

第一節 手入及取扱

第七十四 毛類及毛製品ハ常時乾燥シアルヲ要ス之カ爲時々日乾スヘシ若塵埃、汚垢ノ
 附着セルトキハ之ヲ除去シ要スレハ日乾ノ上輕打スヘシ
 但甚シク汚染セル部分ハ水、要スレハ石鹼水ヲ以テ洗滌シタル後十分ニ之ヲ乾燥スヘ
 シ

第七十五 毛類及毛製品中最モ顧慮スヘキハ害蟲ノ發生ニ在リ之カ爲常ニ其清潔、乾燥
 ニ注意スルト共ニ之カ防遏ニ勉メ且絶エス害蟲發生ノ徵候ヲ視察スルヲ要ス

一 防蟲法

毛類及毛製品ノ貯藏品ニ在リテハ防蟲及防腐用トシテ「バラヂクロールベンゾール」
 「四鹽化炭素又ハ揮發油ニ溶解シタルモノ或ハ「ナフタリン」ヲ「テレピン」油ニ溶解
 シタルモノヲ噴霧器ヲ以テ撒布スルカ又ハ防蟲劑ヲ添加シ置クヘシ

二 殺蟲法

害蟲ハ其幼蟲ノ時機ニ於テ之カ撲滅ヲ圖ルヲ要ス若幼蟲ヲ發見スルカ又ハ其棲息ノ
 徵候ヲ認メタルトキハ左ノ方法ヲ講スヘシ

- 1 直ニ其内部ニ殺蟲液ヲ注射ス
- 2 「サイローム」、「クロルピクリン」等ノ燻蒸法ヲ行フ
- 3 害蟲ノ寄生シ易キ麻製品ハ點檢ノ上要スレハ分離シ且庫内ノ大掃除ヲ行フ

第二節 格納

第七十六 一時格納

一時格納ハ成ルヘク防蟲法ヲ施シ箱ニ收容スルヲ可トス但時トシテ單ニ覆ヲ裝シ又ハ
 紙(布)包ト爲スヲ以テ足ルコトアリ

第七十七 長期格納

毛類及毛製品

皮革製品ノ要領ニ準シ成ルヘク密閉格納ヲ行フモノトス但要スレハ毛布類ハ壓搾梱包シテ格納スルモノトス

實施上注意スヘキ事項左ノ如シ

- 一 取脱シ得ル革製品又ハ金屬部ハ之ヲ取脱スルコト
- 二 取脱シ得スシテ他部ニ接觸シ發錆シ易キカ又ハ他ニ損傷ヲ與フル虞アルモノハ紙ヲ以テ包ムコト
- 三 密閉物間ニハ防(殺)蟲劑ヲ添加シ「サルチル」酸配合糊ヲ以テ目張ヲ施シ又被包ノ爲ニハ「サルチル」酸塗布紙ヲ使用スルコト

第三節 検査

第七十八 毛類及毛製品ハ蟲害又ハ害蟲棲息ノ有無、乾燥ノ状態等ニ就キ検査スヘシ

第八章 ゴム類製品

第七十九 「ゴム」類製品トハ「ゴム」液及加硫「ゴム」ヲ用ヒテ製作シタルモノヲ總稱ス

第一節 手入

第八十 「ゴム」類製品ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

- 一 濕潤セル場合ハ乾布ヲ以テ拭淨シ要スレハ蔭乾ス

直射日光及火氣ニ依リ直接乾燥スルコトハ「ゴム」ノ變質ヲ來シ使用ニ耐ヘサルニ至ルヲ以テ特ニ注意スルヲ要ス

- 二 泥土ノ附着セル場合ハ水洗ヲ行ヒタル後前項ノ處置ヲ爲ス
- 三 塵埃ノ附着セル場合ハ塵拂又ハ掃除刷毛ヲ以テ之ヲ拂ヒ要スレハ乾布ヲ以テ拭淨ス
- 四 汚垢ノ附着セル場合ハ布片ヲ以テ拭淨シ要スレハ水洗シ第一項ノ處置ヲ爲ス膠著甚シク以上ノ方法ニテ除去困難ナル場合ハ竹筴等ニテ擦リ落シ要スレハ含水布片ヲ

以テ拭淨ス

一〇六

五 鑛油類ノ附著セル場合ハ乾布ヲ以テ十分ニ拭淨スヘシ

第二節 取扱

第八十一 「ゴム」類製品ノ取扱上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 「ゴム」製品

- 1 軟質加硫「ゴム」ニ在リテハ濫ニ延伸又ハ屈曲セサルコト
延伸又ハ屈曲ヲ反復スルトキハ遂ニ彈性ヲ失ヒ或ハ龜裂ヲ生シ其用ニ適セサルニ
至ルモノトス殊ニ凍結硬化セルモノニ對シテハ此注意最モ肝要ナリ
- 2 「ゴム」類殊ニ軟質加硫「ゴム」ハ成ルヘク直射日光、火氣及寒氣トノ交感ヲ避ク
ルコト
- 3 「ゴム」類殊ニ軟質加硫「ゴム」ハ揮發油、「テレピン」油、「ベンゾール」、「アセ

トン」、「クロロホルム」、「四鹽化炭素、硫化炭素、礦油等ニヨリ膨潤シ尙高温ニ於
テハ遂ニ崩解スルニ至ルヲ以テ手入等ニ際シ此等ヲ使用セサルハ勿論此等ニ接觸
セシメサルコト

二 「グッタベルカ」製品

- 1 日光、火氣ニ觸レシメサルコト、加熱スルトキハ軟化變形シ電纜等ニ在リテハ
偏心ヲ來タスコトアリ
- 2 有機溶劑類ニ接觸セシメサルコト
- 3 其他「ゴム」製品ニ準ス

第三節 格納

第八十二 「ゴム」類殊ニ軟質加硫「ゴム」ノ保存適當ナラサルトキハ格納中ニ變質シ爾後
使用シ得サルニ至ルコトアリ特ニ注意ヲ要ス

「ゴム」類製品

一〇七

第一款 軟質加硫ゴム

第八十三 一時格納

簡單ナル密閉設備ヲ施スカ或ハ黑色若ハ赤色ノ被包物ヲ以テ覆ヒ日光ヲ遮斷スルト共ニ新鮮ナル空氣トノ接觸ヲ避クル如クス

第八十四 長期格納

日光及空氣中ノ酸素ニ依ル酸化作用ヲ防止スル爲通風少キ冷暗ノ箇所ヲ選ヒ密閉格納スヘシ

格納ニ方リ一般ニ注意スヘキ事項左ノ如シ

一 「ゴム」ハ金屬部(特ニ銅)ト接觸スルトキハ遊離硫黃及之カ酸素ト結合シ生スル硫酸ノ爲之ヲ發錆セシムルコト多ク且銅、「マンガ」ノ微量ノ存在モ「ゴム」ノ變質ヲ促進スルヲ以テ兩者ヲ分離シ得ルモノニ在リテハ成ルヘク離隔シテ格納スルヲ可ト

ス

二 光線遮斷ノ爲黑色若ハ赤色ノ被包物ヲ以テ覆フヲ可トス

三 壓迫、屈折、延伸等總テ外力ヲ加ヘ又ハ格納品相互ヲ接觸シタル儘格納スヘカラ

ス

四 容積大ナラサルモノハ新鮮ナル空氣トノ接觸ヲ避クル爲「セロファン」ヲ以テ包裝スルカ「タルク」、水酸化「カルシウム」、炭酸「カルシウム」等ノ如キ白色不作用性ノ微粉末中ニ埋沒スルカ又ハ「グリセリン」水(「グリセリン」一水一ノ割合)中ニ浸漬シ置クヲ可トス但「セロファン」ハ紫外線ヲ透過スルヲ以テ其外部ヲ黑色若ハ赤色ノ被包物ニテ覆フモノトス

第二款 エポナイト

第八十五 「エポナイト」ノ格納ハ前款ニ準シ左ノ如ク實施スヘシ

「ゴム」類製品

一 一時格納

黑色若ハ赤色ノ被包物ヲ以テ覆フ

二 長期格納

簡單ナル密閉室ニ格納ス

第四節 検査

第八十六 「ゴム」類製品検査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

質 變	著 眼 點	状 態	原 因	摘 要
軟 化	老 化	第一 章 第一 節 第十 款 「ゴム」ノ 變 質 參 照		凍 結 硬 化 シ タ ル モ ノ ハ 徐 ニ 溫 メ 靜 ニ 揉 ム ト キ ハ 彈 性 ヲ 恢 復 ス ル コ ト ア リ
		(硬 化 (エポナイトヲ除ク))		程 度 輕 易 ナ ル モ ノ ハ 「タルク」 粉 ノ 類 ヲ 其 表 面 ニ 塗 布 ス ヘ シ

損 傷	變 形	損 傷
磨 耗	裂 傷	磨 耗
	一 過 度 ノ 伸 張 又 ハ 壓 縮 二 「ゴム」質ノ老化 三 「エポナイト」ノ取扱適當ナラサル爲	過 度 ノ 荷 重 又 ハ 摩 擦

第九章 ベークライト製品

第八十七 「ベークライト」製品ノ保存ハ概ネ左ノ如ク實施スルモノトス

一 手 入

「ゴム」類製品

1 塵埃ノ附著セルモノハ乾布又ハ刷毛ヲ以テ除去ス

2 泥土ノ附著セルモノハ含水布片ヲ以テ之ヲ除去シタル後乾布ヲ以テ拭淨ス

3 污垢及油類ノ附著セルモノハ揮發油等ノ溶劑ニテ除去シタル後直ニ乾布ヲ以テ拭淨ス

二 取扱

1 鑄造シタルモノハ破碎シ易キヲ以テ他物ニ擊突又ハ墜落セサルコトニ注意スヘシ

2 「エポナイト」ニ比シ屈曲率小ナルヲ以テ屈撓セシメサル如クスヘシ

三 格納

「ベークライト」製品ハ濕氣ナキ場所ニ格納スヘシ

四 検査

著	眼	點	原	因
破損、變歪、磨滅			主トシテ取扱上ノ不注意	
絶縁力低下			塵埃、濕氣等	

第十章 ファイバー製品

第八十八 「ファイバー」ハ吸濕性ヲ有スルヲ以テ保存上左ノ諸件ニ注意スヘシ

一 手入

一般手入法ハ「ベークライト」ニ準スルモ特ニ泥土ノ附著セルモノ等ニ在リテモ成ルヘク水ヲ使用スルコトヲ避ケ已ムヲ得サレハ僅ニ含濕セル布片ヲ以テ之ヲ拭除スヘシ

二 取扱

雨雪等ノ爲濕潤セシメサルコトニ注意スルヲ要ス

三 格納

區分	要	領	摘	要
----	---	---	---	---

「ベークライト」製品

納格期長	一時格納ニ準スルノ外通風ノ良好ナル場所ヲ選定スルコト	注意
納格時	一 乾燥セル場所ニ格納スルコト 二 日光ノ直射ヲ受クルトキハ若干變形スルコトアルヲ以テ之ヲ避クルコト	一 「ファイバー」ハ溫度ノ交感ニ依ル變質ナク又微ヲ生スルコトナキヲ以テ格納良好ナルトキハ永年ノ貯藏ニ適ス 二 「ボンブ」ノ「パッキング」、齒車等ニ使用シアルモノハ硬性ニシテ吸濕性尠キヲ以テ格納上比較的願慮ヲ要セス

四 検査

著	破損、變歪、磨滅	眼	點	原	因
絶縁力低下				主トシテ取扱上ノ不注意 塵埃、濕氣等	

第十一章 雲母及マイカナイト製品

第八十九 雲母及「マイカナイト」ハ機械的抗力ニ乏シキヲ以テ其製品ノ保存上概ネ左ノ

諸件ニ注意スヘシ

一 手入

- 1 柔キ刷毛又ハ軟綿布ヲ以テ輕ク拭淨シ塵埃ヲ除去スルコト
- 2 汚垢及油類ノ附著セル場合ハ揮發油ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨スルコト
- 3 「マイカナイト」ハ膠著劑トシテ「セラツクワニス」ヲ使用シアルヲ以テ「アルコール」等ノ溶劑ヲ使用セサルコト
- 4 泥土ノ附著セル場合ハ含水布片ヲ以テ拭淨スルコト
- 5 雲母及「マイカナイト」製品ノ手入ニハ成ルヘク脂油類ノ使用ヲ避ケ其薄層間ニ此等カ侵入シ剝離スルヲ防止スルコト

二 取扱

- 1 雲母及「マイカナイト」ハ破損シ易キヲ以テ手入及取扱上特ニ注意ヲ要ス殊ニ雲ファイバー製品、雲母及「マイカナイト」製品

母ハ剝離、破損シ易シ

2 雲母ノ種類ニ依リ若干其程度異ナルモ鹽酸又ハ熱濃硫酸ニ溶解若ハ分解スルヲ以テ此等ヲ近ツケサルコト

3 「マイカナイト」ハ一〇〇度乃至一二〇度ニ達スレハ軟化スルヲ以テ取扱上注意ヲ要ス

三 格納

1 格納ニ方リテハ濕氣及高熱ヲ避ケ又損傷ヲ被ラサル如ク布若ハ軟紙ノ類ヲ以テ箱填ト爲スヘシ「マイカナイト」製品ニシテ可撓性ヲ有スルモノハ變形セサル如ク注意スヘシ

2 他ノ部品ト結合セラレアル場合ニハ前項ニ反セサル限り特ニ分解スルコトナク格納スルヲ可トス

四 検査

著	眼	點	原	因
龜裂、缺損			主トシテ取扱上ノ不注意	
絶縁力低下			塵埃、濕氣、龜裂	

第十二章 セルロイド製品

第九十 「セルロイド」製品ハ日光、溫度、大氣等ノ影響ヲ受ケテ變質シ其透明度ヲ失ヒ或ハ硬化シ龜裂ヲ生スルノミナラス引火シ易キヲ以テ之カ保存ニ關シテハ左ノ件ニ注意スヘシ

一 手入

- 1 塵埃ノ附著セルモノハ乾布又ハ刷毛ヲ以テ輕ク拂ヒ除去スルコト
- 2 泥土ノ附著セルモノハ含水布片ヲ以テ輕ク拭淨スルカ水洗後乾布ヲ以テ拭淨ス
- 3 污垢及油類附著セルモノハ少量ノ揮發油ヲ含有セル布片ヲ以テ拭淨スルコト但

「セルロイド」製品

「アルコール」類ハ之ヲ溶解スルノ虞アルヲ以テ使用セサルコト

二 取扱

1 燃燒シ易キヲ以テ絶対ニ火氣ヲ近ツケサルコト

2 擦痕ヲ生シ易キヲ以テ砂塵等ノ附著セル場合ハ先ツ此等ヲ除去シタル後輕ク拭
淨スルコト

3 高温ニ依リ柔軟トナリ變形變質スルヲ以テ注意ヲ要ス

三 格納

清涼ナル暗所ニ格納スヘシ

注意

1 不均等ナル壓迫又ハ屈折等ニ依リ原形ヲ變セサルコト及他物トノ接觸ニ依リ表面ヲ損傷
セシメサルコトニ注意スヘシ

2 多量ヲ密閉セル箱内等ニ入レ高温ノ場所ニ置クトキハ分解熱ノ爲發火スルコトナシトセ
サルヲ以テ注意スヘシ

四 検査

著眼點	原因	摘要
龜裂、缺損	取扱不良	
反張	使用間ニ於ケル日光ノ直射又ハ格納法不良	反張セルモノハ温湯ニ浸シテ微温ヲ加ヘタル後除水シテ平板上ニ輕ク壓迫スヘシ
擦痕	取扱不良	
變色、變質	一 取扱不良 二 自然衰損	

第十三章 陶磁器製品

第九十一 陶磁器製品ノ保存上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 入手

陶磁器製品

- 1 塵埃ノ附著セルモノハ布片ヲ以テ拭淨スルコト
- 2 泥土ノ附著セルモノハ含水布片ヲ以テ除去シタル後乾布ニテ拭淨スルコト
- 3 污垢及油類ノ附著セルモノハ揮發油等ノ溶劑ヲ以テ拭淨スルコト

二 取扱

- 1 破損シ易キヲ以テ取扱ヲ丁寧ニシ他物ニ擊突シ又墜落セサル如ク注意ス
- 2 絶縁物トシテ使用セルモノニ在リテハ微少ト雖龜裂又ハ瑕瑾（電擊ニ因リ發生スルコトアリ）ヲ生スルトキハ其絶縁力ヲ著シク減少シ或ハ漏電ノ原因トナルコトアルヲ以テ特ニ注意スルヲ要ス

三 格納

格納間各種ノ交感ヲ受クルコトナキヲ以テ主トシテ擊突顛倒等ニ依ル損傷ヲ防止スル處置ヲ講スヘシ

四 検査

著	眼	點	原	因
破損、磨滅			主トシテ取扱上ノ不注意	
絶縁力低下			塵埃、濕氣、瑕瑾等	

第十四章 炭素製品

第九十二 炭素製品ハ一般ニ脆弱ニシテ且吸濕性アルヲ以テ之カ保存上左ノ件ニ注意スヘシ

一 手入

- 1 炭素板及炭素粒等ノ手入ハ軟キ刷毛又ハ毛筆ニテ塵埃ヲ除去シ濕氣ヲ吸收セルモノハ文火ヲ以テ徐ニ乾燥スルコト
- 2 炭素棒、炭素刷子、炭素壺等ノ手入ハ刷毛又ハ布片ヲ以テ塵埃ヲ除去スルコト
- 3 一般ニ濕氣ヲ含有セルモノハ徐ニ乾燥セシメ日乾等ニ依ル急激ナル乾燥ヲ行

炭素製品

フヘカラス

一一三

二 取扱

1 毀損、變歪セシメサルコト

炭素板ノ如キ薄板ハ特ニ注意スルヲ要ス

2 濕氣ニ觸レシメサルコト

三 格納

1 「ガスカーボン」ハ成品ニ依リ特別ノ注意ヲ要スルモ一般ニ脆弱ナルヲ以テ外力

ニ依リ變形若ハ毀損セサル如ク格納スヘシ

2 非結晶性炭素殊ニ活性炭ハ「ガス」、色素、水分等ノ吸收性大ナルヲ以テ密閉完

全ナル容器ニ收容スヘシ

3 鐵材ニ直接觸接セシムルトキハ變質スルヲ以テ容器ニハ錫「メツキ」又ハ亞鉛

「メツキ」ヲ施スヲ要ス

四 検査

著眼點	原因	摘要
毀損又ハ變歪ノ有無 吸濕ノ有無	取扱上ノ不注意	蔭乾シ或ハ文火ヲ以テ乾燥スヘシ

第十五章 ガラス製品

第九十三 「ガラス」ニハ普通「ガラス」、光學「ガラス」、安全「ガラス」、硬質「ガラス」、有色「ガラス」等アルモ本章ニ於テハ保存上最モ重要ナル光學「ガラス」製品ニ就キ記述ス

其他ノ「ガラス」製品ハ光學「ガラス」製品ニ準シ適宜行フモノトス

第一節 手入

「ガラス」製品

一一三

第九十四 光學用「ガラス」製品ノ「ガラス」面ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

一二四

區分	要領	摘要
時期及場所	成ルヘク連晴乾燥ノ日ヲ選ヒ砂塵及濕氣ヲ受ケサル清潔ナル場所ニ於テ之ヲ行フヘシ	
材料用淨拭	清潔柔軟ニシテ乾燥セル毛筆又ハ刷毛及軟綿布(綿布ノ清洗シタルモノ)ヲ用フヘシ此等ハ純良ナル「アルコール」「エーテル」又ハ「ベンゾール」等ノ溶劑ヲ以テ洗滌乾燥シ脂油及塵埃等ノ附著ヲ避ケ且他ノ用途ニ充ツヘカラス	絹布「フランネル」類、紙、皮革等ハ「ガラス」面ヲ搔傷腐蝕セシムルヲ以テ之ヲ代用スヘカラス
實日	拭淨ニ方リテハ毛筆又ハ刷毛ヲ以テ表面ニ附著セル塵埃ヲ輕ク拂ヒ落シタル後軟綿布ヲ以テ表面ヲ拭ヒ已ムヲ得サレハ軟綿布ノ一部ニ少量ノ溶劑(「アルコール」「エーテル」又ハ「ベンゾール」)ヲ浸シテ面ニ塗り其蒸散スルニ先タチ該布ノ乾燥セル部分ヲ以テ輕ク拭ヒ數回反復シテ「ガラス」面ヲ清潔ナラシムヘシ	「ガラス」面ハ容易ニ搔痕ヲ生スルヲ以テ拭淨ニ方リ特ニ注意スヘシ

施	使用中及後ノ手入
一 「ガラス」面ニ泥土附著セル場合ニハ毛筆又ハ刷毛ニ少量ノ清水ヲ浸シ丁寧ニ洗滌シタル後要スレハ溶劑ヲ以テ拭淨シ乾燥セル軟綿布ヲ以テ清拭スヘシ	
二 前項ノ手入ヲ行フ餘裕ナキトキハ濕リタル軟綿布ヲ以テ表面ヲ強ク摩擦スルコトナク又使用セル部分ヲ再用セサルコトニ注意シテ泥土ヲ拭ヒ去リ使用ニ差支ナキ程度ニ至ラシメ後時期ヲ得ハ直ニ前項ノ手入ヲ行フヘシ	
三 「ガラス」面ヲ濕潤セシメタルトキハ軟綿布ニテ拭淨ノ後乾燥セシムヘシ	

第二節 取扱

第九十五 「ガラス」製品取扱上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

一 「ガラス」面ハ常ニ乾燥シアルコト

雨露若クハ濕氣ト永ク觸接スルトキハ其表面ニ灰白色ノ曇ヲ生スルヲ以テ直ニ之ヲ拭淨シタル後手入ヲ實施スヘシ特ニ海岸ニ於テハ此注意ヲ必要トス

「ガラス」製品

一二五

二 「ガラス」面ニハ脂類、糊類又ハ蠟類ヲ附着セシメサルコト

此等ヲ附着スルトキハ透明ヲ害シ或ハ面ヲ侵蝕スルコトアルヲ以テ溶劑ニ依リ丁寧ニ除去スルヲ要ス

三 「ガラス」面ニハ塵埃ヲ附着セシメサルコト

塵埃附着ノ儘永ク之ヲ放置スルトキハ「ガラス」面ニ發黴セシムルニ至ルヲ以テ常ニ「ガラス」面ハ清潔ナラシムルヲ要ス

四 「ガラス」面ニハ指頭ヲ觸レサルコト

指ヲ觸レ其儘之ヲ放置スルトキハ指ノ痕跡ハ漸次曇ヲ生スルニ至ルヲ以テ溶劑ニヨリ拭淨スヘシ

五 「ガラス」ハ其質脆弱ナルヲ以テ衝突又ハ墜落セサルコト

第三節 格納

第九十六 「ガラス」製品ノ格納場所ハ直射セサル光線ノ豊富ニシテ乾燥シアルヲ必要ト

ス

普通「ガラス」ハ格納上大ナル顧慮ヲ要セサレトモ光學「ガラス」製品ハ濕氣及黴等ニ依ル被害ニ對シ深甚ノ注意ヲ要ス

第九十七 格納要領ハ左記ニ依リ實施スルモノトス

一 一時格納

乾燥セル場所ヲ選ヒ爲シ得レハ密閉格納スヘシ

二 長期格納

1 乾燥セル時期ヲ選ヒ兵器ノ大小、員數ノ多寡等ニ依リ「ガラス」瓶、密閉箱又ハ乾燥装置ヲ有スル密閉室ニ密閉格納スヘシ

2 密閉格納ヲ實施シ得サル場合ニハ格納室ノ乾燥ニ勉メ且屢、點檢ヲ實施スヘシ

三 密閉格納實施ノ要領

「ガラス」製品

- 1 「ガラス」瓶ニハ貯藏品ト共ニ乾燥劑及鹽化「コバルト」試験紙ヲ入レ蓋ハ密閉蠟又ハ軟性防濕劑ニ依リ密閉ス
- 2 密閉箱ハ氣密良好ニシテ採光ニ適スルモノトシ其格納法ハ前項ニ準ス
- 3 密閉後ハ常ニ内部ノ濕度ニ注意シ貯藏品ヲ點檢シテ被害ノ豫防ニ勉ムヘシ
- 4 濕氣多キ季節及雨天ノ際ニハ已ムヲ得サル場合ノ外格納室ヲ開カサルヲ可トス

第四節 検査

第九十八 「ガラス」製品ノ検査ハ眼鏡類ノ保存法ニ依ルヘシ

第十六章 夜光塗料塗布品

第九十九 夜光塗料ハ他ノ塗料ニ比シ抗力小ナルヲ以テ保存上左ノ諸件ニ注意スヘシ

- 一 手入及取扱

- 1 努メテ素手ヲ觸レサル如ク注意スルコト
- 2 塵埃ノ附著セルモノハ面ヲ疵ツケサル如ク軟キ刷毛ヲ以テ除去シ溶劑、油類ヲ使用セサルコト
- 3 水ニ浸リタルトキハ吸取紙等ニテ速ニ水分ヲ除去スルヲ可トシ高熱ヲ以テ乾燥セサルコト
- 4 直射日光、水銀燈等ヲ以テ刺戟ヲ與ヘサルコト

二 格納

- 1 乾燥セル低温ノ場所ニ格納スルコト
- 2 塵埃ノ附著セサル如ク覆ヲ施スコト

三 検査

著	眼	點	原	因	摘	要
發光度減退			一 永年經過			

夜光塗料塗布品

剝離

二 取扱上ノ注意不充分

剝離ノ徵候ヲ認メタルトキハ塗替スルヲ可トス

一三〇

第十七章 電池類

第一節 手入

第百 電池類ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區分	要領	摘要
池電乾	一 乾布ヲ以テ外部ヲ拭淨スルノ外特ニ氣孔ノ閉塞セルモノハ針ノ類ヲ以テ開シ 二 接續金物ノ發錆セルモノハ拭除スヘシ	一 氣孔ノ排氣不良ナルトキハ膨脹スル虞アリ 二 鉛蓄電池ニ就キ例示セリ以下同シ 三 電解液ノ比重規正ヲ行フ必要アルトキハ充電終期ニ於テ爲スヲ可トス 四 極板ノ分解手入ニ方リ注意スヘキ事項左ノ如シ 一 充電状態ノ陰極板ハ空氣ニ觸レテ酸化發熱シ故障ヲ生シ易キコト 二 之カ爲準備放電ヲ行ヒ硫酸鉛ノ膜ヲ極面ニ作ラシム 三 極板ハ絕對ニ乾燥セシメサルコト 四 之結晶硫酸鉛ヲ生シ又陰極板ハ酸化スルヲ以テ有害ナレハナリ 五 洗濯手入ニ方リテハ不純ナル水又ハ鐵製品其他溶解性ノ金物ヲ用ヒサルコト 六 極板ノ彎曲セルモノト雖モ槌等ヲ以テ打擊セサルコト 七 必要アル時ハ均シ板(極板ヨリモ面積大ニシテ平坦ナル木板二枚)ノ間ニ挿入シ徐ニ壓力ヲ加ヘテ修正スルヲ可トス
池電濕	一 乾布ヲ以テ外部ノ塵埃ヲ拭淨シ要ス 二 各接續金物ハ塵埃、酸化物ヲ除去シ 三 端子ノ正負記號ヲ明瞭ナラシムヘシ 四 腐蝕ヲ防止スル爲接續部ノ導通ヲ害セサル如ク「ワセリン」又ハ「グリース」ヲ塗布スヘシ 五 電解液減少セルトキハ極板上縁約二〇電解液ヲ稀硫酸ヲ補充スヘシ 六 水質ニ注意シテ純水ヲ用フヘシ 七 電解液ニ汚染物ヲ付着スルコトハ極大ニ避ケルコトヲ要ス 八 電解液ニ異常ニ閉鎖シテ汚染物ヲ積ルコトハ極大ニ避ケルコトヲ要ス 九 電極ノ堆積物ヲ除去スルコトヲ要ス 一〇 電解液ノ濃度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一一 電解液ノ温度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一二 電解液ノ酸度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一三 電解液ノ比重ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一四 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一五 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一六 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一七 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一八 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一九 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二〇 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二一 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二二 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二三 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二四 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二五 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二六 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二七 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二八 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二九 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 三十 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス	一 鉛蓄電池ニ就キ例示セリ以下同シ 二 電解液ノ比重規正ヲ行フ必要アルトキハ充電終期ニ於テ爲スヲ可トス 三 極板ノ分解手入ニ方リ注意スヘキ事項左ノ如シ 一 充電状態ノ陰極板ハ空氣ニ觸レテ酸化發熱シ故障ヲ生シ易キコト 二 之カ爲準備放電ヲ行ヒ硫酸鉛ノ膜ヲ極面ニ作ラシム 三 極板ハ絕對ニ乾燥セシメサルコト 四 之結晶硫酸鉛ヲ生シ又陰極板ハ酸化スルヲ以テ有害ナレハナリ 五 洗濯手入ニ方リテハ不純ナル水又ハ鐵製品其他溶解性ノ金物ヲ用ヒサルコト 六 極板ノ彎曲セルモノト雖モ槌等ヲ以テ打擊セサルコト 七 必要アル時ハ均シ板(極板ヨリモ面積大ニシテ平坦ナル木板二枚)ノ間ニ挿入シ徐ニ壓力ヲ加ヘテ修正スルヲ可トス

區分	要領	摘要
池電乾	一 乾布ヲ以テ外部ノ塵埃ヲ拭淨シ要ス 二 各接續金物ハ塵埃、酸化物ヲ除去シ 三 端子ノ正負記號ヲ明瞭ナラシムヘシ 四 腐蝕ヲ防止スル爲接續部ノ導通ヲ害セサル如ク「ワセリン」又ハ「グリース」ヲ塗布スヘシ 五 電解液減少セルトキハ極板上縁約二〇電解液ヲ稀硫酸ヲ補充スヘシ 六 水質ニ注意シテ純水ヲ用フヘシ 七 電解液ニ汚染物ヲ付着スルコトハ極大ニ避ケルコトヲ要ス 八 電解液ニ異常ニ閉鎖シテ汚染物ヲ積ルコトハ極大ニ避ケルコトヲ要ス 九 電極ノ堆積物ヲ除去スルコトヲ要ス 一〇 電解液ノ濃度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一一 電解液ノ温度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一二 電解液ノ酸度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一三 電解液ノ比重ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一四 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一五 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一六 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一七 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一八 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一九 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二〇 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二一 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二二 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二三 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二四 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二五 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二六 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二七 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二八 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二九 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 三十 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス	一 鉛蓄電池ニ就キ例示セリ以下同シ 二 電解液ノ比重規正ヲ行フ必要アルトキハ充電終期ニ於テ爲スヲ可トス 三 極板ノ分解手入ニ方リ注意スヘキ事項左ノ如シ 一 充電状態ノ陰極板ハ空氣ニ觸レテ酸化發熱シ故障ヲ生シ易キコト 二 之カ爲準備放電ヲ行ヒ硫酸鉛ノ膜ヲ極面ニ作ラシム 三 極板ハ絕對ニ乾燥セシメサルコト 四 之結晶硫酸鉛ヲ生シ又陰極板ハ酸化スルヲ以テ有害ナレハナリ 五 洗濯手入ニ方リテハ不純ナル水又ハ鐵製品其他溶解性ノ金物ヲ用ヒサルコト 六 極板ノ彎曲セルモノト雖モ槌等ヲ以テ打擊セサルコト 七 必要アル時ハ均シ板(極板ヨリモ面積大ニシテ平坦ナル木板二枚)ノ間ニ挿入シ徐ニ壓力ヲ加ヘテ修正スルヲ可トス
池電濕	一 乾布ヲ以テ外部ノ塵埃ヲ拭淨シ要ス 二 各接續金物ハ塵埃、酸化物ヲ除去シ 三 端子ノ正負記號ヲ明瞭ナラシムヘシ 四 腐蝕ヲ防止スル爲接續部ノ導通ヲ害セサル如ク「ワセリン」又ハ「グリース」ヲ塗布スヘシ 五 電解液減少セルトキハ極板上縁約二〇電解液ヲ稀硫酸ヲ補充スヘシ 六 水質ニ注意シテ純水ヲ用フヘシ 七 電解液ニ汚染物ヲ付着スルコトハ極大ニ避ケルコトヲ要ス 八 電解液ニ異常ニ閉鎖シテ汚染物ヲ積ルコトハ極大ニ避ケルコトヲ要ス 九 電極ノ堆積物ヲ除去スルコトヲ要ス 一〇 電解液ノ濃度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一一 電解液ノ温度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一二 電解液ノ酸度ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一三 電解液ノ比重ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一四 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一五 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一六 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一七 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一八 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 一九 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二〇 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二一 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二二 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二三 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二四 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二五 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二六 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二七 電解液ノ電阻率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二八 電解液ノ電容率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 二九 電解液ノ電感率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス 三十 電解液ノ電導率ヲ測定シテ必要ナル時ニ調整スルコトヲ要ス	一 鉛蓄電池ニ就キ例示セリ以下同シ 二 電解液ノ比重規正ヲ行フ必要アルトキハ充電終期ニ於テ爲スヲ可トス 三 極板ノ分解手入ニ方リ注意スヘキ事項左ノ如シ 一 充電状態ノ陰極板ハ空氣ニ觸レテ酸化發熱シ故障ヲ生シ易キコト 二 之カ爲準備放電ヲ行ヒ硫酸鉛ノ膜ヲ極面ニ作ラシム 三 極板ハ絕對ニ乾燥セシメサルコト 四 之結晶硫酸鉛ヲ生シ又陰極板ハ酸化スルヲ以テ有害ナレハナリ 五 洗濯手入ニ方リテハ不純ナル水又ハ鐵製品其他溶解性ノ金物ヲ用ヒサルコト 六 極板ノ彎曲セルモノト雖モ槌等ヲ以テ打擊セサルコト 七 必要アル時ハ均シ板(極板ヨリモ面積大ニシテ平坦ナル木板二枚)ノ間ニ挿入シ徐ニ壓力ヲ加ヘテ修正スルヲ可トス

電池類

一三一

蓄電池
<p>極板ハ水槽ノ水ヲ度々取換ヘ洗滌ス 又白色硫酸鉛ノ附着セルトキハ軟毛 刷ヲ用ヒ水中ニ於テ成ルヘク附著 部分ノミ剝除セシム 電槽ノ隔離板等ハ清水ヲ用ヒ刷毛ニ テ洗滌ス 3 移動用電池ニ在リテハ概ネ六箇月 ニ一回注液ヨリ電液ヲ別器ニ移 シ數回内部ニ蒸溜水ヲ注入シ振盪シ テ沈澱物ヲ除去ス 4 電液ハ沈澱セシメ上澄液ヲ「ゴ ム」管ニテ「サイフォン」トシテ電槽 ニ注入スルカ又ハ適宜鉛製ノ網ヲ以 テ濾過シテ再用ス 5 電池ノ充電ヲ行ヒタル後電液ノ 比重ヲ適當ニ規正ス</p>
<p>4 移動用電池ニシテ電槽ヲ「ビツチ」 ヲ以テ密閉シタルモノニ在リテハ分 解作業困難ナルノミナラス極板ヲ破 損スル虞アルヲ以テ特ニ分解ヲ必要 トスルトキ左ノ點ニ注意シテ行フヘ シ 1 「ハンダ」鍍或ハ「ガス」ノ垢等ヲ以 テ端子接續金物ノ鉛ヲ溶カシ分離ス 2 蒸氣ヲ用ヒテ「ビツチ」ヲ熱シ軟カ クナリタルトキ削瓦、小刀等ヲ以テ 切り込ミ分解押出ス 3 結合後ハ適度ニ溶解セル「ビツチ」 ヲ流シ込ミ熱シタル鍍或ハ「ガス」ノ垢 等ヲ以テ填塞ス</p>

第二節 取扱

第百一 電池類ノ取扱ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス
尙細部ニ關シテハ各電池ノ説明書ニ依ルヲ可トス

乾電池	區分	要領	摘要
池電乾	要	<p>一 乾電池ハ其製造年月ノ新シキモノヲ 購入シ直ニ使用スルヲ可トス 二 新品ト雖長時間接續使用スルトキハ 一時其電壓降下スルモノニシテ暫時休 止セシムルコトニ依リ再ヒ恢復スルニ 至ルヘシ 三 使用セサルトキハ器材ヨリ分離シ置 クヲ可トス 之電池ノ放電ヲ防止シ又發生「ガス」等ニ 依リ器材ヲ損傷セシメサル爲ナリ 四 極寒地ニ於テハ容量減少スルヲ以テ 使用ニ際シ保温装置ヲ講スヘシ 一般ニ零下二〇度以下ニ至ルトキハ放 電電壓急激ニ降下シ其儘ニ於テハ使用 ニ耐エサルニ至ル</p>	<p>電池ハ使用セスシテ放置スルトキハ自 己放電ヲ爲シ自然ニ其容量ヲ消耗スル ニ至ルモノナリ</p>

電池類

蓄	電池	濕
<p>一 放電ノ要領左ノ如シ 放電電流ハ八—一〇時間率電流ヲ標準トス然レトモ電池ノ型式種類ヲ考慮シ左記ノ範圍内ニ於テ適宜ノ電流ヲ通シ使用スルコトヲ得 通常一時間率電流ヨリ大ナル電流ヲ以テ放電スルトキハ陽極板ヲ彎曲セシメ又作用物質ノ脱落ヲ促進セシム 短時間ナルトキハ前記ノ二—三倍ノ電流ヲ通スルモ可ナリ</p>	<p>一 電液ハ各規定ノ要領ニ依リ調製スヘシ 二 組立ヲ行フニハ基板ヲ豫メ清水ニテ潤シ其乾燥セサル間ニ電液中ニ挿入シタル後電液ノ漏出セサル様確實ニ緊定スヘシ 三 新ニ組立タルトキハ暫時ノ後電壓ヲ測定シ短絡セシメサル如ク注意シテ放電使用スルモノトス</p>	<p>一 濕電池ハ一般ニ「ガス」ヲ發生スルヲ以テ空氣ノ流通良キ場所ニ於テ使用スル如クスヘシ 二 電液ハ有毒ニシテ腐蝕ヲ伴フモノ多キヲ以テ取扱ニ注意スヘシ</p>
<p>一 電池ハ電流ノ大小ニヨリ放電ヲ持續シ得ル時間ニ長短ヲ生スルモノナリ 今十時間持續シ得ル如キ電流ヲ以テ放電ヲ實施セリトセハ其放電ヲ十時間率放電、其電流ヲ十時間率電流又其放電率ハ十時間率ナリト云フ 二 電池ノ溫度上昇スルトキハ電解液ノ循環良好ニシテ且作用物質ハ活潑トナリ從テ容量ヲ若干増加ス然レト</p>		

電池	電
用	使
<p>二 電池一箇ノ電壓ハ二「ヴォルト」ト概算シ使用ス然レトモ其ノ使用間ニ於ケル端子電壓ハ左記ノ如キ變化アリ 1 最初ノ開路電壓(全起電力)ハ概ネ二、四「ヴォルト」ナリ 2 使用ノ爲電流ヲ通シタルトキニ於ケル閉回路電壓ノ變化ハ數分間ニシテ急激ニ放電開始電壓(約二・〇「ヴォルト」)ニ降下シ爾後ハ徐々ニ一・九「ヴォルト」附近マテ降下シ現有容量ニ近キ放電力行ハレタル後再び急激ニ降下シ放電終止電壓(一・八「ヴォルト」附近)ニ至ル 3 放電々流大ナル程電壓降下ハ一層急激ナリ又中途ニ於テ放電ヲ停止シタル場合ハ電壓ハ若干恢復スルモノナリ 三 使用中ニ於ケル容量ノ放電程度ハ主トシテ電解液ノ比重降下ノ割合及閉回</p>	<p>モ溫度低下スルトキハ電解液ノ循環不良トナリ内部抵抗増大スル爲開路電壓降下シ容量次第ニ減少スルモノナリ而シテ溫度ニ關シ注意スヘキ事項左ノ如シ 1 電池ノ内部溫度ハ常ニ四〇度以上ニ至ラシメサルコト 溫度過度ニ高キトキハ極板ヲ彎曲シ白色硫酸鉛ヲ生成スル等有害ナリ 2 過大ナル電流ヲ通スルトキハ溫度急激ニ上昇スルコト 3 移動用ノ密閉式ニ在リテハ構造上溫度上昇シ易キコト 4 極寒地ニ於テハ電解液ノ凍結ヲ防止スル爲保温裝置ヲ講シ且使用後ハ直ニ充電ヲ爲シ置クコト 5 休止時ニ於テモ電池ハ常ニ自己放電ヲ爲シツツアリテ溫度高キ程大ナルコト 二 放電狀態推定ニ關スル注意左ノ如</p>

電池類

蓄電 用使

路ノ端子電壓降下ニ依リ推定ス而シテ其比重降下ノ狀況左記ノ如シ

- 1 放電開始時ノ比重ハ一・三〇〇
一・二〇〇ニシテ其ノ後ハ放電ニ比例シテ降下ス
- 2 放電終止時ノ比重ハ一・一六〇
一・二二〇ナリ
- 4 放電ヲ終止スヘキ時機ハ主トシテ放電終止電壓及電解液ノ比重ニ依ルモノニシテ左記ノ諸點ヲ考慮シ決定スヘシ
- 1 放電開始電壓ノ約九〇%ヲ可トス
- 2 電解液ノ比重一・一六〇—一・二〇ノトキヲ可トス
- 3 放電々流ニヨリ異ニス
- 4 型式ニヨリ異ニス
- 五、電池ハ保存上數箇月ニ一回一〇—二〇

- 1 開回路ニ於テハ電池ノ放電狀態ニ係ラス端子電壓ハ大差ナキヲ以テ電池ノ放電程度ヲ知ル手段トナス故ニ開回路ニ於テ放電狀態ヲ知ルニハ比重ニ依ルヲ可トス
- 2 放電終止電壓ハ閉回路ニ於ケル電壓ナルコト
- 4 規定容量以上ノ放電ヲ爲シ或ハ放電シ盡シタル狀態ニテ一晝夜以上放置スルコトハ共ニ電池保存上有害ナリ特ニ極寒地ニ於テハ充電不能ニ陥ルヲ以テ早期ノ充電ヲ勵行スルコト
- 5 日光ノ直射ヲ避ケ又防塵ニ注意スルコト
- 六 比重及電壓ノ測定要領ニ關シテハ第四節檢査ヲ參照スヘシ

池電 充通普

普通充電ノ要領概ネ左ノ如シ

- 1 端子ノ接續法ハ蓄電池ノ陽極ニ充電電源ノ陽極ヲ接續スヘシ
尙充電中ノ測定電壓カ最初ヨリ降下スルカ如キコトアラハ接續誤リナルヲ以テ直ニ訂正スヘシ
- 2 電源電壓ハ電池ノ數ニヨリ決定シ且充電ニ依ル電壓變化ニ應シ調整シ得ルヲ要ス
- 3 充電電流ハ概ネ一〇時間率電流ヲ以テ行フヘシ
- 4 充電中ハ電壓及電解液ノ比重ヲ三分毎ニ計測シ概ネ二回以上同一ナル終

○時間放電率ヲ以テ完全ニ放電ヲ行ヒ過剩充電ヲ爲スヘシ
常續的ニ過少ナル電流ヲ以テ放電スルカ又ハ十分放電ヲ行ハス不規則ニ充電ヲ爲スモノニ對シ極板ノ作用物質ヲ活潑ナラシメ且硫酸化ヲ防止スル目的ヲ以テ行フモノナリ

- 1 普通充電ハ左記ノ場合ニ於テ行フヘシ
- 1 容量ノ五〇%以上放電シタルモノハ概ネ一日以内
- 2 誤テ放電終止電壓以下ニ降下セシメタルモノハ直ニ
- 3 電解液ノ凍結スル虞アル場合ハ直ニ
- 二 充電ノ過度及不足ハ共ニ電池ノ保存上有害ナルヲ以テ注意スヘシ
- 三 充電終止電壓ハ電池ノ種類及充電時ノ電流比重及溫度ニ關係シ又電池ノ衰損ニ從ヒ電壓ノ上昇困難トナルモノナリ

電池類

蓄電	
普通	充通
<p>止電壓及比重ノ値ヲ得タル時ニ於テ充電ヲ完了ス而シテ其充電中ノ經過及完了時ノ状態ヲ列擧セハ左記ノ如シ</p> <p>1 充電時ノ端子電壓ハ二・四ヴォルト附近マテハ徐ニ上昇シ其後ハ陽極ヨリ酸素ヲ陰極ヨリ水素ヲ發生シツツ急激ニ上昇シ充電終止電壓(二・五—二・八)ヴォルトニ達シ略一定スルニ至リテ充電ヲ終ルヘシ</p> <p>2 電解液ノ比重ハ充電開始ト共ニ概ネ比例用ニ上昇シ一・二〇〇—一・三〇〇ニ達シ不變状態ニ至リテ充電ヲ終ルヘシ</p> <p>3 兩極ヨリ發生スル「ガス」氣泡ハ初メ微細ノ氣泡ニシテ遂ニ大ナル氣泡ヲ混シ速ニ多數ヲ發生シ白濁ヲ呈スルニ至リテ充電ヲ終ルヘシ</p> <p>4 極板ノ色調ハ陰極板ハ灰色ニ陽極板ハ暗褐色(チヨコレート色)ヲ呈ス</p>	<p>四 電解液ノ比重ハ電池ノ種類及溫度ニ依リ若干異ニスルモノナリ</p> <p>1 一般ニ自動車用等ノ如ク小型ニシテ振動或ハ急激ナル放電ヲ爲スモノニ在リテハ比較的電壓及比重高キヲ普通トス</p> <p>2 一般ニ通信用等ノ如ク大型且液量豐富ニシテ緩ナル放電ヲ爲スモノニ在リテハ比重及電壓低キヲ普通トス</p> <p>五 比重ヲ規正スルニ用フル電解液ノ調製ハ最初充電ノ項ヲ参照スヘシ</p>

電池	
最初充電	電充
<p>最初充電ノ要領概ネ左ノ如シ</p> <p>一 電解液ノ製法ハ先ツ清淨ナル混合容器(「ガラス」製、磁器製、鉛張木槽)ニ蒸溜水ヲ入レ清潔ナル「ガラス」棒又ハ木棒ヲ以テ攪拌シツツ之ニ硫酸ヲ徐ニ注加シ比重概ネ一・二〇〇—一・三〇〇(濃硫酸一容、蒸溜水三—四容ノ程度)ニ達スルニ至リテ止ムヘシ</p>	<p>ルニ至リテ充電ヲ終ルヘシ</p> <p>但色調ハ極板ノ種類ニ依リ若干差異アリ</p> <p>五 右充電終期ニ於テ電解液ヲ其ノ電池ノ規定比重ニ規正スヘシ</p> <p>但比重低下シアルトキニ於テモ先ツ充電ノ不足又電極ノ硫酸化ニ就キ點檢ノ上處置シ不用意ニ稀硫酸ヲ補充スルカ如キコトアルヘカラス</p>
<p>一 電解液ハ純良ナル硫酸ト蒸溜水ヲ混和シタル無色透明ノ稀硫酸ニシテ鐵、硝酸、鹽酸、「アンモニア」、「砒素」等ノ不純物ヲ殆ント含有セサルモノタルヘシ</p> <p>二 電解液ノ調製ニ方リ硫酸ニ水ヲ注加スルトキハ發熱沸騰シテ危險ナルヲ以テ注意スヘシ</p> <p>三 最初充電ハ左記ノ場合ニ於テ行フ</p>	

池	
電 充 剩 過	電
<p>過剩充電ノ要領左ノ如シ</p> <p>一 普通充電ヲ延長シ二〇時間率電流程度ノ小電流ヲ以テ充電ヲ行フ此間電壓及比重ヲ三〇分毎ニ測定シ概ネ二時間其ノ上昇ヲ示ササルニ至リテ終了スヘシ</p> <p>二 一層完全ニ充電スル爲其後約一時間停止シ更ニ充電ヲ反復スルコトアリ</p> <p>三 其他ハ普通充電ノ要領ニ同シ</p>	<p>ヲ待ツヘシ</p> <p>五 充電ノ完了ニ方リテハ電壓及比重ハ概ネ規定ニ達シ極板ヨリ盛ニ「ガス」發生スル状態ニ於テ約一時間充電ヲ休止シ更ニ一時間充電ス之ヲ數回反復實施スヘシ</p> <p>六 其他ハ普通充電ノ要領ニ同シ</p>
<p>一 過剩充電ハ左記ノ場合ニ於テ行フヘシ</p> <p>1 放電後已ムヲ得ス放置シタル場合</p> <p>2 誤テ規定容量以上ノ放電ヲ爲シタル場合</p> <p>3 短絡電流ヲ生シタル場合</p> <p>4 此場合ハ故障ノ原因ヲ除去シタル後極板面ニ白色硫酸鉛ヲ生成セル場合</p> <p>5 過剩充電ノ起ルテテ行フモノニシテ其復キ或ハ故障ヲ起シタル電池ヲ其</p>	<p>一 過剩充電ハ左記ノ場合ニ於テ行フヘシ</p> <p>1 放電後已ムヲ得ス放置シタル場合</p> <p>2 誤テ規定容量以上ノ放電ヲ爲シタル場合</p> <p>3 短絡電流ヲ生シタル場合</p> <p>4 此場合ハ故障ノ原因ヲ除去シタル後極板面ニ白色硫酸鉛ヲ生成セル場合</p> <p>5 過剩充電ノ起ルテテ行フモノニシテ其復キ或ハ故障ヲ起シタル電池ヲ其</p>

電池類

電 蓄	
充 初 最	
<p>四 充電中ハ絶對ニ電流ヲ停止セシムヘカラス又電解液ノ溫度四〇度ヲ超過シタルトキハ充電電流ヲ減シ溫度ノ低下</p>	<p>電解液ハ混合後常溫ニ冷却セル後使用スヘシ</p> <p>二 組立ハ陽極板ト陰極板トヲ交互ニ且相互接觸セサル如ク隔離板ヲ裝シ各規定ニ依リ確實ニ結合スヘシ</p> <p>電解液ハ極板上約二〇耗又ハ隔離板ヲ浸ス高サマテ注入シ極板カ十分稀硫酸ヲ吸收スルニ至ルマテ時々補充ス</p> <p>三 電解液ノ注入終ラハ各電池ニ就キ其極性ヲ檢シ接續配列等ニ誤リナキトキハ直ニ充電ヲ開始スヘシ充電電流ハ概ネ一〇時間率電流ヲ以テシ通常四〇—八〇時間連續充電ヲ實施スヘシ</p> <p>注液ニ當リ極板ノ含有セル水分ノ爲甚シク溫度上昇シ四〇度以上ニ至ルコトアリ此場合冷却法ヲ講シ溫度ノ下降ヲ待チ充實スヘシ</p>
<p>五 充電開始ト同時ニ各電池若ハ特ニ指定シタル表示電池ニ就キ電壓、電解液ノ比重溫度及室内溫度ヲ測定シ記錄スルヲ可トス</p> <p>測定ハ充電開始直後一、二時間ハ約五分毎ニ其後ハ十五分乃至三十分毎ニ中間ハ一時間毎ニ充電終期ハ再度細密ニ測定ス</p>	<p>一 新ニ電池ヲ組立テ使用スル場合</p> <p>2 乾燥格納ヲナシタル電池ヲ再用セントスル場合</p> <p>3 事故又ハ運搬ノ爲極板ヲ乾燥セシメタル場合</p> <p>四 最初充電ノ不完全ナル場合ハ蓄電池ノ容量及耐久力ヲ減少スルカ故ニ最慎重ナル注意ヲ以テ行フヘシ</p>

性質上屢行フヘキモノニ非ス然ラサレハ却テ電池ニ害ヲ與フルモノナリ

- 一 事故又ハ故障ノ爲極板ヲ乾燥セシメタルトキハ最初充電ニ準シ充電シタル後使用スルヲ可トス
- 二 使用中ノ電解液ヲ共ニ運搬シタル場合ハ其電池固有ノ電解液ヲ使用スルヲ可トス
- 三 電解液容器ハ鉛張り木製箱ヲ使用シ「ハンダ」鑲著又ハ鉛著等ニテ密封スルヲ可トス破損ノ虞ナキトキハ「ガラス」鑲又ハ磁器製器物ヲ使用シ外部ヲ藥類ヲ以テ梱包ス

著 電 池	
搬	運
<p>運搬上注意スヘキ事項左ノ如シ</p> <p>一 短距離ノ場合 電池ハ使用ノ儘トシ振動ノ爲電解液ノ漏洩又ハ電極ノ破損スルコトナキ如ク蓋板(螺)ヲ密閉シ坐褥ヲ装スル等ノ處置ヲ講シ又凍結ニ對スル保温ニ注意シテ運搬スヘシ</p> <p>二 遠距離ニシテ長時日ヲ要シ或ハ構造上極板ノ破損スル虞アル場合 1 電池ヲ充電シ準備放電ヲ行ヒタル後電解液ハ別器ニ密閉梱包シ又極板ハ水洗後破損及乾燥セシメサル如ク適宜電槽中ニ包装シテ運搬スヘシ到着後ハ直ニ之ヲ組立テ過剩充電ヲ行フヘシ</p> <p>2 極板ヲ乾燥状態トナシ格納スル場合ノ要領ニ依リ手入シ電解液ト電槽ヲ區別シ適宜梱包シテ運搬スヘシ到着後ノ充電ハ格納ノ場合ニ同シ</p>	<p>一 格納場所ハ冷涼ナル位置ヲ選ビ日光ノ直射ヲ避クヘシ</p> <p>二 電池ヲ多數格納スル場合ハ適當ノ間隔ヲ存セシメ且新品ヲ區別排列スヘシ</p> <p>三 液ノ湧出シタル電池ハ別ニ一纏トナシ置クヘシ</p>

第三節 格納

第二百二 電池類ノ格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

區 分		要 領	摘 要
池 電 濕	池 電 乾	<p>一 格納場所ハ冷涼ナル位置ヲ選ビ日光ノ直射ヲ避クヘシ</p> <p>二 電池ヲ多數格納スル場合ハ適當ノ間隔ヲ存セシメ且新品ヲ區別排列スヘシ</p> <p>三 液ノ湧出シタル電池ハ別ニ一纏トナシ置クヘシ</p>	<p>一 乾電池ハ一年以上使用セサルトキハ其性能ヲ低下スルヲ以テ長期格納セサルヲ旨トス</p> <p>二 各電池ニハ購入年月日及測定セル電壓及其年月日ヲ標示スルモノトス</p>
池 電 濕		<p>一 電瓶内ノ電液ハ之ヲ除キ清水ヲ以テ洗滌シ基板等ヲ乾燥スヘシ</p> <p>二 蓋、接續金物等ハ一組トシ電瓶ト共ニ箱内ニ格納スヘシ</p> <p>又電槽ノ木製外箱及箱覆等ハ別ニ格納</p>	<p>組立タル儘ノ格納品ニ在リテハ電瓶ノ電壓、格納月日等ヲ標示シ置クモノトス</p>

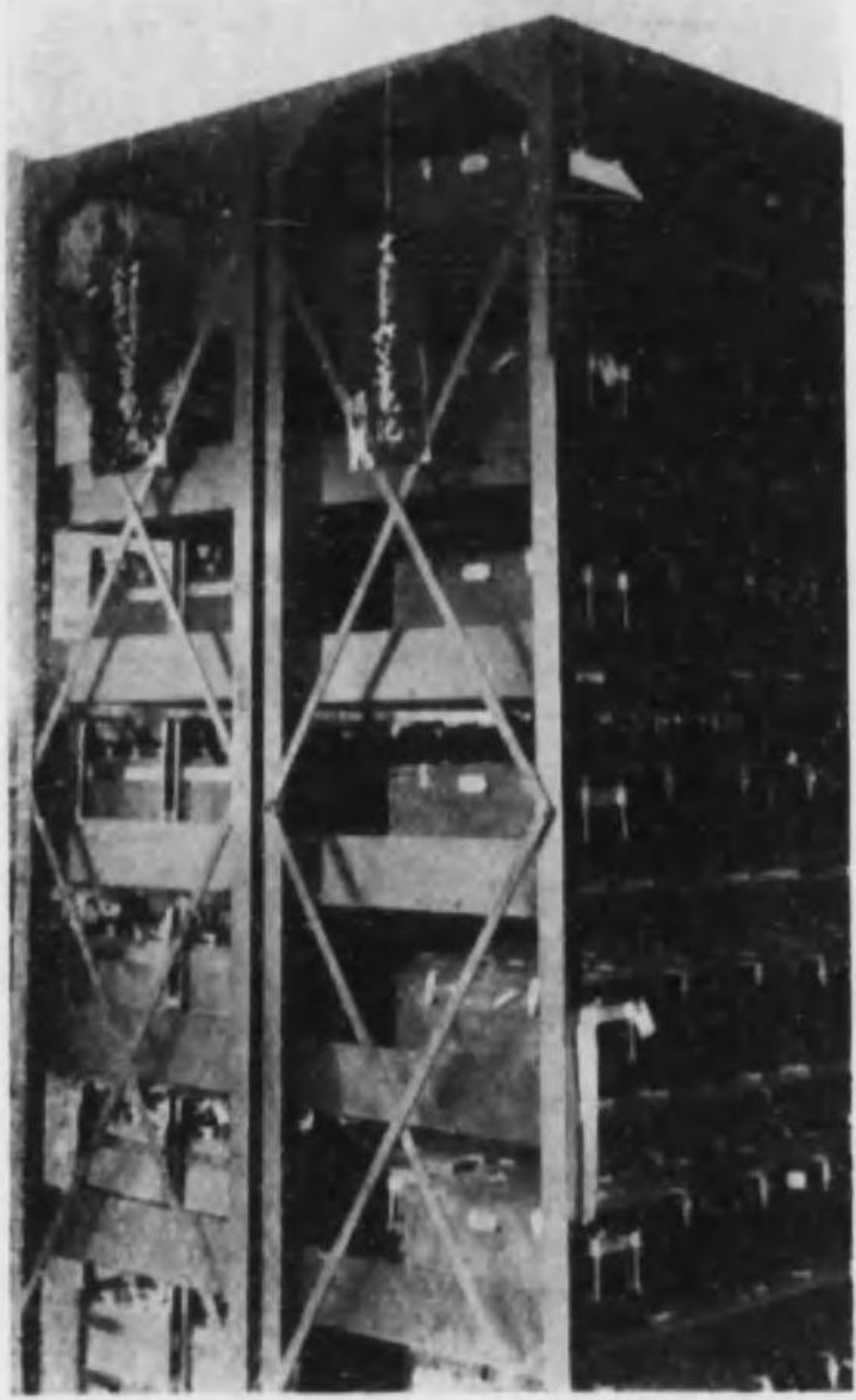
電池類

濕電池	蓄
<p>三 一時的ノ格納ニ於テハ電池ヲ其儘トシ短絡及電液ノ漏出等ヲ考慮シテ格納スヘシ但電槽ハ別ニ格納スルヲ可トス</p> <p>四 格納場所ハ蓄電池ノ場合ニ同シ</p>	<p>使用状態ニ組立タル儘格納スル場合ハ左ノ方法ニ依ルヘシ</p> <p>但通常一箇年以内ノ格納ニシテ且直ニ使用ヲ必要トスル場合ニ實施スルモノトス</p> <p>一 格納前ノ手入ハ左ノ方法ニ依ルヘシ</p> <p>1 電池ヲ十分充電シタル後金具ニハ防錆ノ爲「ワセリン」又ハ「グリース」ヲ塗布ス</p> <p>但充電ニ支障ナキ如ク接續端子ニハ塗油セサルヲ可トス</p> <p>2 格納場所ハ換氣良好且且冷涼ニシテ濕氣日光ノ直射塵埃ノ防止ヲナシテ適宜排列ス</p>
<p>一 各電池ニハ充電及電解液比重ノ記録ヲナシ置クモノトス</p> <p>二 爆發性「ガス」ヲ發生スルヲ以テ格納場所ニ近ツクヘカラス</p> <p>三 極寒地ニ於テハ充電回数ヲ多クシ且保溫ニ注意スヘシ</p>	

池	電
<p>極板ヲ蒸溜水中ニ格納スル場合ハ左ノ方法ニ依ルヘシ</p> <p>但通常六箇月以上ノ格納ニシテ且比較的容易ニ使用ヲ必要トスル場合ニ實施スルモノトス</p> <p>一 電池ヲ普通充電シ不良電池ノ有無ヲ點檢ス</p> <p>二 準備放電ヲ行フ</p> <p>三 電解液ヲ蒸溜水ト入換ヘ硫酸分ノ殆ト無クナルマテ浸漬シ洗滌ス</p> <p>四 電槽ニ蒸溜水ヲ滿シ部品ヲ組立テ格</p>	<p>二 格納間ノ手入ハ左ノ方法ニ依ルヘシ</p> <p>1 概ネ毎月二回(少クトモ一回)補充充電ヲ行フ</p> <p>補充充電ハ普通充電電流ノ二分ノ一ヲ以テ「ガス」ノ發生旺トナルマテ充電ス</p> <p>2 最初及數箇月ニ一回十分放電ヲ行ヒタル後過剩充電ヲ行フ</p>
<p>格納後使用セントスルトキハ蒸溜水ト電解液トヲ置キ換ヘ過剩充電ヲ爲スヘシ</p>	

電池類

第九圖
移動式箱型蓄電池
乾燥狀態ノ格納



池

ヲ以テ使用ニ方リ交換ヲ要スルモノアリ
六 格納ニ方リテハ乾燥シ且低溫ニシテ塵埃ナキ場所ヲ選定シ特ニ極板ハ密閉格納ヲナスヲ可トス但移動式箱型ニ在リテハ組立テタル後空氣孔其他ヲ密閉シ振動セサル場所ニ格納ス(第九圖)

蓄電

納ス
五 電解液ハ再用ノ目的ヲ以テ「ガラス」罐等ノ容器ニ格納シ塵埃ノ侵入セサル如ク密閉ス
六 格納場所ハ前格納法ノ場合ニ同シ
極板ヲ乾燥状態トナシ格納スル場合ハ左ノ方法ニ依ルヘシ
但通常一箇年以上格納スル場合ニ實施スルモノトス
一 普通充電ヲ行フ
二 準備放電ヲ行フ
三 電解液ヲ蒸溜水ト入換ヘ電壓〇・一「ヴォルト」以下トナルマテ放電ヲ行フ
四 槽内ノ蒸溜水ヲ二―三回取換ヘ極板ヲ洗滌シタル後蒸溜水ヲ滿シ概ネ一〇時間後ニ之ヲ除去シ日蔭ニ於テ十分乾燥ス
五 電槽及其他ノ部品ヲ水洗シ徐ニ乾燥ス但木製隔離板ハ乾燥割レヲ生スル

格納後使用セントスルトキハ新ニ電池ヲ組立ツル場合ト同一ノ方法及注意ヲ以テ最初充電ヲ爲スヘシ

第四節 検査

第三百 検査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

電	乾	區分	著	眼	點	故障ノ原因	摘	要
檢	入	購	起	電	力			通常「ヴォルト」ニ就キ「オーム」以上ノ抵抗ヲ接續シタルトキ精密電壓計ヲ以テ電壓ヲ測定シ規定ノ電壓ヲ有スルヤ否ヤヲ檢ス
短絡電流	容量又ハ持續時間抽出的ニ檢査ス							所要ノ抵抗ヲ通シテ放電シ概ネ規定電壓ノ三分ノ一ニ至ルマテノ時間及電流量ヲ測定ス但所要抵抗及容量ハ各電池ノ規定ニ依ル
								電流計ヲ以テ速ニ測定ス

池	電	濕	池	在
電壓、電流ノ異常低下	漏液	基板、接續ねち部ノ毀損及發錆	電壓及電流ノ低下	一定期間放置後ノ起電力短絡電流抽出的ニ檢査ス
基板ノ汚損、沈澱物ノ堆積及内部短絡等	電瓶ノ破損ニ因ルコトアリ		一 氣孔ノ閉塞 二 内部ノ藥液ノ變敗 寒冷ノ爲一時低下セルコトアリ	
附着セル漏液ヲ十分拭除シ原因ヲ確ムヘシ				一 常溫ニ於テ電池ヲ二箇月以上放置シ前項ニ依リ起電力短絡電流及容量ヲ夫々測定ス 二 成シ得レハ酷暑及極寒時ニ放置シテ檢査スルヲ可トス

蓄電	
電槽ノ損傷	一 耐酸塗料ノ剝脫 二 電解液ノ漏洩
端子金物ノ腐蝕	一 端子ニ電解液附着スル爲 電解的ニ腐蝕ス
電壓ノ異常	一 充電後内、外部短絡 ニ 因ル急激降下 二 極板ノ腐蝕及硫酸化 ニ 因ル充電時ノ上昇困 難 三 極板ノ作用物質ノ脫 落ニ因ル衰弱 四 電解液比重規正不良 五 嚴寒ニ因ル内部抵抗 ノ増加
	一 通常電壓計ヲ以テ兩端子間 ノ電壓ヲ測定ス 但本章記載ノ電壓ハ電池一箇 ニ對スル陰陽兩極間ノ端子電 壓ヲ示セリ 二 電壓ノ測定ハ放電終止電壓 及充電終止電壓ヲ含ムハ電 池ノ閉回路即チ電流ヲ通シテ ルトキニ於テ行フヲ要ス 放電時ニ於テハ閉回路電壓ハ開 回路電壓ヨリモ低ク充電ニ於 テハ閉回路電壓ハ開回路電壓 モ高シ又開回路電壓ハ充電 依ル電壓ノ昇降差キヲ以テ故 障ノ判定困難ナリ 三 極板測定電壓異状ヲ呈シ何レノ 爲ニハ「カドミウム」補極棒ヲ 使用シテ各極電壓ヲ測定スル

池	
電解液ノ減少	一 蒸 洩 發 二 漏
電解液ノ比重ノ異常	一 漏洩時ニ於ケル稀硫酸 及蒸溜水ノ補充不良 ニ 因ル 二 極板ノ硫酸化ニ 因ル 低下 三 充電後短絡ニ依ル急 激ノ低下
	一 液量ハ定期的ニ點檢スル如 クスヘシ 二 漏洩確實ニシテ減量大ナル 場合ノ外ハ蒸溜水ヲ補充スヘ シ 一 比重計ヲ挿入シテ測定ス 二 比重ノ測定値ニ關シテハ左 記ニ依ル 1 「ボーマー」比重計ヲ用ヒ タルトキハ左式ニ依リ換算 ス 2 温度ノ修正ハ一度上昇ス ル毎ニ比重約〇・〇〇〇七 ヲ減少ス 但本章記載ノ比重ハ一五度 ヲ標準トセリ

電池類

池		電
隔離板ノ損傷	極板ニ白色硫酸鉛ノ附着 極板ノ硫酸化	一 放電電流ノ過大及過少 二 過放電又ハ放電後ノ放置 三 充電不足ノ反復 四 電解液ノ不足及不純 五 溫度ノ過高 六 電解液比重ノ過大及過少 七 短絡 八 局部作用
變形衰損ノ爲極板ノ短絡ヲ來ス コトアルヲ以テ注意スヘシ	一 硫酸化セルモノハ電解液ノ比重低下シ内部抵抗大トナリ從テ容量減少シ使用ニ際シ發熱ス 二 通常左記ノ方法ヲ講スルモ一度成セルトキハ其ノ恢復ハ相當困難ナリ 1 臨時ニ過剩充電ヲ行フ 2 蒸溜水ヲ電解液トシテ充電ヲ行ヒタル後規定比重ノ電解液ト交換ス 3 軟毛刷毛ヲ以テ水中ニテ拭ヒ除去ス 三 充電ノ際ハ他ノ電池ト區別シ單獨ニ充電ヲ行フ如クスヘシ	一 硫酸化セルモノハ電解液ノ比重低下シ内部抵抗大トナリ從テ容量減少シ使用ニ際シ發熱ス 二 通常左記ノ方法ヲ講スルモ一度成セルトキハ其ノ恢復ハ相當困難ナリ 1 臨時ニ過剩充電ヲ行フ 2 蒸溜水ヲ電解液トシテ充電ヲ行ヒタル後規定比重ノ電解液ト交換ス 3 軟毛刷毛ヲ以テ水中ニテ拭ヒ除去ス 三 充電ノ際ハ他ノ電池ト區別シ單獨ニ充電ヲ行フ如クスヘシ

電解液ノ比重ノ異常	電解液ノ著色	極板作用物質ノ脫落及沈澱物ノ堆積	極板ノ彎曲又ハ龜裂	極板ノ腐蝕
一 金物ノ混入溶解 二 不純物ノ混入	一 充放電電流ノ過大 二 振動 三 使用ニ依ル自然破損	一 充放電電流ノ過大 二 兩面作用ノ不均齊 三 過熱中ノ使用 四 短絡 五 過放電	一 過小及溫度ノ過高 二 鉛ヲ溶解スル酸(硝酸、硝酸等)又ハ其鹽類ノ存在	一 過小及溫度ノ過高 二 鉛ヲ溶解スル酸(硝酸、硝酸等)又ハ其鹽類ノ存在
三 電解液ノ濃度ハ各部一樣ナラサルコトアルヲ以テ注意スヘシ 四 比重ノ規正ハ充電終期ニ於テ規定比重トナスヲ可トス	電池ヲ準備放電シタル後電解液ヲ交換シテ手入ス	電池ヲ準備放電シタル後電解液ヲ交換シテ手入ス	隔離板ヲ檢シ且短絡ヲ防止スヘシ要スレハ注意シテ極板ヲ矯正ス	電池ヲ準備放電シタル後電解液ヲ交換シテ手入ス

池	電	蓄
短絡		
極板ノ彎曲、膨脹及海線狀鉛ノ發育甚シキタメ接觸 二 沈澱物ノ堆積 三 隔離板ノ不良及電槽ノ鉛張ト極板ノ接觸 四 金層其他ノ落入		
短絡ノ徵候左ノ如シ 一 電池ノ溫度上昇 二 電壓及比重ノ低下 三 充電終期ニ於ケル「ガス」發生遲延及過少		

第十八章 線索類

第一節 手入

第四百 線索類ノ手入ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

種類	要領	摘要
麻	一 常用品ノ手入 1 使用後ハ空氣ノ流通良好ナル場所ニ懸吊シテ乾燥スヘシ	

索	鋼	索
二 格納品ノ手入 1 日常使用後ニ於テハ布片又ハ刷毛ヲ以テ繩目ニ附著セル土砂、塵埃ヲ拭除シ要スレハ水洗ヲナシタル後十分ニ乾燥シ鋼索ハ亞麻仁油ヲ浸マセタル布片ヲ以テ拭淨シ又茄子環等ニハ「スピンドル」油ヲ塗布スヘシ 2 污垢膠著シ除去シ難キモノハ少量ノ燈油ヲ浸マセタル刷毛又ハ布片ヲ以テ之ヲ拭淨シ乾燥後亞麻仁油ヲ塗布スヘシ 二 格納品ノ手入 常用品ニ準シ實施ス但シ污垢ノ膠著甚シク前記ノ方法ニ依リ除去シ能ハサルトキハ「テレピン」油及揮發油ノ混合液中ニ數時間浸シ柔軟ニナシタル後前記ノ方法ニ依リ手入スヘシ		一 子線ノ切斷セルモノハ使用者ノ手ヲ傷ツケサル如ク捻リ込ミ又ハ鑿削シ置クヘシ 二 麻心入鋼索ノ麻心ニハ最初ヨリ亞麻仁油ヲ含マシメアルヲ以テ上記ノ方法ヲ適用スヘカラス

電

被

一 常用品ノ手入

1 普通手入

- (イ) 微、塵埃ノ附着シタルトキハ乾布又ハ雑巾ヲ以テ之ヲ拭淨スヘシ
- (ロ) 雨雪等ノ爲濕潤シタルトキハ日光ノ直射ヲ避ケ空氣ノ流通良好ナル場所ニ於テ左ノ方法ニ依リ乾燥スヘシ
 - (1) 輕微ナルモノハ日蔭ニ懸吊シ乾燥ス
 - (2) 濕潤甚シキモノハ適當ノ間隔ヲ存シテ杭又ハ柱等ヲ樹テ之ニ架設作業ノ方法ニ依リ被覆線ヲ懸架延長シ疎散ニ纏回シテ乾燥スヘシ此際土砂ヲ附着セシメサルコト及纏回部ニ損傷又ハ縮結ヲ生セシメサルコトニ注意スルヲ要ス而シテ撤收作業ノ方法ニ依リ内徑約二〇程度ノ環形ニ卷キ得ル如キ適宜ノ補助絡車ニ卷キ替ヘタル後捲線ヲ離脱シ環形ノ一箇所ニ於テ結束シ其結束セサル部分ヲ疎開シテ乾燥スヘシ

- 一 手入ト同時ニ検査ヲ行ヒ故障箇所ヲ發見セハ適宜標識ヲ附シ修理ニ便ナラシムヘシ
- 二 修理ノ爲心線ヲ切斷スルコトハ成ルヘク之ヲ避クルヲ要ス
- 三 塗料ヲ施シタル被覆線ヲ「ワセリン」其他ノ油類ニテ拭淨スルトキハ一時外觀ヲ良好ナラシムルモ之カ爲塗料ヲ變質溶解セシムル虞アルヲ以テ之ヲ使用セサルヲ可トス
- 四 塗料塗施ニ方リ注意スヘキ事項左ノ如シ
 - 1 塗料附着程度ハ被覆線一卷ニ付大被覆線ニ在リテハ約三七

線

覆

線索類

2

- (ハ) 土砂ノ附着シタルトキハ他ノ絡車ニ卷キ替ヘツツ濕潤セル布片ヲ以テ拭ヒ更ニ乾布ヲ以テ之ヲ拭淨スヘシ
- 精密手入
- 防濕塗料ヲ施シタル被覆線ノ塗料著シク剝脱シタルモノハ左ノ要領ニ依リ塗料ヲ塗施スヘシ
 - (イ) 先ツ污垢、土砂、塵埃等ヲ拭淨シ且十分乾燥ス
 - (ロ) 防濕塗料ヲ八〇—一〇〇度ニ溶解ス但一〇〇度以上ニ昇騰セシメサルヲ要ス
 - (ハ) 被覆線ヲ其一端ヨリ逐次溶解セル塗料中ヲ通過セシメタル後布片ヲ以テ被覆ノ表面ニ附着セル塗料ノ過剩分ヲ除去シ絡車ニ第一回ノ卷替ヲ行ヒ次ニ他ノ絡車ニ第二回ノ卷替ヲ爲シツツ乾布ヲ以テ其表面ヲ摩擦ス
 - (ニ) 塗料ヲ施シタルモノハ其表面平滑ニシテ

2

- 五瓦、小被覆線ニ在リテハ約九四瓦ノ塗料ヲ附着セシムルヲ標準トス
- 2 卷替速度ハ接續部ナキ被覆線ハ五〇〇米ニ就キ十五分ヲ標準トス

電	
線	
<p>厚薄ナク其附着力強キヲ要ス之カ爲塗施前ニ於ケル被覆線ノ拭淨、塗料ノ品質、溶解溫度、卷替速度、塗料附著ノ程度及塗施後ノ摩擦等ニ特ニ注意スヘシ</p> <p>(ホ) 局部ノ補修塗ヲ行フニハ防濕塗料ノ附著セル布片ヲ温メ之ヲ以テ被覆ヲ摩擦セハ可ナリ</p> <p>二 格納品ノ手入 乾燥セル布片ヲ以テ塵埃及發黴ヲ拭淨シ要スレハ塗料ヲ塗施スヘシ</p>	

第二節 取扱

第一百五 線索類取扱上注意スヘキ事項概ネ左ノ如シ

區分	注	意	事	項
麻索	二一	金釘ニ掛ケ又ハ引摺ル等ニ因リ損傷セサルコト 燃リヲ戻スカ如キ外力ヲ加ヘサルコト		

鋼	
索	
電	
線	
線	被覆線
過度ニ屈曲シ又ハ子線ヲ切断シ或ハ燃リヲ戻ス如キ外力ヲ加ヘサルコト	<p>一 急激ナル力ヲ以テ過度ニ屈曲セサルコト 二 屈曲セルモノヲ急ニ戻回スルトキハ切断スルコトアルヲ以テ徐ニ矯正スルコト</p> <p>一 使用ノ際線ヲ急ニ屈曲シ又ハ被覆ヲ破損セサルコト 若被覆ヲ毀損シタル疑アルトキハ該部ニ於ケル絶縁抵抗ヲ測定スヘシ 二 縮結ヲ生シタルトキハ靜ニ之ヲ弛メツツ反對ニ戻回シ屈曲ヲ矯正スルコト</p> <p>絡車ノ輪板及駐螺ハ常ニ緊定シ被覆線ヲ絡車胴ト輪板トノ間ニ挾マサルコト</p> <p>三 接續器ノ保護ニ留意スルコト殊ニ外方ノ接續器ハ綿布類ヲ以テ被包シタル後捲線ノ弛緩又ハ接續器ノ遊動セサル如ク捲體ニ結束シ置クヘシ</p> <p>四 卷替作業ハ已ムヲ得サル場合ノ外行ハサルコト 卷替ノ際ハ回轉速度ニ注意シ縮結ヲ生セシメス且絡車胴ノ全部ニ平等ニ纏卷スル如ク注意シ若縮結ヲ生シタルトキハ其儘之ヲ延伸スルコトナク縮結ヲ反對ニ戻回シ要スレハ其局部ニ於ケル絶縁ヲ檢スヘシ</p> <p>五 被覆線ヲ運搬スルニ方リテハ其捲形ヲ弛解セサルコト</p> <p>六 鉛被線ニ關シテハ左ノ如シ</p>

線索類

電	線
被覆	線
1 鉛被線ハ特ニ鉛被ヲ破損セサルコトニ留意シ急ニ曲ケ又ハ壓迫スヘカ ラス空氣乾燥法ヲ施セルモノニ於テ特ニ然リ	
2 同一箇所ニ於テ屢、彎曲セサルコト	
3 彎曲ノ半徑ハ線ノ直徑ノ二〇倍以上ナルコト	
4 線ヲ切斷シタルトキハ其端末ニ鉛帽ヲ被ヒテ鉛工ヲ爲スカ又ハ心線ヲ 被鉛内ニ折込ミタル後其端末ヲ絞緊シ錫鑲ヲ以テ密閉スヘシ	
5 空氣乾燥法ヲ施行セサルモノヲ切斷シタルトキハ其一端ヲ直立シ之ヨ リ約一米五〇〇ノ間ハ煮沸シタル良質ノ「パラフィン」ヲ注入スヘシ	

第三節 格納

第六百六 格納ハ左ノ要領ニ依リ實施スルモノトス

麻	索
區分	要領
一 徑ノ小ナル索ハ基数毎ニ結束シ空氣ノ流通良好ナル場所ニ懸吊スヘシ 但防蟲等ノ爲必要アルトキハ乾燥セル箱内ニ格納スルコトヲ得	
二 徑ノ大ナル索ハ卷キテ結束シ空氣ノ流通良好ナル場所ニ設置スヘシ	

線索類

鋼	電	線
索	被覆	裸電線
縮結ヲ生セシメサル如ク卷キ荒目麻布ヲ纏ヒ適宜ノ位置ニ設置シ防塵ノ處置 ヲ爲スヘシ		荒目麻布ヲ纏卷シ適宜ニ堆積スヘシ(第十一圖)
	一 比較的寒冷ニシテ溫度ノ變化成ルヘク少ク且濕潤セサル位置ヲ選定格納 シ濕潤、溫暖ノ季節ニ在リテハ戶外ノ乾燥セル日ニ於テ時々窓ヲ開キ格納 箱ノ蓋又ハ覆ヲ除キ空氣ノ流通ヲ計ルヘシ(第十圖)	
	二 接續器ハ特ニ其凸起部ニ注意シ接續部ヲ綿布ノ類ヲ以テ被包スヘシ	
	三 絡車胴ヲ有スルモノハ之ニ附著セル緣金ヨリ生スル被覆線ノ損傷ヲ豫防 スル爲外部ノ結束ヲ確實ニスヘシ	
	四 柔軟ナル布ヲ敷キ成ルヘク其上ニ格納スヘシ	
	五 捲線ハ之ヲ堆積スルコトヲ得ルモ上層ノ加壓ニ依リ下層ノモノヲ變形セ シメサル程度ナルヲ要ス	
	六 例ハ大被覆線ニ在リテハ四層、中被覆線ニ在リテハ二層、小被覆線ニ在リテハ五 層ヲ限度トスヘシ	
	1 一時格納ニ在リテハ前各項ノ外左ニ依ルヘシ	
	2 絡車ヲ有スルモノハ絡車又ハ絡車胴ニ纏卷シ之ヲ綿帶類ヲ以テ結束格 納ス	
	2 大被覆線ノ如キハ架設ニ便ナル如ク架設胴ニ適應スル捲形トシ之ヲ平	

線索類



第十圖
九二式小被覆線ノ格納



第十一圖
裸線ノ格納

一六三

電線

被覆線

- 置スヘシ
- 七 長期格納ニ在リテハ一乃至五項ニ依ルノ外左ニ依ルヘシ
- 1 絡車胴ヲ有スルモノハ必ス之ヲ絡車胴ニ纏卷シ綿帶類ヲ以テ四箇所ニ於テ之ヲ結束シ麻布製袋ニ收容シ又ハ麻布帶ヲ以テ之ヲ被包シ絡車胴ヲ直立セシムル如ク格納ス
- 2 大被覆線ハ架設胴ニ適應スル捲形トシ麻布帶ヲ以テ之ヲ被包シ平置ス
- 八 鉛被線ニ在リテハ損傷部又ハ線ノ端末ヨリ濕氣ノ浸入セサル如ク注意スヘシ

一六二

第四節 検査

第一百七 線索類検査ノ主要ナル着眼點左ノ如シ

區分	著眼點	原因	摘要
麻索	一 繩ノ切斷 二 蛇口部ノ損傷 三 發黴、變敗 四 蟲害 五 衰損		損傷品ハ抗力ヲ必要トスル箇所ニ使用スヘカラス
銅索	一 茄子環ノ機能不良 二 縮結 三 塗油不良及發錆 四 子線ノ切斷		鋼索ハ多ク抗力ヲ要スル箇所ニ使用スルモノナルヲ以テ損傷品ハ其抗力ヲ確認スルヲ要ス
裸電線	「メツキ」ノ剝脫及發錆	「メツキ」ノ不十分	

電被覆		電被覆	
被覆ノ損傷	「ゴム」ノ噴出	防濕塗料ノ剝脫	縮結
被覆ノ發黴	手入不良 乾燥不良	繩捲時ノ不注意 延線時ノ不注意	鉛被ノ不良
縮結	暑熱ニヨル低加硫「ゴム」ノ老化、錫鍍不良ニヨル「ゴム」ノ老化	心線及被覆ヲ損傷セサル如ク靜ニ戻回スヘシ	鉛被ニ孔隙等アリタルトキ又ハ誤リテ鉛被ヲ損傷シタルトキハ必ス錫鍍ヲ用ヒテ固封スヘシ
鉛被ノ不良			架設胴又ハ絡車ニ裝著シ得サルコトアリ
端末ノ處置不良			
捲形ノ保持不適當			

線索類

線	線	
導體抵抗不良	一 心線ノ切斷 二 切斷部ノ修理不良	原因ヲ發見セハ該部ヲ修理スヘシ
絶緣抵抗不良		

第十九章 氣蓄罐

第一節 取扱

第百八 氣體ヲ充填セル氣蓄罐ハ温度上昇ニ依リ内壓ノ上昇、衝擊、罐ノ衰損等ニ因リ破裂スル虞アルヲ以テ之カ取扱ハ慎重確實ナルヲ要ス

第百九 氣蓄罐ニ氣體ヲ充填スルニハ左記事項ヲ遵守スヘシ

- 一 使用氣蓄罐ノ番號、内容積、製造所名、製造年月日、耐壓試驗壓力及同試驗年月日ヲ明記セル容器證明書ヲ附スルコト
- 二 容器ノ外部ニ損傷アルモノ及最近ノ耐壓試驗後四箇年ヲ經過セルモノニ就テハ充

填前耐壓試驗ヲ行ヒ之ニ合格セルモノヲ使用スルコト

三 耐壓試驗壓力ノ二分ノ一以上ノ壓力ニテ充填セサルコト

四 充填後ハ蓋帽ヲ螺著スルコト

五 充填セル罐ニハ其重量、内容積、充填者、充填年月日、充填壓力及充填時ノ罐ノ

温度ヲ明記セル内容票ヲ添附スルコト

第百十 氣體ヲ充填セル氣蓄罐取扱上ノ注意左ノ如シ

- 一 危害ヲ生スル虞アル場所又ハ物件ト隔離スルコト
- 二 日光ノ直射其他熱源ノ直接影響ヲ避クルコト
- 三 温度甚シク上昇セハ壓縮氣體膨脹シ内壓從テ上昇スルヲ以テ其際ハ内壓ヲ規定壓マテ氣體ヲ排出スヘシ
- 四 開閉器ヲ使用セサル際ハ常ニ蓋帽ヲ螺著セシメ置クコト
- 五 二本以上積ミ重ヌル場合ハ動搖又ハ轉落等ノ虞ナカラシムルコト

六 車輛ニ積載シテ運搬スル場合ニハ固定装置ヲ設クルカ或ハ毛布、藁等ニテ被覆シ

他ノ物體ト直接激突セサル如ク注意シ投下其他ノ粗暴ナル取扱ヲ爲ササルコト

第百十一 壓出氣體使用上ノ注意左ノ如シ

一 壓出氣體ハ瓣部ノ不具合ノ爲漏洩スルコトアルヲ以テ使用前豫メ内壓ヲ測定スヘシ

漏洩ノ疑アルモノハ本器ヲ水中ニ没シ水泡ノ發生ニ依リ點檢スルコトヲ得ヘシ

二 氣體ヲ充填スル際氣體中ニ含まレタル水分及壓縮機ノ潤滑油等モ同時ニ壓入セラレテ罐内ニ液體ノ滯溜スルコトアリ之カ爲罐ノ内壁ヲ腐蝕スルコトアルヲ以テ斯ル狀況ヲ認メタルトキハ罐ヲ暫ク倒立シ置キタル後瓣ヲ開キ氣體ト共ニ此液體ヲ排出スルヲ要ス

第二節 格納

第百十二 本器ヲ永ク格納スルニハ前號第二項ノ方法ニ依リ罐内ノ液體ヲ總テ排出シ開閉器ヲ分解手入シタル後組立テ直立シ置クヘシ

第百十三 一時格納ノ場合ニ在リテモ氣體ヲ充填シタルモノヲ三五度以上ノ場所ニ貯藏スヘカラス

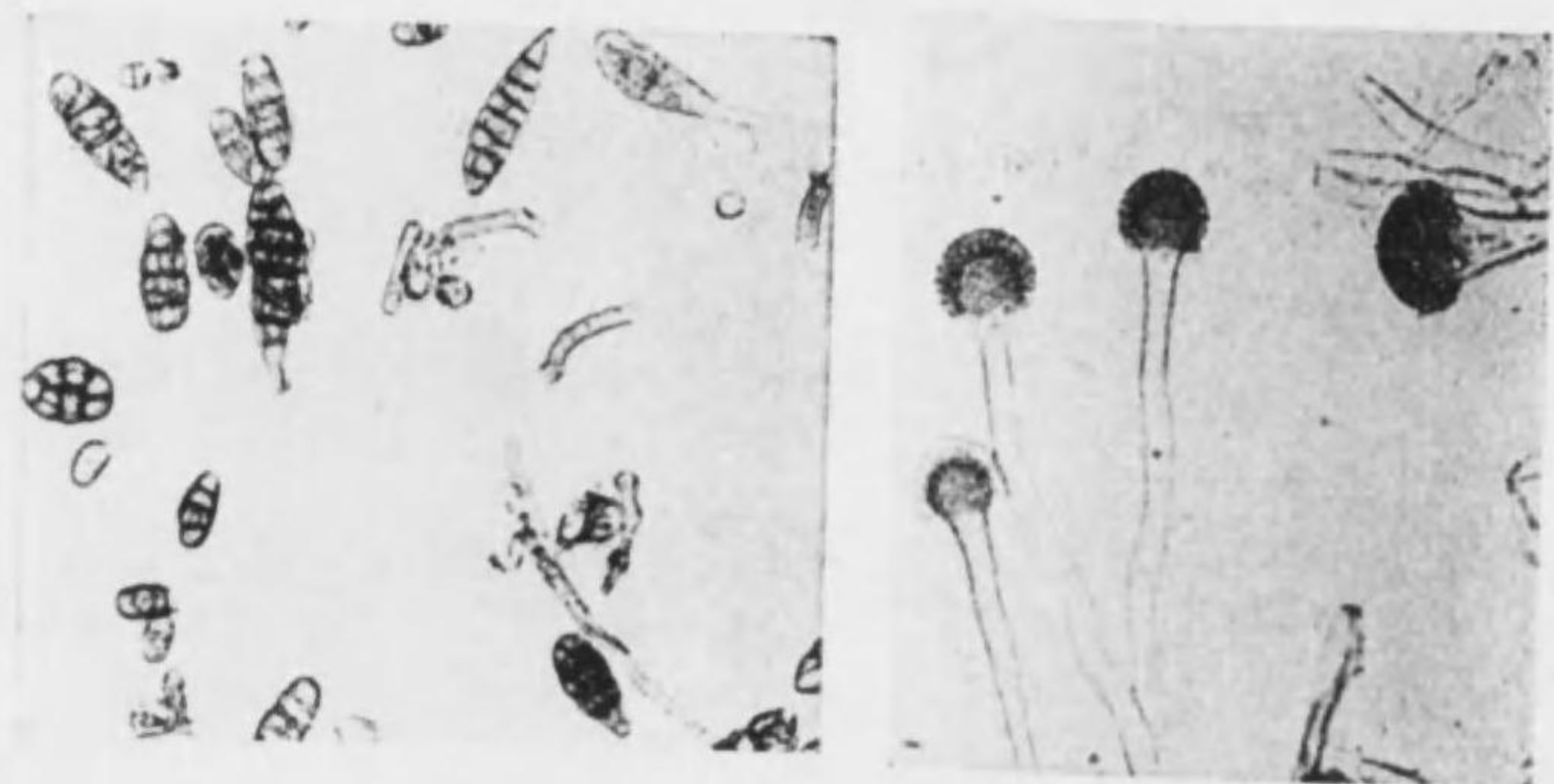
第三節 検査及手入

第百十四 器體ノ變形、龜裂ノ有無等ヲ常ニ點檢シ又開閉器ハ機能良好ナル如ク分解検査ヲ行フヘシ

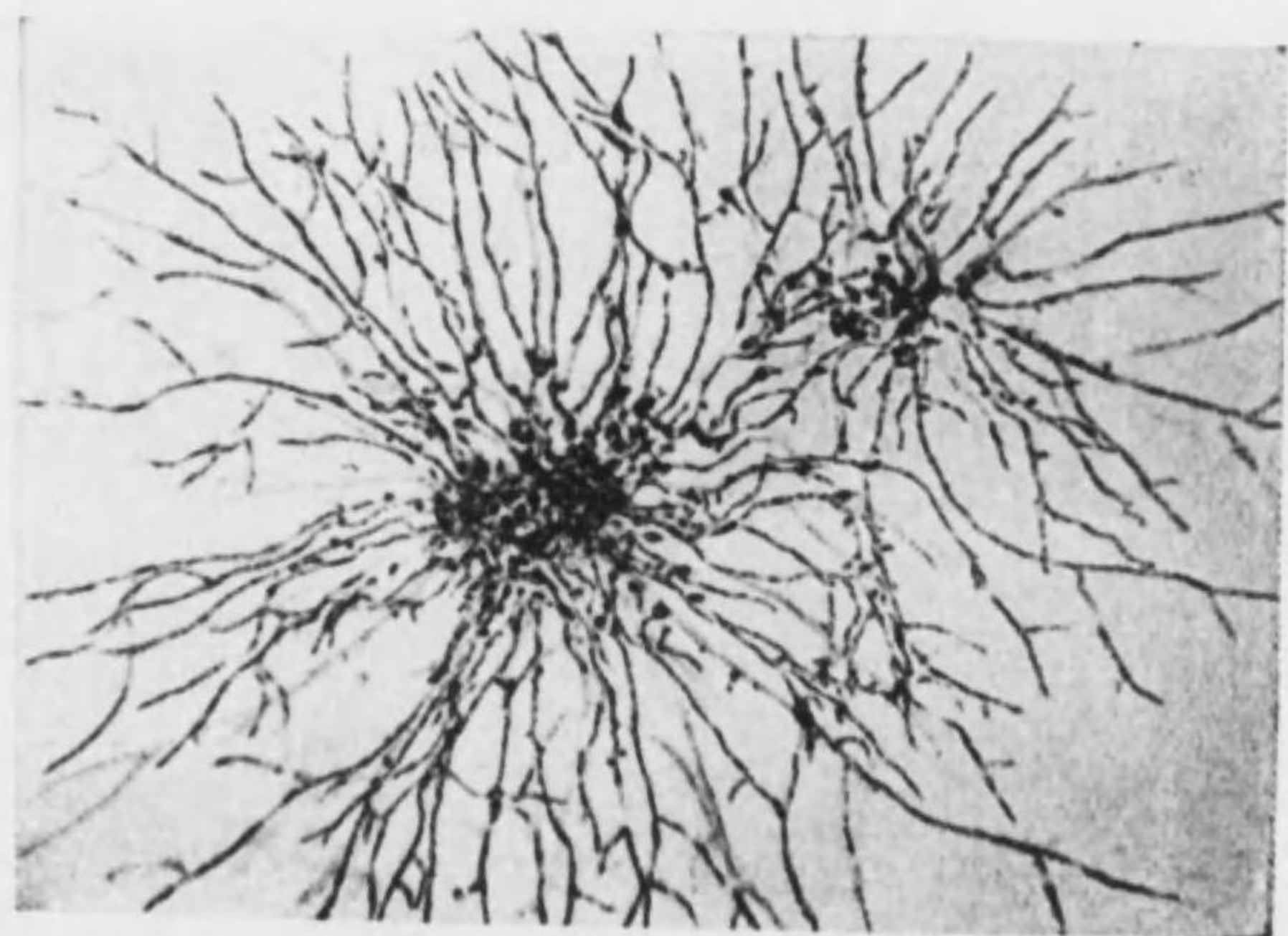
尙安全瓣ハ耐壓試驗壓力ノ概ネ十分ノ八以下ノ壓力ニテ破裂スル如クセラレアルヲ以テ安全瓣孔ノ閉塞及銅板ノ發錆等無キ如ク分解検査及手入ヲ行フヲ要ス
但銅板ハ精密ニ規整セラレアルモノナルヲ以テ分解ノ爲磨損及變形等ヲ生セス又組立ヲ誤ラサル如ク特ニ注意スルヲ要ス

附圖第一
革ノ微

胞1子



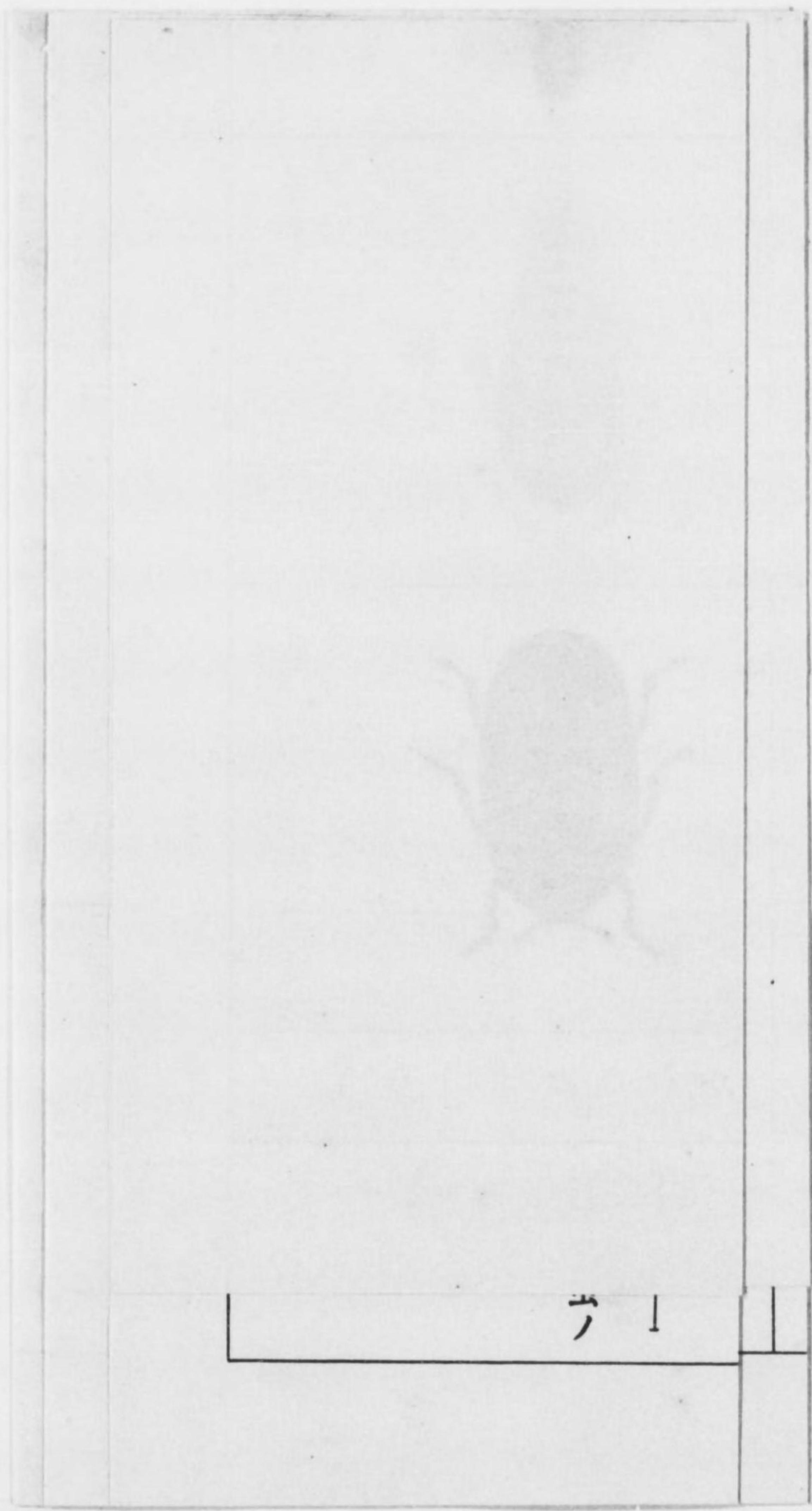
菌2絲



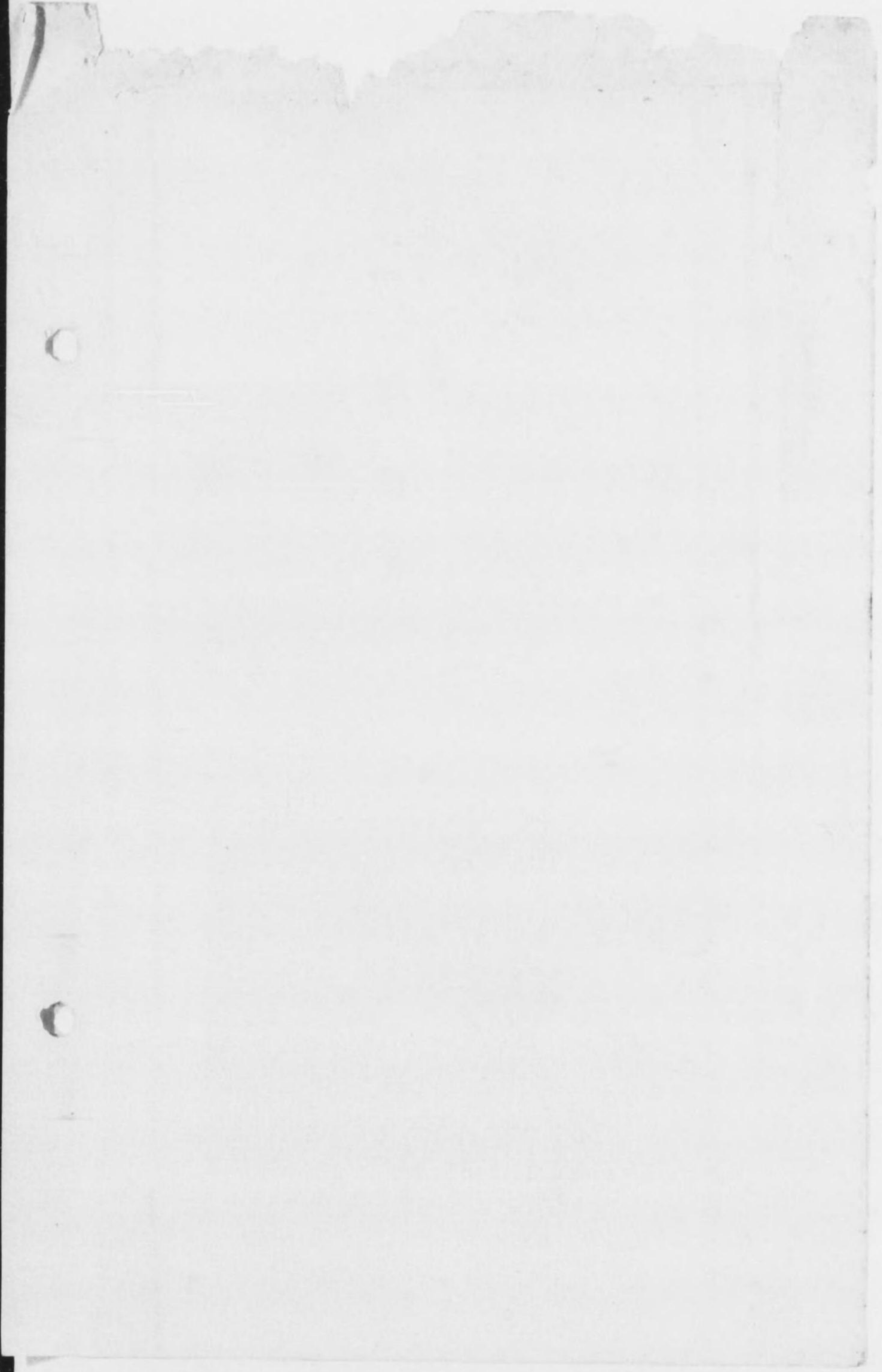
第一百五 本器ハ四年目毎ニ定期耐壓試験ヲ行フヲ要ス

定期耐壓試験ハ昭和十一年七月二十日内務省令第二十三號壓縮「ガス」及液化「ガス」取
締法施行令ニ準シ實施スヘシ









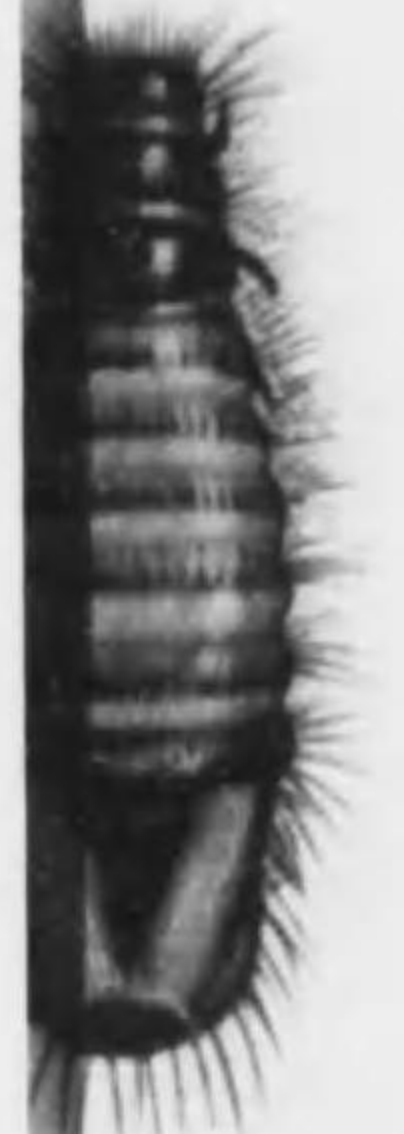
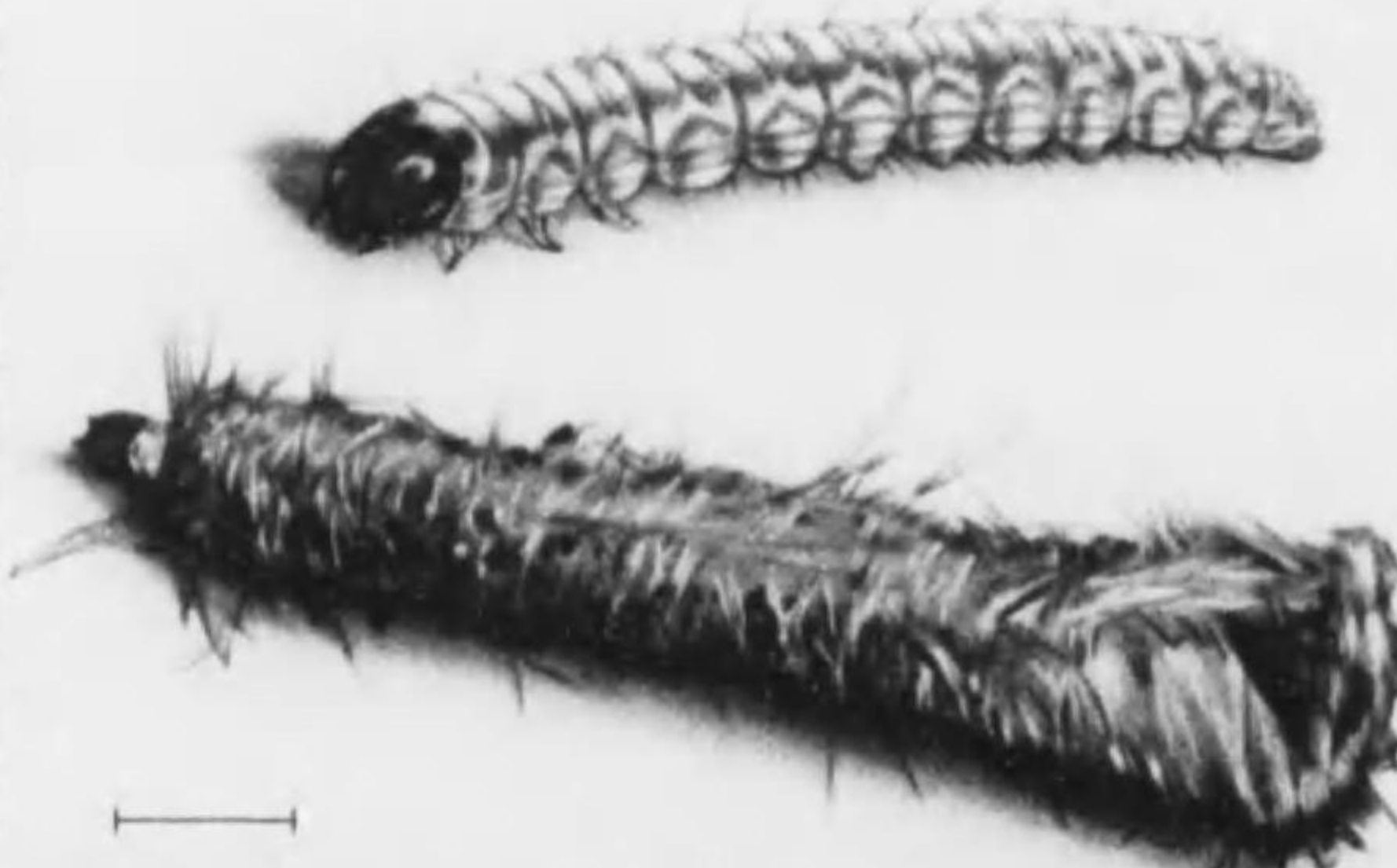

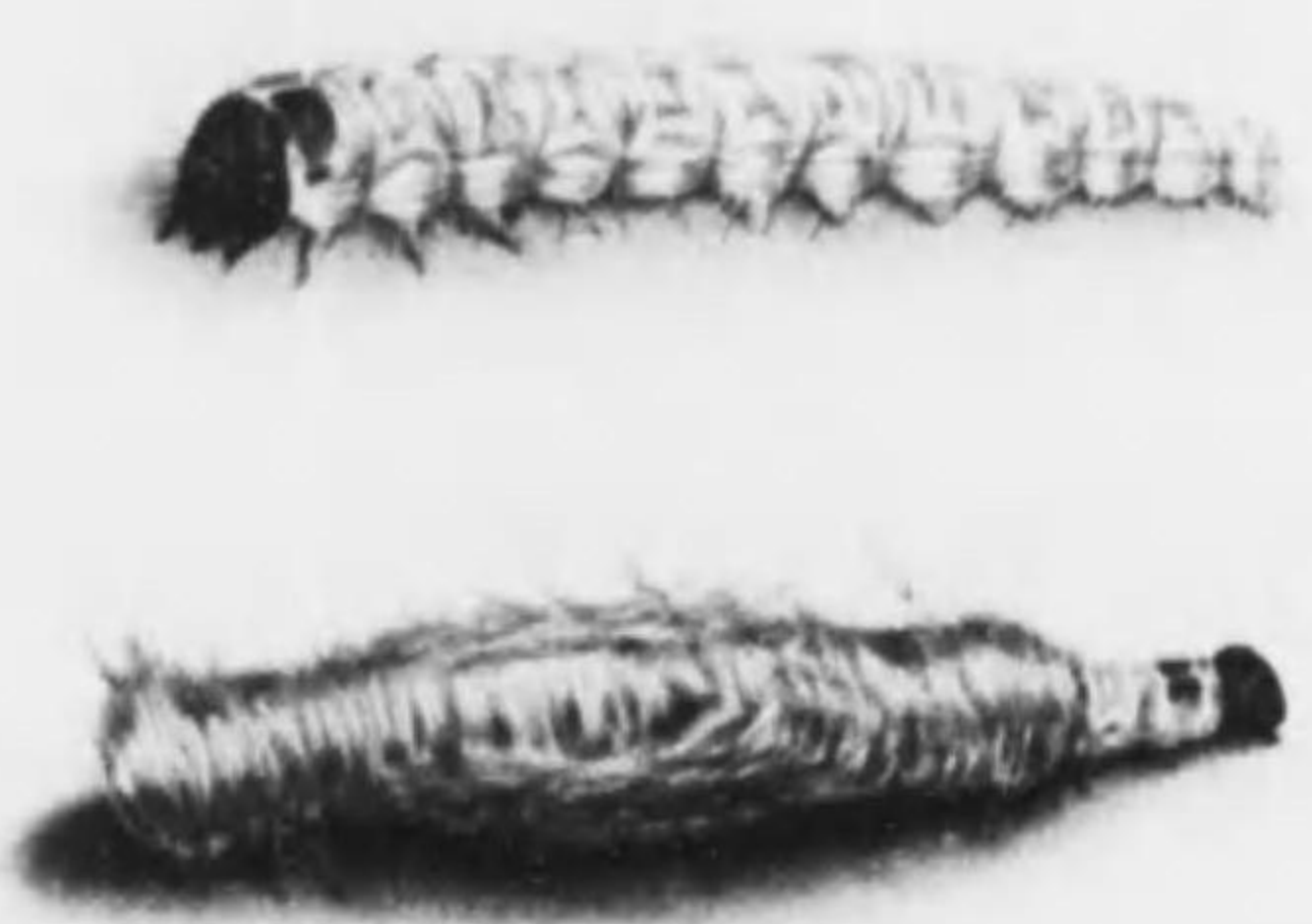
兵器保存要領 第一篇 通則終











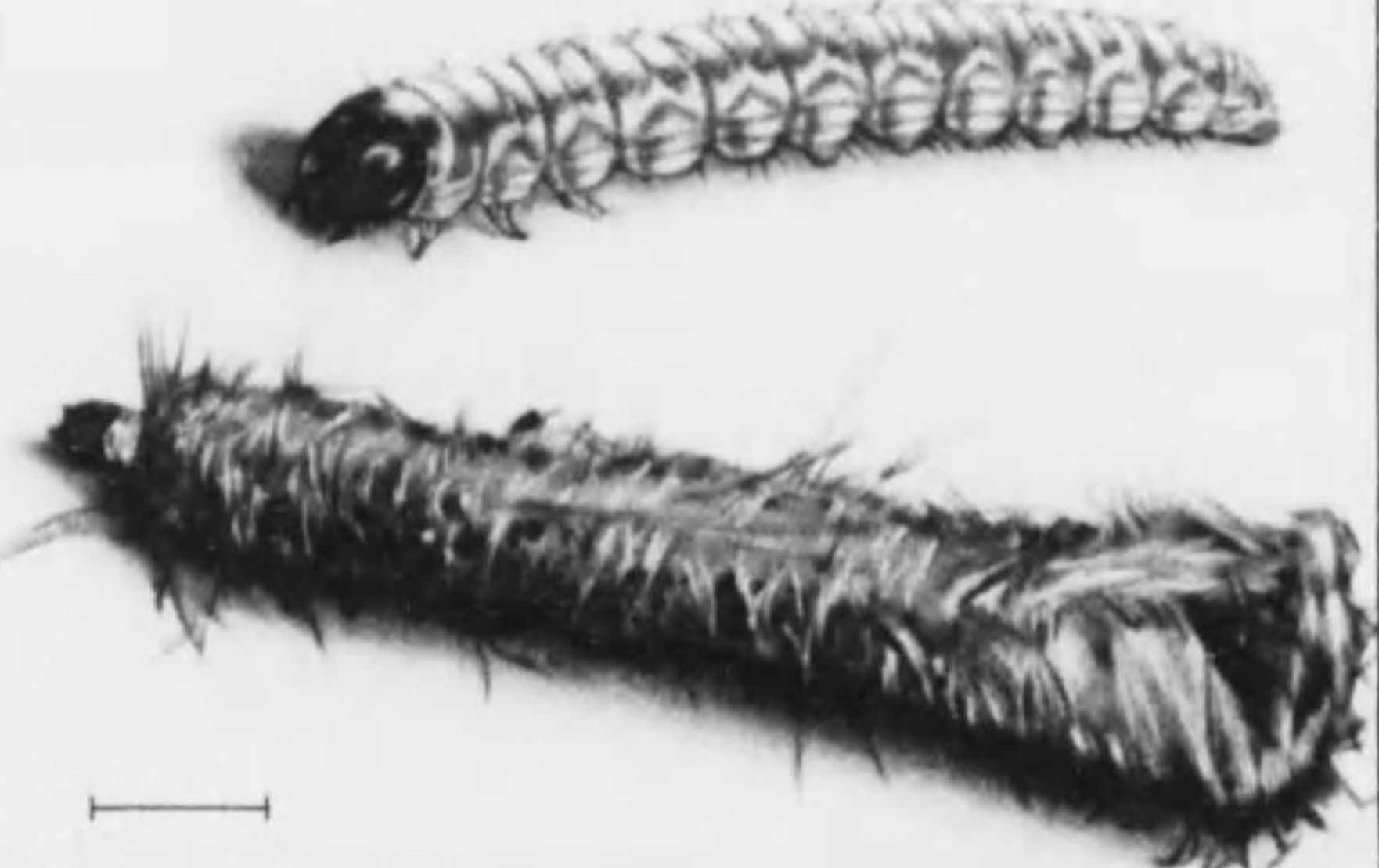



71



兵器害虫圖

<p>おつかるまめひ</p>	<p>が ん せ - も</p>	<p>が い こ</p>	<p>が い</p>	
				<p>成虫</p>
				<p>蛹</p>
				<p>幼虫</p>
<p>しのみも</p>	<p>しむたかそほがな</p>	<p>しむてたやちなこ</p>	<p>しむんばしのさあ</p>	

しむしぶおつかめひ	しむしぶおつかるまめひ	が ん せ - も	が い こ
			
			
			
しむひくんしのけた	しむんばしのみも	しむたかそほがな	しむてたやちなこ
